

1. 位置と立地(第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P14)

〈位置と現状〉

杉ノ上Ⅰ遺跡は紫波町古館地内にあり、紫波町の中心街のある日詰の北々西約2.5km地点付近に位置している。この付近は、北上川西岸部に発達する花巻段丘の東辺部にある。ここには西方の山地から東流する各小河川の開析によって形成された、いくつかの小さな谷と舌状の台地が見られる。舌状台地の先端部は、海拔107~112m前後を測り、まわりの低地水田面より5~6m高くなっている。この様な舌状台地の先端部は、古館駅前・中島・杉ノ上Ⅱ・Ⅲなど古代の集落に関連した遺跡が多く見られる。杉ノ上Ⅰ遺跡もその様な遺跡の1つであるが、すぐ南側には、谷を挟んで杉ノ上Ⅱ遺跡がある。また、その北側には、高水寺堰などの流れる低地を挟んで古館駅前遺跡・中島遺跡などの各遺跡が散らばっている。⁽¹⁾

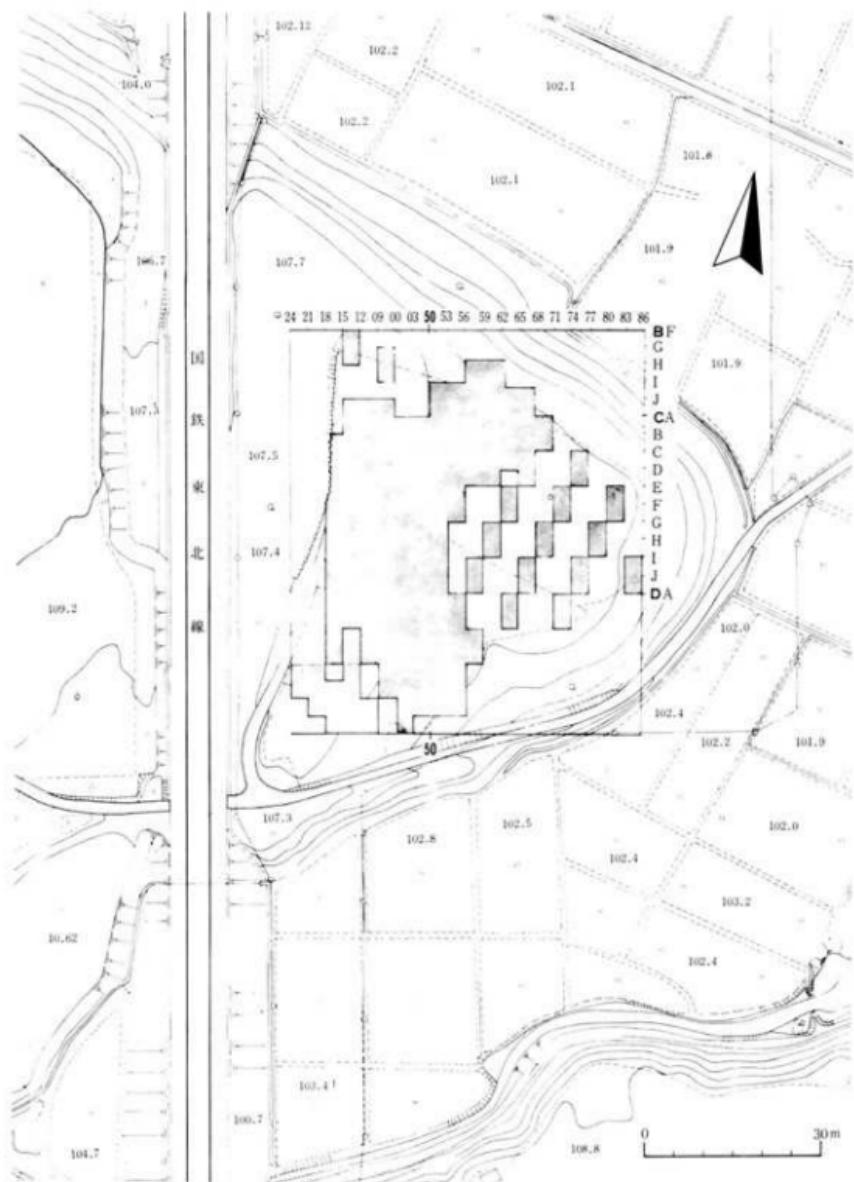
これらの遺跡の周辺部、特に南方部から西方部にかけては、城山・善念寺山・陣ヶ岡などで代表される独立丘陵性の地形が発達している。そして、これらの遺跡のある花巻段丘面の東側には、さらに低位の都南段丘面が広がっている。⁽²⁾

杉ノ上Ⅰ遺跡の所在地付近は、現在、リンゴを主体とした果樹園となっているが、一部は、畑地や宅地として利用されている。さらに、その周辺部には雑木林が見られ、周囲の低地一帯は水田として、広く利用されている。

〈周辺の遺跡〉

杉ノ上Ⅰ遺跡周辺の丘陵地や段丘辺縁部には、先に述べた遺跡以外にも、各期にわたる遺跡が数多く存在している。その中には、著名な遺跡も幾つか見られる。例えば、この遺跡の南東1.7km地点付近にある城山は、中世に紫波郡一帯を支配した斯波氏の本拠地として有名である。また、西北西に1.25kmほど離れた陣ヶ岡には、古代集落の跡がみられる。しかし、それ以上にこの遺跡は12世紀末、源頼朝が藤原泰衡追討のため、奥州に下向した時に布陣した場所として有名である。さらに、城山北麓の二日町新田付近の水田中からは、かつて多数の炉跡や古代の土器類が発見され、菅野義之助氏らによって、志和城の有力な擬定地として紹介されている。その北方の高水寺地区には、紫波地方の古代~中世末に至る代表的寺院と目される高水寺跡の存在が推定されている。その他、杉ノ上Ⅰ遺跡と同じ段丘の辺縁部一帯には、古代窯業史上注目すべき遺跡として、杉ノ上窯跡群が知られている。それとは直接に関係ないが、杉ノ上Ⅰ遺跡の南々西0.8km地点付近には、近世初頭、盛岡城築城の際、瓦を供給した瓦窯跡がある。

今まで述べて来た、各遺跡群の他に、杉ノ上Ⅰ遺跡の周辺には、福村・中田・古屋敷・八幡・高水寺・石田などの古代集落跡に関連した遺跡が多数散らばっている。そして、杉ノ上Ⅰ遺跡



第1図 杉ノ上Ⅰ遺跡グリッド配置図

の北々東3km地点付近には、志和城との関連で、しばしば話題に上る徳丹城跡が位置している。⁽³⁾

2. 調査の経過と方法

杉ノ上Ⅰ遺跡の中央部分は、東北本線の建設工事や複線化工事によって、南北に切断され、既に消滅している。今回、調査の対象となったのは、遺跡東半部に残る南北130m、東西85m、総面積約7200m²の区域である。ここは、東北新幹線とそれに付属する変電所の建設予定地になっているが、工事に伴ない、地盤の削平が行なわれる事になったため、事前の発掘調査を行なう事になったものである。

〈経過〉

調査は、昭和48年7月18日から、10月16日まで行なった。7月18日から7月24日までは、調査予定地内の雑物撤去を行なった。その後、7月24日から7月26日までは、調査区全体に関わる基準測量を行なった。この作業と併行する形で、7月25日からは調査区の西側より遺構検出のための粗掘作業を始めた。この作業は、真夏の炎天下、難行しながらも8月23日に大体終わった。以後、遺構検出部分とそれに関連した周囲の粗掘作業を、必要に応じて、隨時行なった。この間、溝類と焼土や木炭を含んだピット類の精査を8月27日から10月15日まで断続的に行なった。また、住居跡1棟が検出されたが、この遺構の精査は、8月27日から10月8日まで行なった。他に、柱穴建物と思われる遺構も発見されたが、その調査を10月4日から10月11日まで行なった。以上の経過を経て、10月15日から10月16日にかけて発見された各遺構の写真撮影を行ない、10月16日で一切の調査予定を終了した。

この間、調査員や通常作業員の他に、粗掘作業には紫波高校生多数、測量作業には岩手大学学生3名、教員2名の協力を得た。

〈方法〉

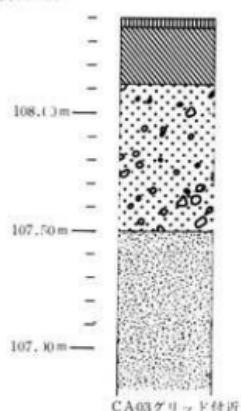
杉ノ上Ⅰ遺跡の調査は、全て序文2に述べた方法に準じて行なった。なお、この遺跡の調査では、平面測量の基準原点を新幹線中軸線上の東京起点479.16235kmの点から中軸線に垂直に24m東方に移動した点上に設け、CA50とした。さらに、この点を基準にして、先の中軸線に平行・垂直になる形で、3m×3m単位の方眼座標を設定し、調査区域全体の地割りを行なった。また、高度測量の基準原点は、海拔108.00mに統一するよう心がけた。その他、調査区の西側の一部については、遺構部分が既に土採り工事によって、削平されていたので、発掘を実施しなかった。

3. 調査の結果

[1] 基本層序 (第1図・第1表)

杉ノ上Ⅰ遺跡のある台地上の土層堆積状況についてみると、大よそ第1図および第1表に示した様になる。図中の1・2層は、耕作によって部分的に攪乱された、黒褐色表土層である。そのうち、1層には植生根が密集しており、弾力性に富んでいる。2層には、縄文時代以降～現代に至るまでの遺物が含まれており、この中に、各時期の生活面が埋没しているものと思われる。3層は、礫まじりの黄褐～黄灰褐色埴土層である。この層は、厚さ1m内外を測るが、人工遺物は含まれず、遺跡全体の主要な地山層をなしている。大部分の遺構は、この層の上面で検出されている。

海拔 108.70m



第2図 土層柱状模式図

第1表 杉ノ上Ⅰ遺跡土層注記

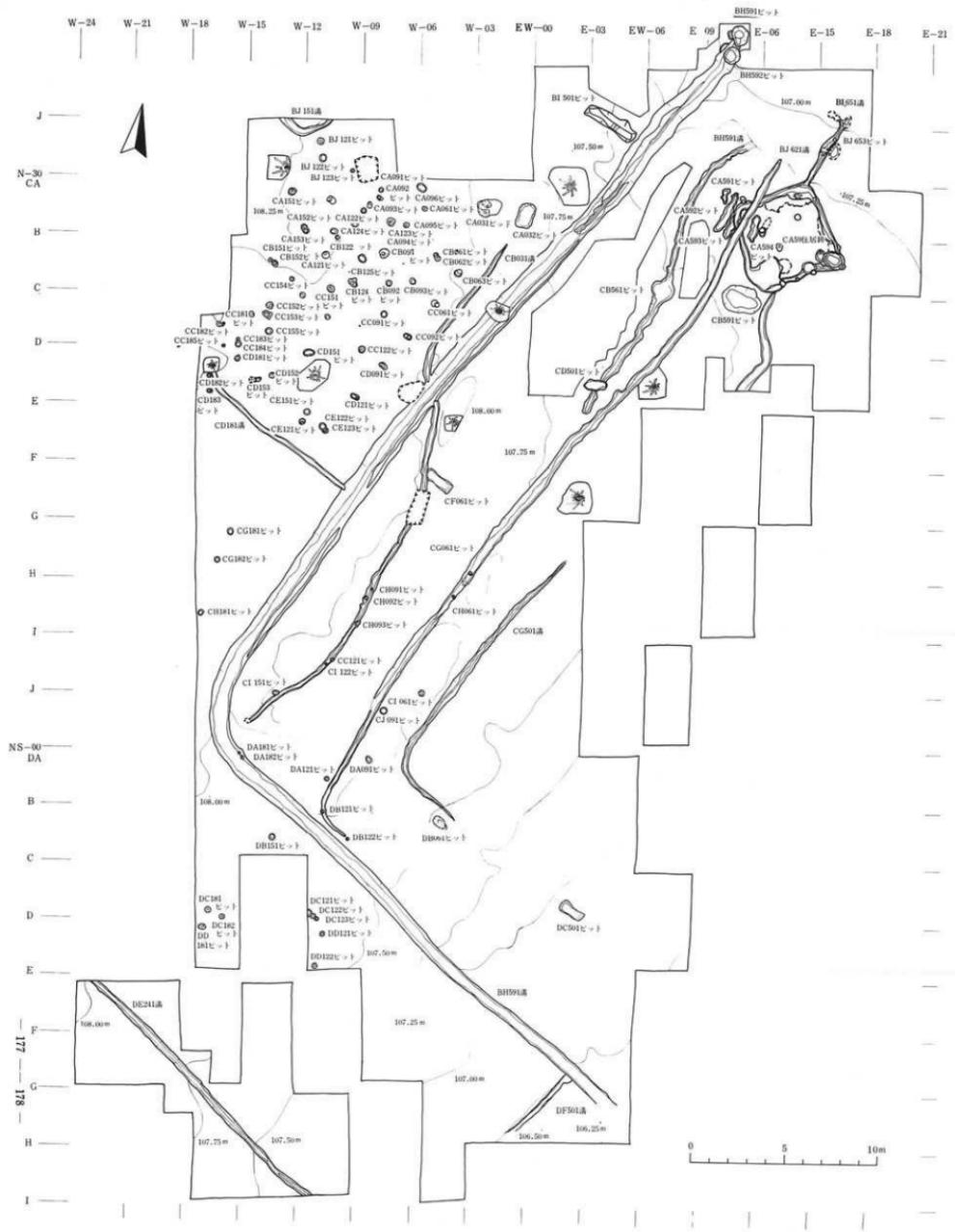
層番号	土色	土性	層厚	備考
1	暗褐色	腐植土	0.04～0.06m	表土
2	・	埴土	0.20～0.30m	遺物包含層、表
3	黄灰褐色	礫まじり埴土	0.10m	地山層 上
(4)	黄灰褐色	粗粒砂礫粘土 シルトまじり	3.50m	地山層 下

この3層の下には、礫と粘土とシルトの混合した4層が広がっている。⁽⁴⁾この層は、国鉄のボーリング調査によれば、遺跡付近で厚さ約3.5mを測る。3層中に掘り込まれた各遺構の底は、いずれも、この層までは及んでいない。

[2] 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構とその時期は、凡そ次の通りである。

住居跡	平安時代	1
溝	時期不明	11
焼土ピット	・	5
その他の中型ピット	・	7
孤立する柱穴状小ピット	・	16



第3図 杉ノ上I遺跡遺構配図

掘立柱建物及び関連する柱穴状小ピット群 1~2棟分(個数50~60)

次に、以上の遺構および出土遺物について、時期・性格別にその概略を報告したい。

(1) 住居跡

CA59住居跡(第3・4図、写真1-2、3、2-1)

【位置】 この住居跡は、発掘区域の北東隅にあり、BJ621溝北端部付近に位置している。

【形状・規模】 この住居跡は、一辺4.7~4.8m内外の隅丸方形の住居跡である。住居跡の南北辺は、北に対して約23°30'西に振れている。床面は、地下0.59~0.68m付近にあるが、調査時の土層観察では、その床面形式を確認出来なかった。ただ、覆土層の深さや他の遺跡の例から推定すると、竪穴式の床面を持つ住居跡である可能性が強い。

【埋土】 住居跡の床面を被う層は、大きく上下2層に分かれる。そのうち、上層は、腐植に富む黒褐色の軽埴土質の表土層で、植生根が多く含んでいる。その厚さは、0.1~0.2mを測る。さらに、下層部の埋土は、厚さ0.1m内外の黒味の強い黒褐色の軽埴土質の土層である。この埋土層は、堆積後にあまり攪乱されていないよう、その中からは、土師器などが出土している。

【重複関係】 この住居跡は、BJ621溝およびCA593ピット、CA594ピットの2つの溝状ピットに切られている。さらに、この住居跡は、CB621溝・BI651溝と重複し、CA592ピット・CB591ピットの2ピットとも近接している。しかし、その新旧関係は、いずれも埋土からは確認できなかった。ただ後者の2ピットについてはCA593ピットなどとの形態的な類似や位置関係から、それらと同様、この住居跡より後の遺構と推定された。

【付属遺構】 この住居跡に伴なう施設や工作の痕跡としては、下記のものが知られた。

(周溝) 住居跡の四周を周る溝は、上幅0.18~0.4m、下幅0.08~0.23mで、床面からの深さ最大0.07m内外を測る。その断面形は、大体鍋底状を呈している。

溝の埋土は、灰色がかかった黒色の埴壤土の単層で、その中には黄褐色粘土・炭・灰・焼土が少量混入している。この埋土内からは、土器片が3~4点出土している。

溝の性格としては、BI651溝との関連から、住居内に浸透する水を抜く排水溝とか、板壁や土留め材を埋め込んだ、溝状の掘り方などの可能性が考えられる。

(貼床) 貼床は、北壁際および東壁際、それにP_b・P_oとその東辺部の床面上にみられる。これらの部分のうち、P_o以外の場所では、地山の土が床面よりさらに0.01~0.05m掘り下げられており、そこに床面と同じ高さになるよう、ところどころに暗色を帯びた黄褐色の粘土が貼られていた。P_oでその一部に塊状の黄褐色粘土が叩き締められた形で、貼られていた。

(柱穴) この住居跡の主柱穴と考えられるピットが4個検出されている。これらの主柱穴は、南辺壁際の周溝部分に2個並列し、それに対応する形で、北辺の壁際寄りの床部に2個並列し、全体として、北西~南東方向に長い長方形をなす様に配置されている。各柱穴間の長さは、心

々距離で長辺方向で3.00m内外、短辺方向で1.8~2.0m内外をそれぞれ測る。なお、主柱穴のP₁~P₄は、平面がほぼ円形の円筒状ピットであるが、その個々の形状を検出時の上端長径、深さの順で数値を列記すると、以下のような。

P ₁	0.34m	0.08~0.1m	P ₃	0.26m	0.22m
P ₂	0.3m	0.12m	P ₄	0.34~0.28m	0.20m

これらの主柱穴の埋土は、柱心部分の黒褐色の埴壌土層を除いて、ほとんどが粘性の強い黄褐色~暗褐色の埴土質の土層である。いずれの層中にも、少量の焼土や炭化物・灰が一部に混入している。

以上の各ピットのうち、P₃はP₁や周溝、P₄はP₂や周溝と、それぞれ重複しているが、調査中の観察では、P₃とP₄の関係以外には新旧関係を確認出来なかった。P₃とP₁については、土層観察の結果、P₃の方がP₁よりやや新しい事がわかった。いずれにせよ、住居構造の一般的な性格から考えて、これらの重複遺構がP₃・P₄の柱穴と大きな時期差があるとは予想し難い。

なお、P₁~P₄のピット中からは、遺物がほとんど発見されていないが、わずかに、P₁の柱心部分埋土中から土器師の破片が1点出土している。

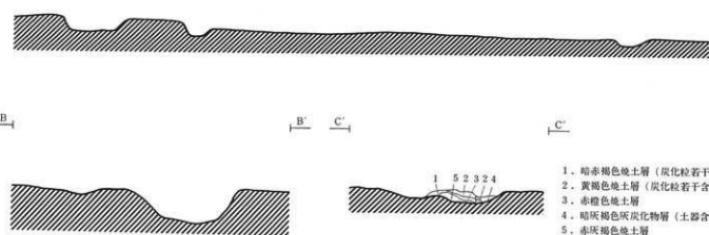
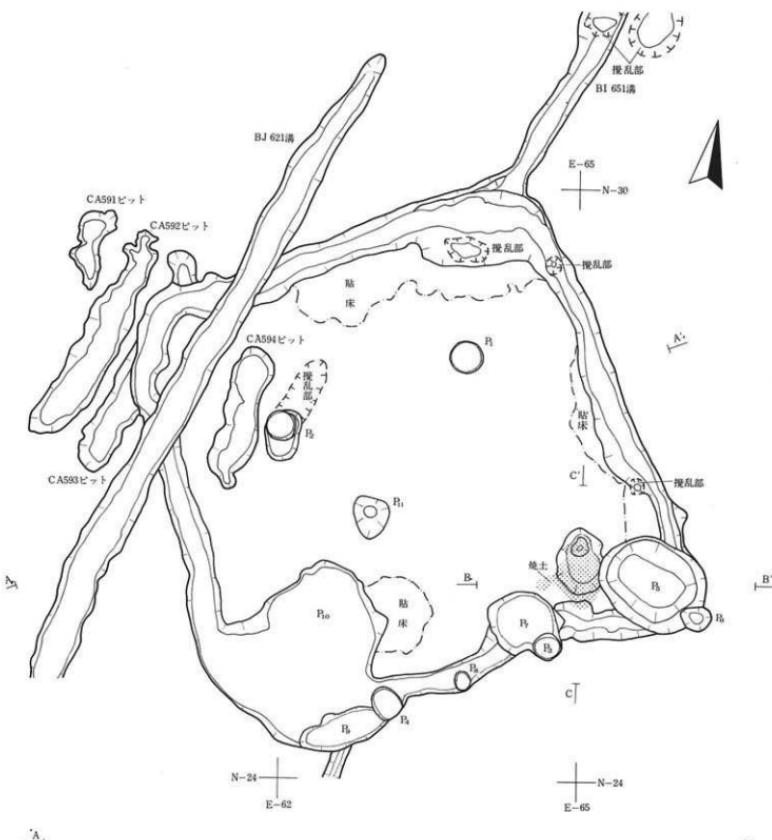
(焼土遺構) かまど、ないし地床炉と思われる遺構が、住居跡の南東隅付近で発見されている。この遺構はP₃・P₄の間に位置しており、その焼土範囲は東西0.54m、南北0.5mの規模を有する。そして、その中央部は、長径0.67m、短径0.46mの南北方向に長い平面不整梢円形の浅い皿状ピットになっており、床面よりの深さは0.04~0.12mを測る。

このピットの埋土は、上・中・下の3層に大きく分けられる。そのうち、中・下層は焼土層で、その上に人為的にもたらされたと思われる、厚さ0.04m内外の黄褐色粘土層が乗っている。さらに、これらの層の北側には、暗灰褐色の灰・炭化物の混合層が堆積している。上記の各層のうち、粘土層の性格としては、焼土ピット廃棄後の貼土、ないしはこの遺構の側壁の残骸などの可能性が考えられる。

なお、このピットに伴なう煙道などの付属施設は、まったく確認されなかった。また、焼土遺構と重複する遺構には周溝とP₃があるが、その新旧関係は、埋土状況から確認できなかった。

(入口施設) 住居跡南辺にある主柱穴、P₃・P₄の中間に小ピットP₆がある。このピットは、長径0.21m、短径0.17m、周溝底からの深さ0.06m内外の円筒形ピットである。P₆からP₃・P₄までの心々距離は、P₃~P₆間で約0.70m、P₄~P₆間で0.55mをそれぞれ測る。

このピットの性格としては、その位置関係から入口施設に関連した仕切り柱の柱穴のように思われる。しかし、調査時には、この点について、充分な証拠が得られなかった。また、同溝とこのピットの新旧関係も確認出来なかった。



Scale bar: 0 1 2 m

第4図 CA59住居跡平・断面実測図

1. 暗赤褐色焼土層（炭化粒若干含有）
2. 黄褐色焼土層（炭化粒若干含有）
3. 赤褐色焼土層
4. 暗赤褐色灰灰化物層（土器含有）
5. 赤褐色焼土層

(P₅・P₆・P₇・P₈・P₉・P₁₀・P₁₁) この住居跡内でP₁～P₄、P₈の柱穴以外にピットが合計7個検出されている。それぞれのピットの長径・短径・床面からの深さを数値で示すと下記のようになる。

P ₅	1.10m	0.88m	0.32m	P ₉	0.92m	0.34m	0.25m
P ₆	0.32m	0.26m	0.10m	P ₁₀	1.50m	1.30m	0.10m
P ₇	0.62m	0.60m	0.22m	P ₁₁	0.42m	0.35m	0.12m

• P₅ このピットは、住居跡内南東隅に位置し、北西—南東方向に長い平面橢円形の鍋底状ピットである。その埋土は判別しにくいが、上下2層に分類することが可能である。そのうち、上層土は軟質の黒色土となるが、下層土では、この上に木炭の小塊が5～6点含まれている。これらの埋土中には、他に遺物は含まれていないが、かまどに近接している事から、灰捨穴のような施設の跡と推定される。

• P₆ このピットは、P₅の南東隅に重複する平面・不整円形の掘り鉢状ピットである。その重複関係については、充分確認できなかった。遺物は出土していない。その性格も不明である。

• P₇ 住居跡内の南辺東寄りに位置している。鍋底状のピットである。ピット中の埋土は、2層からなる。そのうち、上層の埋土は、叩き締められた黄褐色の埴土層である。の中には、少量の灰・木炭の細粒・焼土が混じり、少數の土師器片が含まれている。下層の埋土は、軟質の灰混り黒色埴土質土層である。以上の埋土からみて、このピットの性格としては、かまどの灰捨場の様な施設の可能性が大きい。

• P₈ 住居跡内の南西隅にある、楕円形の浅い舟底形のピットである。埋土は、黒色土のなかに灰と黄褐色粘土ブロックが多量に混入した土の單層である。遺物としては、この埋土中から、完形品の壺1個体を含む土師器の壺が3点出土している。

P₉はP₁₀・P₁₁および周溝とそれぞれ切り合っているが、検出時の観察では、その重複関係を確認できなかった。従って、先の各遺構との新旧関係はよく解らない。ただし、住居跡の一般的な在り方からすると、P₉が少なくともP₄や周溝より先行するとは推定し難い。

• P₁₀ このピットは、住居跡内の南西隅に位置する、やや規模の大きな浅い平底のピットである。ピットの形状は、埋土の観察では充分確認できなかった。したがって、その正確な形状は不明である。

ピット内の埋土は、上・中・下の3層に大きく分けられる。そのうち、最上層は黒褐色のシルト質の土で、ピット内の大部分を埋め、遺物が含まれている。中・下層は、ピットの辺縁部に堆積しているが、いずれも人工遺物の見られない層である。そのうち、中層の埋土は、P₉の上層埋土と同じ焼土・木炭細粒・灰の混じった黄褐色の粘土層からなっている。下層の埋土は、

P₁の下層に対応する土層で、灰色がかった黒色の埴壙土質の土よりなっている。これらの土層は、いずれも自然堆積した様な状況を示している。ただ、その北側部分では貼床工事が行なわれ、塊状の黄褐色粘土層が叩き込まれ、整地されている。

なお、このピットとB₄やB₆、および周溝との重複関係は、充分確認されていて。しかし、住居跡の一般的な性格からすると、少なくともこのピットが周溝やP₁に先行する可能性は薄く、むしろ、それより若干下る時期が予想される。

・P₁₁ このピットは、住居跡内の中央部西寄りにある、浅い皿状のピットである。ピット内の埋土は、黒褐色のやや粘りの弱い埴土質の腐植土の單層で、その中には焼土・炭化粒・灰が少量含まれている。なお、ピット中からは、遺物が全く検出されなかった。

〔遺物出土状況〕 住居跡内の出土遺物は合計101点であるが、全て土器類である。その大部分は、全形修復の困難な細片である。これらの土器片は、主として、焼土遺構周辺の床面、および床面を被う埋土の下部から出土しているが、そのほかにも、周溝やP₁・P₄・P₆・P₁₀などのピットからも出土している。特に、P₆・P₁₀からは完形の壺2個体のほか、復元可能な壺3個体分が発見されている。

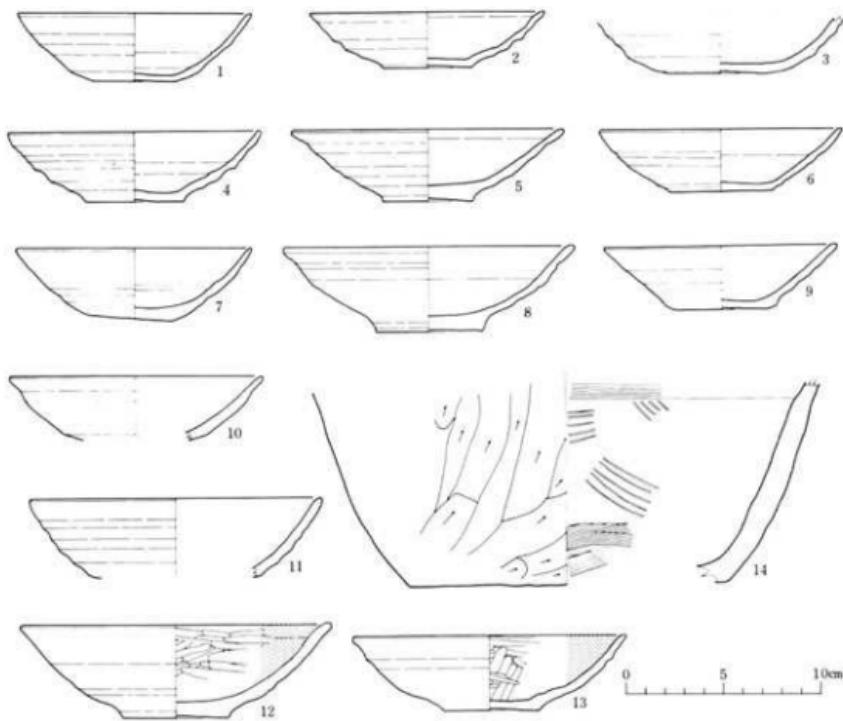
土器類の出土状況をみると、P₆・P₁₀などでは底部付近から正立した状態で出土しているのに対し、床部や周溝、それにP₁・P₄・P₆などのピットでは埋土中に粉れ込んだような形で発見されている。

さらに土器類は、この住居跡に付属する可能性のある、BI651溝の埋土中からも15点内外出土している。いずれも破片であるが、そのうちの14点ほどが土師器で、1点が須恵器である。これらの土器類は、主として、溝北端の木根攪乱部の埋土中から出土したものである（写真2-1・2）。

〔出土遺物〕 出土した遺物は、先に述べたように全て土器類であるが、その中には、土師器の長胴壺—A₁類、小型壺—A₂類、内黒の壺—A₃類、内外黒の壺—A₄類などの器形がみられる。また、須恵器は、破片がわずか3点出土しているに過ぎないが、の中には、大型の壺—B₁類や壺—B₂類が知られている。これらの土器類に伴なって、酸化炎焼成された非内黒の土師器、ないし土師器類似の軟質土器の壺—C₁類が出土している。その他、C₁類と同色であるが、硬質の土器の壺—C₂類の破片も見られる。

以上の各器種・器形の中で、資料数の最も多いのはC₁類に含まれる壺類で、合計52点出土している。さらに壺類としては、A₃類が5点、A₄類が7点、C₂類が7点それぞれ出土している。これらの壺は、全てロクロ成形されたものである。そのうち、実測可能の資料を第5図に掲げたが、1~11はC₁類の壺で、12・13はA₃類の壺である。なお、A₄・B₂・C₂類の壺には、図示し得る良好な資料がみられなかった。

1～13の環類は、いずれも底部に回転糸切痕を残すが、底部やその周辺部にヘラケズリ痕の見られない種類の環である。その胎土中には、石英質の砂が少量含まれているが、しまりが粗で焼成があまい。さらに、これらの環は全般的に器形の歪みが著しく、器面の風化・落剥がか



第5図 CA59 住居跡出土遺物実測図

なり進んでいる。なお、C₁類では、土師器の器壁にしばしば見られる黒班は全く見られない。器面の調整を見ると、大抵の個体の内外面に成形時の手擦れ痕が見られる。特にC₁類の2・3・4・5・11などでは、器壁の外面の凹凸が著しく、波状の段をなしている。そのほかに、調整としては、12・13で器壁の内面に黒化処理に伴なうヘラミガキ調整が認められる。ヘラミガキは、口辺部では横方向に施されているが、底部～体部下半では、底部から周囲に向かって放射状に施されているようである。

第2表 杉ノ上Ⅰ遺跡CA59住居跡出土坏類一覧表

図 番 号	写 真 番 号	焼成による 土器区分	口 径	底 径	器 高	色 調	底部切離し 技	胎 土	備 考
5-1	10-1	土師質上器	12.0cm	4.4cm	3.5cm	に赤い黄澄	回転条切り	砂 多 し ま り 相	R _b より出土
2	10-10	*	12.0	4.6	2.9	*	*	*	-
3	-	*	約13.0	5.0	約3.2	*	*	*	-
4	10-2	*	13.0	5.0	3.6	に赤い澄	*	*	-
5	10-3	*	14.0	4.6	3.7	内 に赤い澄 内 灰褐色	*	*	R _b より出土
6	10-4	*	12.4	5.2	3.2	浅 黄 澄	*	*	R _b より出土
7	10-6	*	12.2	4.4	3.7	*	*	*	R _b より出土
8	10-7	*	16.0	5.4	4.4	灰 褐色	*	*	BJ651溝より出土
9	10-8	*	12.0	4.6	3.3	灰 白	*	*	R _b より出土
10	-	*	13.0	?	3+α<4	浅 黄 澄	?	*	-
11	-	*	15.0	?	4+α<5	*	?	*	-
12	10-9	土 師 器	16.0	5.4	4.8	内 黒色処理 外 灰褐色	回転条切り	*	R _b より出土
13	10-5	*	12.0	4.8	3.9	内 黒色処理 外 浅黃澄	*	*	-
14	-	須恵器壺	24.0	15.5 (推定)	11.0	灰	-	緻密でかたい	BJ651溝より出土

以上、述べてきた坏類の器形上の特徴をみると、これらの坏は、A₃・C₁の類別にかかわりなく、いずれも器高が低い。その上、底が小さく、口が大きく開いており、その器壁は直線状、ないしはやや内弯気味に、大きく外傾している。そのため、器形全体のイメージは坏というより、むしろ底の深い皿に近くなっている。

以上のような特徴を有する坏類に類似した坏は、北上市鬼柳西裏、金ヶ崎町西根、江刺市瀬谷子古窯跡などの各遺跡で出土している。⁽⁵⁾ ⁽⁶⁾

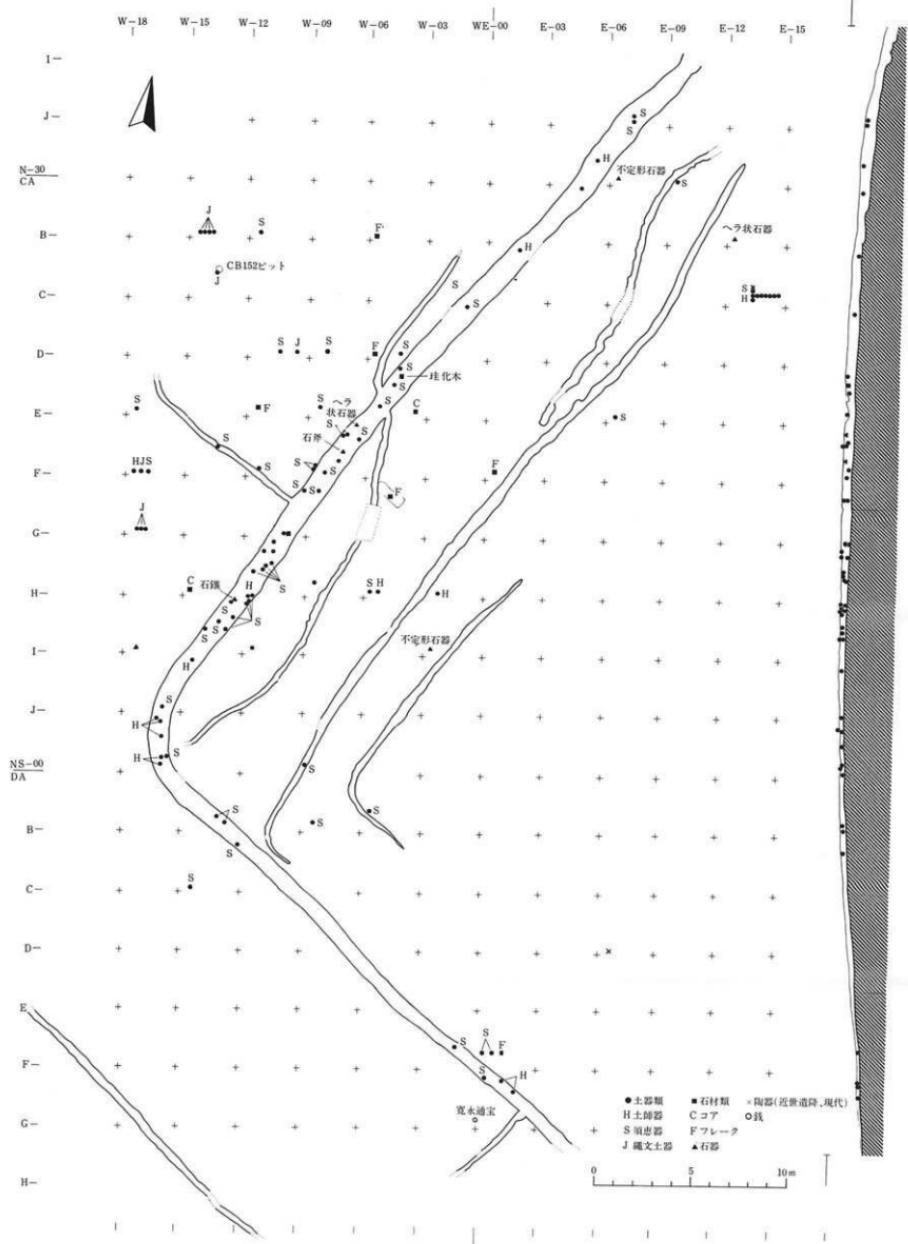
14は、B₁類に含まれる平底の壺ないし壺の胴体下部破片である。この個体は、巻き上げ技法によって成形されたものと思われ、平底で、その器壁の外面には縦方向のヘラケズリがなされている。そして、器壁内面の底部周辺には、横方向の指ナデ痕が見られる。さらに、その上部には、ヘラ状工具によるナデ痕が見られる。なお、叩き目のような痕跡は認められない。

また、以上述べてきた遺物のうち、第5図8と14はBJ651溝中の出土遺物であるが、先に述べた理由により、一応、CA59住居跡の遺物に含めて説明を加えた(以上、出土遺物に関しては第5図、第2、7表、写真8-1~10)

(2) 溝類

BH591溝(第3・6図、写真2-2、3、3-1、2)

【位置】 この溝は、発掘区域の北端から南端にかけて西を背にして、「く」の字状に屈曲しながら走る溝である。その東側には、BJ591溝・621溝などの溝やCA59住居跡、その他のピット



第6図 溝類および各グリッド内の遺物出土状況図およびBH591溝と溝中の遺物投影図

などの遺構がある。さらに、その西側には、CA151・CB181両建築物跡やそれに関連した小さなピット群が散らばっており、他にBJ151などの溝もみられる。

〔形状・規模〕 この溝は、長さ約75.6m、上幅0.56~1.80m、底幅約0.2~0.6m、検出面からの深さ0.13~0.58mを測り、U字形ないし浅い鍋底形の断面形を呈している。その規模は、今回の調査で発見された溝のうちでは最大である。

また、溝は「く」の字形の北半部分で、溝の壁面にテラス状の平坦面を伴なうが、この平坦面は東側壁面のみに認められ、その深さは遺構検出面より0.13~0.2mで、長さ約0.25mを測る。

〔埋土〕 埋土は黒褐色埴壤土の単層であるが、場所によっては若干の礫が混入する。

〔重複関係〕 「く」の字形の中央付近より北側で、CB031溝・CD181溝の各溝と切り合っているが、調査時の土層観察では、両者の新旧関係を確認できなかった。しかし、CD181溝との関係は、BH591溝の西壁の一部にCD181溝からの流水で浸食された痕跡が認められ、両者がある時期、共存していた可能性が推定される。

〔遺物出土状況〕 BH591溝の埋土中からは、合計57点の遺物が出土している。そのうちわけをみると、石器類が3点、石材が2点をそれぞれ占め、残り48点は、全て平安時代の土器類で占められている。この土器類の中には、須恵器の壺・甕類の破片が37点、土師器の壺の破片が5点みられる。これらの遺物は、溝の全域から出土しているが、その大半は、溝の屈曲部の北側区域内から出土している。その出土レベルは一定しないが、溝の北端寄りの場所では、埋土上層部に集中する傾向がみられる。そして、遺物のほとんどは、自然的に埋土中に紛れ込んだ形で埋没しており、遺物の平面分布状況には規則性が認められない(第6図)。

〔出土遺物〕 この溝から出土した遺物の概況を見ると下記の様なものが知られる。

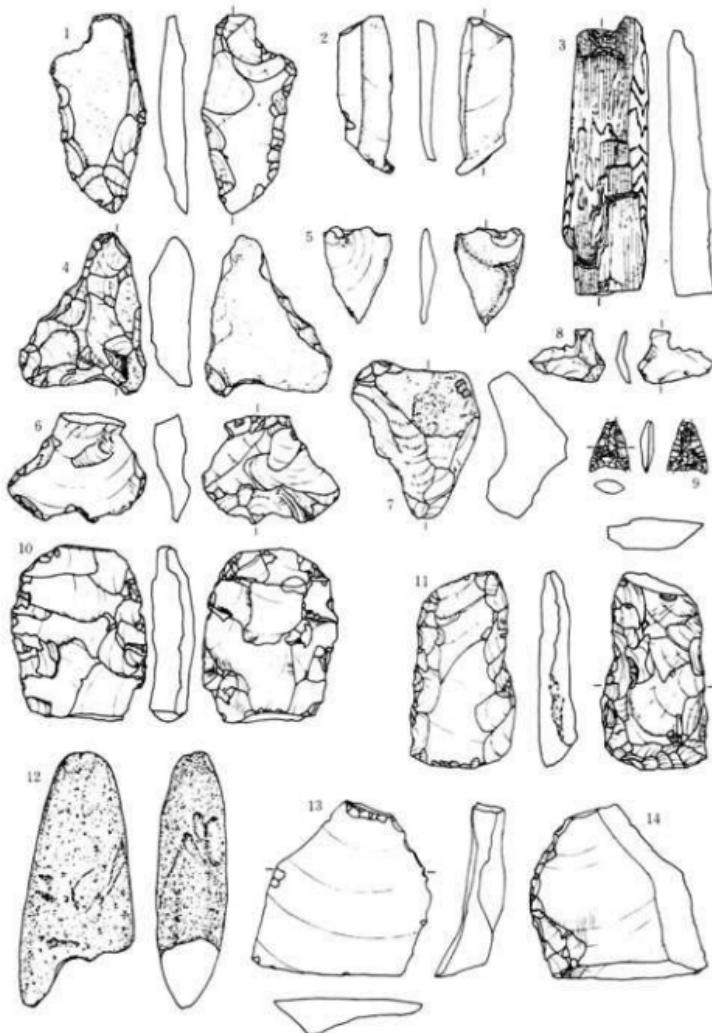
A 石器

石器は3点あるが、いずれも埋土中から単独に出土したものである。時期的には、グリッド内から出土した縄文土器片との関連から、ほぼ同時期の遺物と推定される。

・石鎌 第9図9は、BH591溝の中央部付近から出土した打製石鎌である。この石鎌は、底辺が若干えぐれた二等辺三角形を呈しており、その先端部は破損されている。そして、その全体に細かなチッピングが施され、凸レンズ状の横断面を呈する様に調整されている。

・打製ヘラ状石器 11は、打製のヘラ状石器の完形品で、やはり溝の北半部から出土している。この石器は、やや厚みのあるたて長のフレークを四辺形状に打撃加工したもので、横断面は、薄いカマボコ状を呈している。そして、2つの長辺と1つの短辺にあたる部分には、やや粗い打ち欠きによって、刃部が形成されている。刃はいずれも片刃であるが、刃部形成時の主要加工面は、長辺部分と短辺部分では逆になっている。

・磨製石斧 12は磨製石斧であるが、やはり、溝の北半部で出土したものである。この石斧は、



第7図

調査区域内出土の石器石材実測図



中膨れした隅丸長方形状の横断面を有する両刃の斧であるが、器面の風化が著しいため、稜が丸味を帯び、一見、乳棒状石斧のように見える。

B 石材

BH591溝の北半部から2点の石材が出土している。そのうち、第9図2は縦長の四辺形状、

石 器 第3表 杉ノ上Ⅰ遺跡出土石器一覧表

図番	版号	写番	真号	出土遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質
8-1	9-2	CA56	グリッド		不定形刃器	7.50	3.60	0.90	26.7	硬質頁岩
9	9-3	BH591溝			石 磨	1.95	1.50	0.50	1.1	珪質頁岩
10	9-2	CA62	グリッド		石ヘラ状石器?	6.65	5.05	1.60	64.6	硬質頁岩
11	9-4	BH591溝			石ヘラ状石器	7.40	4.00	1.25	46.3	石質凝灰岩
12	*	*			磨製石斧	9.70	4.30	2.70	13.9	粗粒凝灰質砂岩
13	9-3	CH03	グリッド		不定形刃器	6.65	6.75	1.50	66.2	珪質頁岩

石 材

図番	版号	写番	真号	出土遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質
8-2	9-2	BH591溝			フレーク	5.90	2.05	0.65	6.8	凝灰質硬質頁岩
3	9-4	*			原石	10.50	3.20	1.50	66.7	珪化木
4	9-2	CG15	グリッド		コア	6.10	4.75	1.65	54.9	粘板岩
5	*	CC06	*		フレーク	3.65	2.60	0.60	4.7	凝灰質硬質頁岩
6	*	CE50	*		フレーク	4.25	5.20	1.20	18.1	硬質頁岩
7	9-3	CD06	*		コア	5.95	4.90	2.40	66.7	珪質細粒石質凝灰岩
8	9-2	CF061	焼土ピット		フレーク	2.00	2.85	0.30	1.4	珪質頁岩

薄手のフレークであるが、剥離後の加工痕は認められない。3は珪化木の破片であるが、人工的に打ち欠かれたものか、よく解らない。しかし、花巻市の高松遺跡などで珪化木が石器の素材として利用されている例もあるので、一応、石材と考えておく事にする。

C 土器類

(須恵器) BH591溝から出土した須恵器の破片は39点であるが、その代表的なものを、第7図の拓本に示した。文様上の特徴から見ると、CA59住居跡のものより幾分古い様に見える。

・大型甕・壺類 第7図のうち、1~8、10~13、17~18、22~24、28は大型甕ないし壺類の破片である。そのうち、10~13・24は口辺部の破片であるが、それ以外は、全て胴体部の破片である。

破片からこの器種の形態的な特徴を見ると、その口辺部は外反しながら外傾し、上端がまくれ込んだ「折り返し」口縁になっている。さらに口辺部外面は、無文の場合もあるが、鋸歯状の横方向の平行沈線文が1~4条めぐる場合もある。そして、胴体部の器壁外面には、大抵、平行線状ないし同心円状の叩き目痕が見られる。その内面は無文の場合もあるが、青海波状の叩き目の見られる例もみられる。これらの破片は硬く焼きしまり、大抵、灰色を帯びているが、中には、赤橙色ないし黄灰色の破片も少數混じっている。

・長頸瓶類 第7図9・14~16・19~21・25~27・29は形状不明な細片であるが、大部分は長

頸瓶類の破片と思われる。そのうち、16・25を除いて全て胴体部の破片である。これらの土器片は、いずれもロクロ成形の痕跡を有し、器壁は一般に、先に掲げた大型の甕・壺類の破片より薄手であるが、色調は全て灰色で、やはり硬く焼きしまっている。

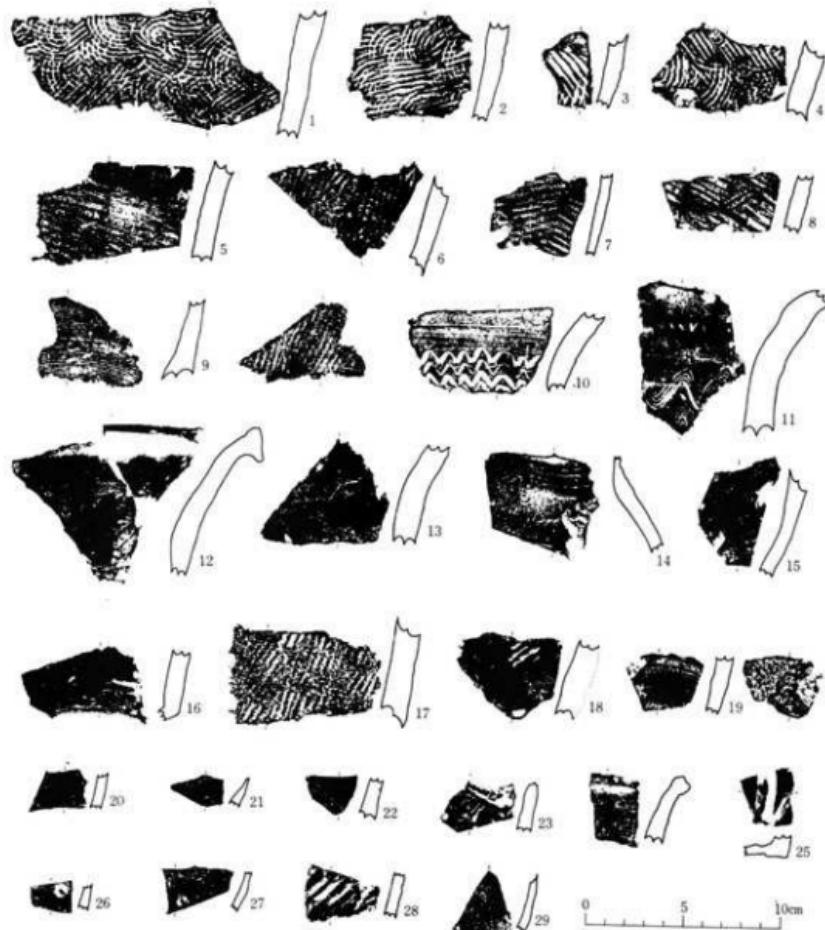


図8 図 BH591溝出土土器類拓本 および断面実測図

(土師器) 土師器の破片は12点出土しているが、そのうち6点は、土師器の甕類の胴体部破

須恵器

第4表 BH591溝出土土器片一覧表

拓 番 号	写 真 番 号	出土遺構	器 形	残 存 部 位	残存部 最大長	残存部 最小長	残存部器厚	色 調	製作技法・文様構成上の特徴	
									外 部	内 部
7-1	10-1	BH591溝	大 垂 体 部	6.8cm	14.4cm	1.1~1.2cm	表 濁灰~黒灰 中 白灰	タタキ目		?
2	*	*	*	*	5.4	4.8	0.8~0.9	表 外灰、内濃灰 中 暗赤褐	*	自然釉
3	*	*	*	*	2.4	4.1	0.8~1.0	表 外灰、内濃灰 中 黑	*	指メレ痕
4	*	*	*	*	4.5	7.4	1.1	表 外黒褐、内濃灰 中 黑	*	ナデ痕
5	*	*	*	*	7.1	7.9	1.0	表 外暗赤褐、内濃灰 中 暗赤褐~濃灰 中 黑	*	—
6	*	*	*	*	5.3	7.9	0.9	表 外灰、内濃灰 中 黑	*	タタキ目
7	*	*	*	*	4.7	5.5	0.5+α	表 外濃灰 中 黑	タタキ痕	—
8	*	*	*	*	6.0	6.0	0.7	表 濁灰 中 暗赤褐	タタキ目	なし
9	*	*	垂壺類	*	4.7	6.3	0.9~1.0	灰黒	*	刷毛目条痕、燒成不良
10	10-2	*	大 垂 口沿部	5.5	7.4	1.2	灰	横ナデ痕+鋼削状沈線文3条	横ナデ痕	—
11	*	*	*	*	7.6	5.6	1.4~1.5	表 黒灰 中 黑	*	*
12	*	*	*	*	7.5	6.5	1.0~1.2	表 黒灰 中 暗赤褐	*	*
13	*	*	*	*	5.6	6.7	1.1~1.3	表 濁灰 中 暗赤褐	*	自然釉、風化痕
14	*	*	*	耳 部	5.2	6.2	0.3~0.8	表 黒灰 中 黑	*	*
15	*	*	垂壺類	体 部	3.4	4.9	0.7~0.9	表 黒灰 中 黑	タタキ目、自然釉少々	灰カブリ風化痕
16	*	*	*	底 部	6.1	3.9	0.9~1.1	灰	横ナデ痕(クロ?)	?, 灰カブリ風化痕
17	*	*	大 垂 体 部	5.3	7.9	1.2	表 外黒灰、内黒灰 中 白灰	タタキ目(風化大)	タタキ目(浅い)	—
18	*	*	*	底 部	4.5	5.6	1.0+α	灰	剥離のため不明	タタキ目
19	10-5	*	*	体 部	3.1	4.1	0.6~0.7	灰	タタキ目+灰カブリ痕	横ナデ痕
20	*	*	垂壺類	*	3.4	2.1	0.4	灰	ヘラケズリ痕、自然釉(一部)	*
21	*	*	*	*	1.7	3.1	0.5	灰	?	剥離のため不明
22	*	*	*	*	2.3	2.7	0.6	灰	ヘラケズリ痕(タテ方向)、 自然釉(瓦隙)	自然釉風化痕
23	*	*	長頭 瓶?	耳 部	2.7	3.5	0.6~0.7	灰	?	横ナデ痕
24	*	*	大 垂 口沿部	4.3	2.5	0.6~0.7	表 外黒灰、内黒灰 中 白灰	横ナデ痕	*	—
25	*	*	垂壺類	底 部	3.1	2.2	0.4~1.1	灰	スレ痕、自然釉	剥離のため不明
26	*	*	*	体 部	2.1	2.5	0.3~0.5	表 外黒灰、内濃灰 中 暗赤褐	横ナデ痕、自然釉	横ナデ痕
27	*	*	*	*	2.2	3.6	0.4	表 外白、内灰 中 白灰	灰カブリ痕	*
28	*	*	大 垂	*	3.7	4.2	0.4	灰黃	タタキ目	— 燃成不良
29	*	*	垂壺類	*	3.0	3.2	0.5	灰	横ズレ、自然釉、灰風化痕	横ナデ痕

片である。いずれも 2 cm × 2 cm 内外の細片なので、その全体的な特徴は良く解らない。残りの 5 点は内黒環類の細片であるが、そのうち 4 点は体部破片で、1 点は底部破片である。底部破

片には、外面全体に菊花状の刻みが付けられ、さらに高台の付けられた痕跡が認められる（第7図、第8図2・3・9・11・12、第3、4、7表、写真7-2-4、8-1-2-5）。

BJ651溝（第3・6図、写真3-2）

〔位置〕 この溝は、調査区域内の北東隅に位置し、ほぼ東北方向に伸びている。近くには、CA591住居跡とBJ591溝、BJ621溝の2条の溝がある。

〔形状・規模〕 この溝は長さ約4.0mで、検出面上での上幅0.24~0.48m、底巾0.1~0.2m、深さ0.04~0.13mをそれぞれ測る。断面形は浅い皿状の形を呈する。溝の北端部は、木根による擾乱のため、正確な形狀は不明である。

〔埋土〕 黄褐色粘土ブロックと灰を若干含む黒褐色土の单層である。場所によっては、この層の上に軟質の黒褐色土が乗っている。

〔重複関係〕 溝の南端部はCA59住居跡と切り合っているが、土層の堆積状況から、両者の新旧関係を明らかにすることはできなかった。

〔出土遺物〕 土師器の破片5点が溝や擾乱部埋土中から、点在した形で出土している。その中には、第5図8のような土師質土器の壺や、14のような須恵器の大型の壺の破片がみられる。（詳しくは、CA59住居跡〔遺物出土状況〕、〔出土遺物〕の項を参照のこと。第5図8-14、第2表、写真6-7）。

〔性格〕 この溝がCA59住居跡に伴なう、排水溝などの付属遺構なのか、CB621溝の一部をなすものなのか、あるいは他の遺構から独立した単独遺構なのか、調査時点では確認できなかった。ただ、この溝の北端部から出土した土器類は、CA59住居跡の土器類とほぼ共通している。その事から推定すると、両遺跡が時期的に共存する可能性が大きい。

BJ151溝（第3・6図）

〔位置〕 この溝は、調査区域内の北西隅に位置している。その周辺部には、BJ121ピット・122ピットなどのピットが散在している。

〔形状・規模〕 溝は、発掘区域の外側から半円を描くように、南へ突き出ている。その規模は、検出面上で上幅0.16~0.46m、底幅0.08~0.32m、深さ0.06~0.11mで、検出部分の全長2.64mを測る。断面は、浅い皿底状を呈している。溝の全体形狀は、溝の大部分が発掘区以外に延びているため不明である。

〔埋土〕 黒褐色の埴壤土の单層である。

〔重複関係〕 検出部分では、普通の重複が認められない。

〔出土遺物〕 遺物は発見されなかった。

BJ591溝（第3・6図、写真3-1・2）

〔位置〕 調査区の北東に位置し、BH591溝とBJ621溝に挟まれて、S字状に緩く蛇行しながら

ら南北に長く延びている。

〔形状・規模〕 溝は、検出面上で上幅0.24~0.56m、底巾0.1~0.25m、深さ0.01~0.11mで、全長約16.08mを測る。断面は、浅い皿状を呈している。溝の北側部分は浅くなり、輪郭が不明瞭になっているため、正確な形状は不明である。

〔埋土〕 黒褐色土を主体とした、2つの層よりなる。そのうち、上層は粘性が強く、下層は幾分砂を多く含む。なお、下層に褐色粘土の小塊が混入する場合もある。

〔重複関係〕 溝は、中央部分でCB561ピットと、さらに南寄りの部分でCD501ピットと切り合っているが、埋土の堆積状況からは、両者の新旧関係を確認できなかった。

〔出土遺物〕 遺物は発見されなかった。

BJ621溝（第3・6図、写真1-3、2-3、3-1・2、）

〔位置〕 この溝は、発掘区の中央部を北東から南西方向に伸びている。

〔形状・規模〕 溝は皿状の断面を呈する細い溝で、緩いうねりを見せながらも、全体的にはほぼ直角に延びている。そして、その南端の部分ではほぼ直角に折れ、南東方向に向きを変えている。長さ36.72m、上幅0.12~0.72m、底幅平均0.1~0.3m、深さ0.01~0.15mを測る。

〔埋土〕 黒褐色埴塙土の単層である。

〔重複関係〕 溝は、北寄り部分でCA59住居跡と切り合っている。土層観察の結果、BJ621溝の方が新しいことがわかった。溝の中央部より南側の部分では、GG061ピット、CH061ピット、CB121ピットの各小ピットと重複関係にあるが、調査時点では、溝とピットの新旧関係を明確にすることはできなかった。

〔出土遺物〕 須恵器1片が出土している。

CB031溝（第3・6図、写真2-2・3、3-1・2）

〔位置〕 この溝は、発掘区の南北に緩く「S」字形を描くように伸びた溝である。BH591溝や、北側の小ピット群と近接している。

〔形状・規模〕 長さ35.9m、検出面上での上幅0.1~0.4m、底幅0.1~0.2m、深さ0.01~0.15mを測り、皿状の断面形を呈している。

〔埋土〕 黒褐色埴塙土の単層である。

〔重複関係〕 溝の北側でBH591溝と、南側ではCG061ピット、CH061ピット、DB121の各小ピットと切り合っているが、調査時の土層観察では、遺構相互の新旧関係を明確にすることはできなかった。

〔出土遺物〕 発見されなかった。

CB621溝（第3・6図、写真1-3、3-2、）

〔位置〕 この溝は、発掘区の北東隅にあり、CA59住居跡の南側に接している。この溝は、

緩く「S」字状にカーブして南北に伸びている。

〔形状・規模〕 この溝は、発掘区域内で6mの長さを有し、検出面上で上幅0.16~0.56m、底幅0.1~0.4m、深さ0.06~0.15mを測る。その断面形は、浅い皿形を呈する。

〔埋土〕 黒褐色で、粘性の乏しいシルト質土よりなる。場所によっては、この土に粘土がブロック状に混る層がその下に堆積している。

〔重複関係〕 「S」字状の北側部分で、CA59住居跡と重複しているが、その新旧関係は確認できなかった。しかし、埋土全体の様子からみると、BJ621溝と同様、この住居跡より新期の造構と推定された。

〔出土遺物〕 発見されていない。

CD181溝（第3・6図、写真2-3、3-2）

〔位置〕 この溝は、発掘区域の西側のやや北寄りに位置し、北西一南東方向に直線状に伸びる溝である。溝の南東端はBH591溝と接し、その北東部には、掘立柱建物に関連した柱穴状ピット群が散らばっている。

〔形状・規模〕 溝の規模は、長さ9.36m、検出面上での上幅0.24~0.32m、底幅0.12~0.25m、深さ0.03~0.09mで、浅い皿状の断面形を呈する。

〔埋土〕 黒褐色埴壤土の単層である。

〔重複関係〕 BH591溝の項でも述べた様に、BH591溝に接する部分の土層観察からは、新旧関係を明らかにすることできなかった。しかし、BH591溝の西壁部分に、CD181溝からの流水によって浸食を受けた痕跡が認められる事から、ある期間、両造構が共存した可能性が強い。

〔出土遺物〕 遺物としては、埋土中から須恵器片が1点出土している。

CG501溝（第3・6図、写真2-3、3-1・2）

〔位置〕 調査区域内の中央付近に位置している。

〔形状・規模〕 この溝は、BH591溝と方向を同じにした「L」字状の溝であり、長さ18.0m、検出面上での上幅0.08~0.56m、底幅0.08~0.16m、深さ0.01~0.19mを測る。

〔埋土〕 黒褐色埴壤土の単層である。

〔重複関係〕 他の造構との切り合い関係はない。

〔出土遺物〕 発見されなかった。

DE241溝（第3・6図、写真2-3）

〔位置〕 この溝は、発掘区域の南西隅に位置しており、BH591溝の南半部に平行しながら、北西一南東方向に直線上に延びている。

〔形状・規模〕 溝は、検出部分で長さ16.8m、検出面上で上幅0.24~0.48m、底幅0.08~0.24m、深さ0.05~0.14mを測り、鍋底状の断面形を呈している。

〔埋土〕 黒褐色埴壌土の単層である。

〔重複関係〕 他の造構との切り合いは見られない。

〔出土遺物〕 発見されなかった。

DF501溝（第3・6図、写真2-3）

〔位置〕 この構は、発掘区域南東端にあり、BH591溝に直角に接している。

〔形状・規模〕 溝は、長さ4.4m、検出面上で上幅0.2~0.44m、底幅0.08~0.44m、深さ0.04~0.05mを測り、皿状の断面形を呈している。全般的に非常に浅い溝であるが、特にその南西端では、ほとんど範囲が不明になっている。

〔埋土〕 黒褐色埴壌土の単層である。

〔重複関係〕 この溝は、BH591溝と切り合っているが、新旧関係は確認できなかった。

〔出土遺物〕 発見されていない。

(3) 焼土ピット類

CA031ピット（第3図・第9図5）

〔位置〕 このピットは、BH591溝の西岸にあり、BI501ピットの南西部に位置している。

〔形状・規模〕 ピットの平面形は、東西方向に長い楕円形の深い皿状ピットであるが、その西側部分では、底面の一部がさらに摺り鉢状に落ち込んでいる。ピット全体の規模は、検出面上で長径約1.3m、短径0.72~0.78m、底部で長径1.2m、短径0.8mである。検出面からの深さは、深い部分で0.01m、落ち込み部分で約0.06mを測る。そして、ピットの底面は、一部が火を受け赤化している。

〔埋土〕 埋土は2層よりなる。そのうち、第1層は炭化物を含んだ暗褐色の埴土質の土層で、一部に石が混入している。第2層は、壁際の茶褐色土層でバサバサしている。

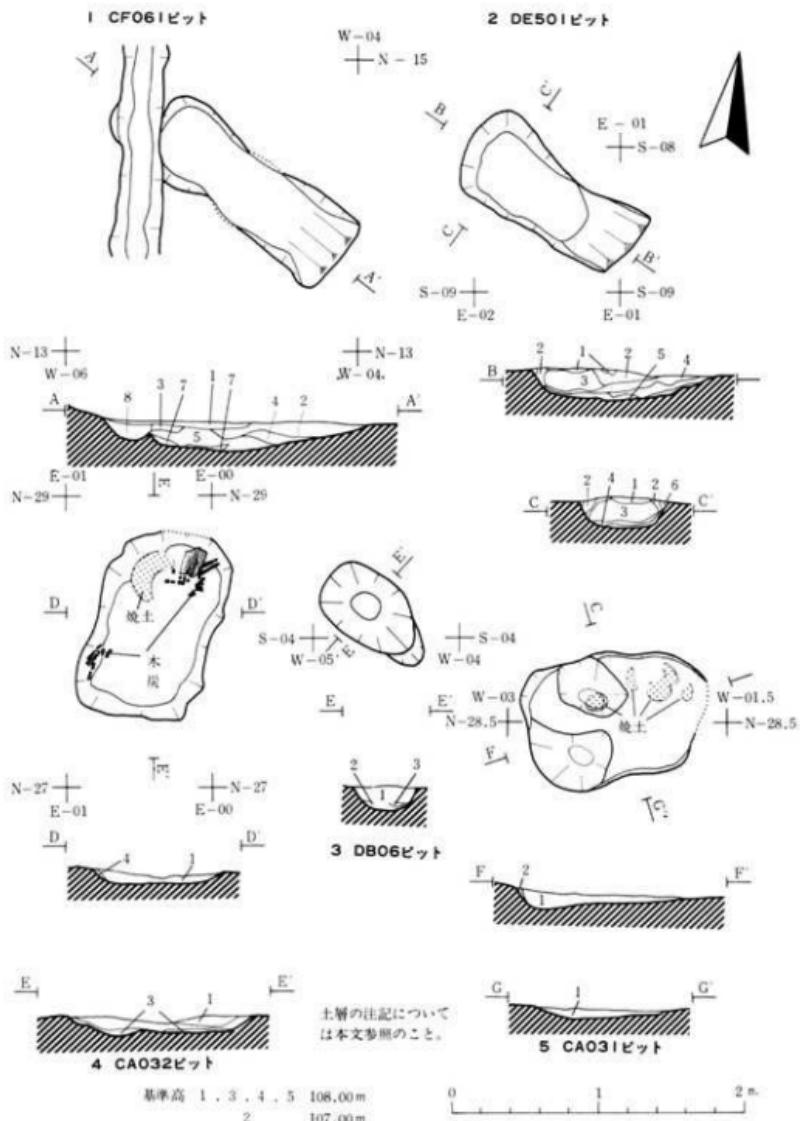
CA032ピット（第3図、第9図3、写真4-3）

〔位置〕 このピットは、CA031ピットの東側に位置している。

〔形状・規模〕 このピットは南北に長い平面隅丸長方形の深い皿状ピットである。その規模は、検出面上で長き約1.35m、幅0.98~1.15m、底部で長さ1.16m、幅0.64mで、検出面からの深さ0.1mを測る。ピットの底部は火を受け、一部赤化している。また、ピットの東北端付近や南北壁際には、板状の炭化材が見られた。

〔埋土〕 埋土は4層よりなるが、1層は暗褐色のシルト質輕埴土層である。2層は、黄褐色の粘土と暗褐色土の混合した層である。3層は厚さ0.02m内外の焼土と木炭の混合した層である。4層は、暗褐色の埴土質の土である。

〔重複関係〕 造構の重複関係は見られない。ただし、その北側が木根によって擾乱されてい



第9図 焼土ピット類平・断面実測図

る。

〔出土遺物〕 遺物としては、縦0.2m内外、横0.1m内外、厚さ0.01~0.02mの炭化材がピット底面から出土している。

CF061ピット（第3図、第9図1、写真5-1）

〔位置〕 このピットは、CB031溝の中央部付近に位置し、その東岸部に位置している。

〔形状・規模〕 このピットは、北西一南東方向に長い平面隅丸長方形の舟底状ピットである。その規模は、検出面上で長辺1.56m、短辺2.2~2.8m、底部で長さ0.6m内外、短辺約0.46m、検出面からの深さ0.1~0.2mを測る。このピットの底は、南東部で浅く、北西部で最も深くなっている。そのため、ピット全体の最深部は、ピット全体の北西壁寄りに位置している。

〔埋土〕 ピット内の埋土は、8層よりなる。そのうち、1層はCB031溝とこのピットの両者を被う褐色の埴土質の土層で、埴生根が多く含まれ、層全体のしまりは粗である。2層は、汚れの目立つ、黄褐色粘土層である。3層は塊状の黄褐色粘土層を主体とし、それに木炭の細粒と焼土を少量含んだ層である。4層は、しまりの密な黒褐色土層で、その中に、少量の黄褐色粘土の細粒が混入している。5層は、焼土と木炭と灰からなる層で、吸水性に富み、全体的にベタつきの著しい層である。6層は、焼土層で赤褐色を呈している。7層は木炭の細粒よりなる層である。8層は暗褐色の埴壤土層で、CB031溝の埋土をなしている。

これらの層全体の構造を見ると、ピットの底部の一番深い部分には7層の木炭層が広がり、その上に5・6層が広がっており、その辺の一部は4層で被われている。以上の各層は、全体として、1・2・3の各層によってドーム状に蔽われている。

〔重複関係〕 第9図1でも解るように、このピットはCB031溝で切られている。

〔出土遺物〕 ピット内からは、遺物として、焼土層中より第7図8に掲げた様な、硬質頁岩の小さなフレークが1点出土している（第7図8、第4表、写真9-2）。

DB061ピット（第3図、第9図4）

〔位置〕 このピットは、「L」字状に屈曲するCG501溝の南端部付近に位置している。

〔形状・規模〕 このピットは、北西一南東方向に長い、平面楕円形の摺り鉢状ピットである。その規模は、検出面上で長辺0.72m、短辺0.46m内外で、底辺0.24m内外、検出面からの深さ約0.15mを測る。さらに、ピットの長軸方向の北東辺縁部には、最大幅0.12m大、最大深0.04mほどの浅い張り出し部が伴なっている。

〔埋土〕 ピット内の埋土は、張り出し部の埋土を除いて3層よりなる。そのうち、1層は地山の土と同様の黄褐色粘土層で、礫をやや多量に含み、固くしまっている。その下部の一部には、焼土が含まれている。2層は、塊状の粘土の堆積層である。3層は、灰と炭化物を主体とし、それに焼土が少量混入した黒色土層である。以上の層以外、張り出し部分には、木炭の細

粒と焼土を主体とする黒褐色土層が見られた。

〔重複関係〕 認められなかった。

〔出土遺物〕 遺物は、炭化物・焼土以外出土しなかった。

DC501ピット（第3図、第9図2、写真4-3）

〔位置〕 DB061ピットの南東約8.5m地点付近に位置しているピットである。

〔形状・規模〕 このピットは、やや中くびれのある平面、隅丸長方形の舟底状ピットである。ピットの長軸は西北西-東南東方向に向き、その底面はCF061ピットと同様、長軸方向の東南東の辺縁部から緩く落ち込み、西北西の辺縁部で急に立ち上がる形状を呈している。その規模は、検出面上で長さ1.34m、幅最大0.75m、幅最小0.44m、底部での長さ0.84m、幅0.4m、検出面よりの深さ、最大0.2m内外を測る。

〔埋土〕 ピット内の埋土は、6層よりなる。1層は、黄褐色粘土と暗褐色の腐植土質土の混合層である。2層は、焼土と木炭を主体とした黒色土層で、黄褐色粘土の細粒や灰を含み、吸湿性が著しい。そのため、全体としてべとついている。3層は、黄褐色のブロック状の粘土の堆積層である。4層は、焼土や木炭を少量混入した黄褐色粘土層である。5層は、木炭の細粒よりなる層である。6層は赤褐色の焼土層である。

以上の層全体の構造をみると、まず、最下部全体に4・5層が薄く広がり、その上を3層が蓋状に厚く被っている。そして、3層の両脇は、2層や3層によって被われている。また、3層の上には、1層が被い覆っている。以上の様な埋土の構造は、CF061ピットにかなり近い様相を呈していると云えよう。

〔重複関係〕 なし。

〔出土遺物〕 焼土・木炭以外の人工遺物は発見できなかった。

(4) その他のピット

BH591・BH592ピット（第3図）

〔位置〕 この2つのピットは、BH591溝の北東末端部に位置しており、溝と重複している。

〔形状・規模〕 BH591ピットは、長径1.00m、短径0.88m、深さ0.54mの平面不整橢円型の摺り鉢状ピットである。また、BH592ピットは、直径がほぼ0.88m内外の平面円形の摺り鉢状ピットで、深さ0.7mを測る。

〔埋土〕 2つのピットの埋土は、いずれも黄褐色粘土と黒色土が塊状に混合した土の単層である。

〔重複関係〕 2つのピットは、いずれもBH591溝と重複するが、両者ともBH591ピットの埋土を切り込んで掘られている。

【出土遺物】 BH591ピットからは、電柱の柱脚部分が出土しており、BH592ピットからは、針金が出土している。

BI501ピット（第3図）

【位置】 このピットは、発掘区域の北端部・中央に位置し、すぐ東側にはBH591溝が北東—南西方向に走っている。

【形状・規模】 ピットは、北西—南東方向に長い、不整梢円形を呈し、検出面上で長径2.88m、短径0.8~0.96mを測る。ピットの底面は、2つの舟底状の部分よりなり、全体として、2つのピットが接続した形になっている。その底径は1.52m×0.24~0.4m、0.8m×0.32mをそれぞれ測る。検出面からの深さは、前者で約0.16m、後者で約0.36mを測る。

【埋土】 埋土は暗褐色を呈したシルト質の埴土の単層である。

【重複関係】 重複関係は認められなかった。

【出土遺物】 遺物は出土しなかった。

CA591~594ピット（第3・4図、写真1-3）

【位置】 これら4つのピットは、CA591住居跡の北西隅付近に位置するピットである。

【形状・規模】 4つのピットは、CA591ピットが削平によって、若干原形が失われているものの、いずれも北東—南西に細長い、浅い溝状のピットである。その規模を検出時の長軸長、短軸長、深さの順序で数値にすると、下記のようになる。

CA591ピット	0.8m	0.18~0.32m	0.08m内外
CA592ピット	1.3m	0.24~0.44m	0.05~0.09m内外
CA593ピット	1.4m	0.3m	0.05~0.09m内外
CA594ピット	1.5m	0.36m	0.05~0.08m内外

なお、溝状ピットの横断面形は、いずれも浅い皿状を呈する。

【埋土】 ピット内の埋土は、黒褐色の腐植質の埴壤土の単層である。

【重複関係】 これらのピットのうち、CA593・594の2ピットは、CA591住居跡と重複しているが、土層観察によって、これらのピットが新しい事が解った。

【出土遺物】 埋土中からの遺物は検出されなかった。

CB561ピット（第3図）

【位置】 このピットは、BJ591溝の中央部付近に位置している。

【形状・規模】 このピットは、東西方向に長い平面梢円形の浅い皿状のピットである。その規模は、長径1.2m、短径0.9m、検出面からの深さ0.04~0.08mを測る。

【埋土】 ピット内の埋土は2層よりなる。1層は黒褐色の埴壤土で、BJ591溝の埋土に大体

同じである。主として、ピットの西半分の上層部に分布している。2層の埋土は、1層の土と黄褐色粘土の混合層で、主に、ピットの底部や東半分の部分に分布している。

〔重複関係〕 このピットは、BJ591溝と重複しているが、その新旧関係は不明瞭である。ただ、埋土の状況から見ると、BJ591溝の方が新しい可能性が強い。

〔出土遺物〕 遺物は発見されていない。

CB591ピット（第3図、写真4-1・2）

〔位置〕 このピットは、CA59住居跡の南側に隣り合っている。

〔形状・規模〕 このピットは、西北西一東南東方向に長い平面橢円形のやや深い鍋底状ピットである。その規模は、検出面上で長径2.00m、短径1.44m、底部で長径0.81m、短径0.42mで、検出面からの深さ0.33mを測る。

〔埋土〕 ピット内の埋土は、黄褐色粘土層・黒色土層と前二者の土の混合層と灰黄色粘土層の都合4層よりなる。その堆積状況を見ると、ピットの最下部付近に灰黄色粘土層が薄く堆積している。そして、その上に黄褐色粘土層が、ピットの上部から下部にかけて、大きな团塊をなして乗っている。黒色土層は、その周辺部を、ピット底面から隔離する様な形で取り巻いている。この2つの層の接触部のうち、ピットの底部に近い部分では、両層の土が混合して1つの層をなしている。以上の各埋土層中のうち、黒色土層には、植生根が多く入り込み、少量の粉末状炭化物が含まれている。

〔重複関係〕 重複関係は認められなかった。

〔出土遺物〕 土器片などの人工遺物は発見されなかった。

CD501ピット（第3図）

〔位置〕 このピットは、BJ621溝の南西端付近に位置している。

〔形状・規模〕 このピットは、東西に長い平面橢円形の浅い皿状ピットである。その規模は、検出面上で長径1.20m、短径0.52~0.66mで、底部の長径1.15m内外、短径0.52m内外、検出面から深さ0.14m内外を測る。

〔埋土〕 埋土は、黒褐色埴壌土質土の単層からなる。

〔重複関係〕 このピットは、BJ591溝と切り合っているが、新旧関係は、埋土の観察では確認できなかった。

(5) 柱穴状ピット（第3図、第5表）

柱穴状ピットは、発掘区域内から合計82点検出されている。これらの柱穴状ピットは、大部分が直径0.15~0.55m大の円筒形のピットである。その深さは、最も深いもので検出面より0.44m、浅いもので0.15m内外をそれぞれ測り、一定しないが、大体0.25~0.35m程のものが多い。

ピットの大部分は、不規則な形で分布・配列している。しかも、ピット内からは、その所属時期を決める遺物が出土していないため、ほとんどのピットは時期不明である。

ピット内の埋土状況は、2～3のピットを除いてほとんど確認されていないので、ほとんど不明である。しかし、CA121ピットやCA124ピットなどの埋土の所見から類推すると、大部分のピットの埋土は、柱心部分とそれを取り巻く部分の2種の埋土層からなっている可能性が強い。その場合、柱心部分の埋土は黒褐色～暗褐色の腐植土よりなり、周辺部分は、黄褐色粘土と黒褐色～暗褐色の軽埴土の混合土層よりなる可能性が強い。

(6) 挖立柱様建物跡

柱穴状ピットの特に集中している場所はBH591溝とCD181溝に挟まれた部分であるが、この付近には、56の柱穴状ピットが散らばっている。これらのピットの中には、比較的規則性のある配列状況を示すものがある。それを結び合わせると、第12図に示す様に、BH591溝に平行する様な形で並列する、2棟分の掘立柱建物様の柱穴配置が認められた。

付近には、この柱穴配置に含まれないピットが25ほど散らばっているが、これらのピットも大部分は、この建物遺構に関連するものと推定される。ただし、その具体的な配列関係については、今のところ不明である。

さらに図では、この付近に2棟分の住居跡の存在を推定したが、1棟分の住居跡の存在を推定する事も可能である。しかし、調査時の観察では、両者の推定のうち、いずれが正しいか立証する有力な資料が得られなかった。したがって、ここでは一応、先に述べた通り2棟分の建物遺構を推定し、報告を行なう。

CA151建物跡（第3・10図、写真5－3）

【位置】 この建物跡は、2棟の建物跡のうち、北側に位置する建物跡である。

【形状・規模】 この建物跡は、柱数15よりなる。平面がやや歪んだ長方形のベタ柱建物である。その規模は、心々距離にして、桁行約7.8～8.0m、梁行約4.0～4.2mで、各柱穴は桁方向に5、梁行方向に3、それぞれ配置されている。その柱間寸法は、長短があって一定しないが、心々距離にして、桁行方向では約1.4～2.0mを測り、そのうちでも、約1.9～2.0m程度のものが多い。梁行方向の場合は、大体2.0～2.2mを測る。

【方向】 建物跡の入口施設が不明なので、建物の向きは不明であるが、その長辺は北から西に約55°偏っている。

【重複・建て替え】 建物跡を構成する柱穴群の中には、掘り方を伴う例や重複の認められる例がある。しかし、建物全体の建て替えの痕跡は認められなかった。

【遺物】 建物跡に直接に伴う遺物は発見されていない。しかし、粗掘の際に、この付近から

第5表

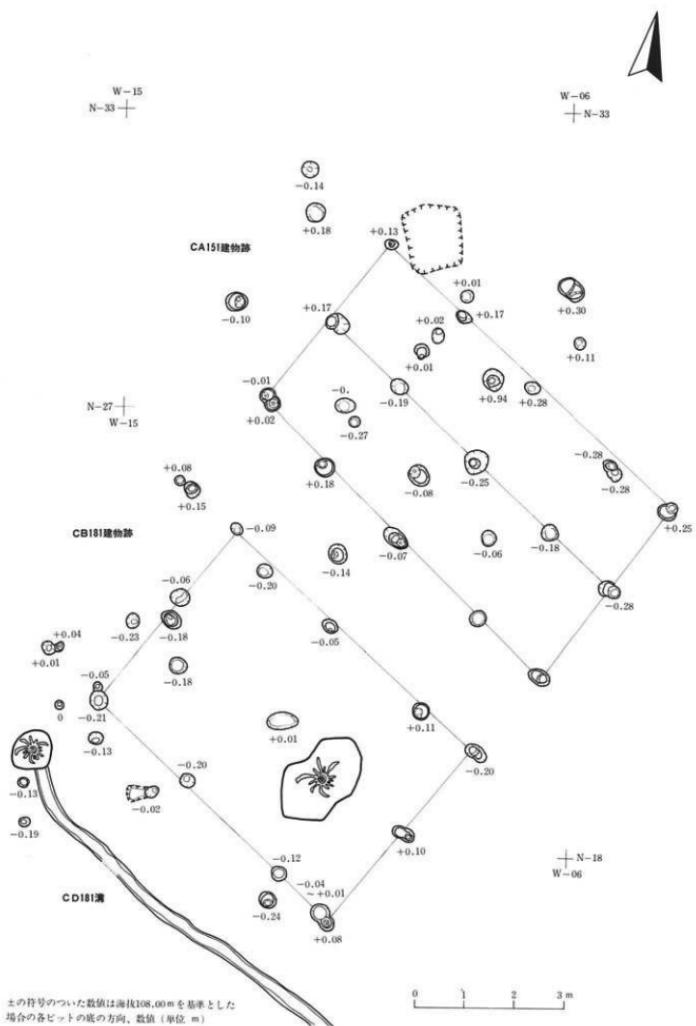
柱穴状ビット規格一覧表

(単位 m)

造構名	長径	短径	深さ(1)	深さ(2)	備考	造構名	長径	短径	深さ(1)	深さ(2)	備考
BJ121	0.36	0.34	0.08	-0.14		CC183	0.20	0.18	0.19	-0.05	CC184と重複
122	0.42	0.37	0.38	+0.18		184	0.38	0.35	0.34	-0.21	CC183と重複
123	0.25	0.20	0.36	+0.13		185	0.19	0.15	0.40	0	
CA061	0.27	0.24	0.26	+0.11		CD091	0.46	0.22	0.20	-0.20	
091	0.28	0.24	0.14	+0.01	○	121	0.44	0.28	0.41	+0.10	○
092	0.27	0.18	0.33	+0.17	○	151	0.51	0.35	0.15	+0.10	
093	0.34	0.22	0.20	+0.02	○	152	0.45	0.32	0.30	-0.20	
094	0.47	0.42	0.47	+0.29	○	153	0.28	0.20	0.22	-0.02	
095	0.28	0.27	0.42	+0.28		181	0.30	0.25	0.30	-0.13	
096	0.52	0.37	0.41	+0.30		182	0.22	0.21	0.37	-0.13	
121	0.32	0.24	0.36	+0.17	○	183	0.24	0.20	0.41	-0.19	
122	0.28	0.27	0.19	+0.01		CE121	0.30	0.30	0.44	-0.24	○
123	0.34	0.30	0.39	-0.19		122	0.31	0.34	0.22	-0.04 +0.01	CE123と重複
124	0.40	0.36	0.41	-0.29	○	123	0.28	0.18	0.18	+0.08	CE122と重複○
151	0.40	0.40	0.40	-0.10		151	0.32	0.30	0.20	-0.12	
152	0.33	0.27	0.24	-0.01	CA153と重複○	CG061	0.22	0.18	-	-	
153	0.30	0.30	0.25	+0.02	CA152と重複○	181	0.30	0.30	0.25	-0.24	
CB061	0.48	0.23	0.19	-0.28	CB061・062は重複 CB061に○	182	0.32	0.28	0.40	-0.36	
062						CH061	0.15	0.13	0.19	-0.47	
063	0.40	0.40	0.20	+0.25	○	091	0.17	0.10	0.12	-0.20	CB031溝と重複
091	0.54	0.44	0.41	-0.25	○	092	0.22	0.15	0.17	-0.19	*
092	0.32	0.30	0.26	-0.06	○	093	0.16	0.16	0.10	-0.18	*
093	0.34	0.30	0.31	-0.18		181	0.34	0.24	0.23	-0.13	
121	0.25	0.25	0.39	-0.27	○	CI061	0.33	0.29	0.25	-0.48	
122	0.38	0.36	0.06	+0.18	○	121	0.20	0.20	0.37	-0.44	CB031溝と重複
123	0.44	0.36	0.27	-0.08	○	122	0.14	0.14	0.41	-0.49	*
124	0.54	0.34	0.25	-0.07		151	0.34	0.28	0.17	-0.19	*
125	0.36	0.40	0.31	-0.14	○	CJ091	0.38	0.38	0.33	-0.57	角柱状の壁が埋っている。
151	0.20	0.18	0.08	+0.08		DA091	0.40	0.29	0.37	-0.60	
152	0.34	0.25	0.17	+0.15	○	121	0.28	0.22	0.38	-0.58	
153	0.26	0.25	0.30	-0.09		181	0.16	0.18	0.08	+0.30	
CC061	0.48	0.30	0.35	-0.28		182	0.26	0.18	0.27	-0.42	
091	0.32	0.31	0.20	-0.11		DB121	0.24	0.20	0.19	-0.43	
092	0.43	0.29	0.21	-0.11		122	0.18	0.18	0.24	-0.58	
121	0.27	0.25	0.15	-0.05		151	0.34	0.30	0.31	-0.50	
122	0.38	0.38	0.23	+0.11		DC121	0.44	0.44	-	-	DC122と重複
151	0.28	0.26	0.30	-0.20		122	0.30	0.30	-	-	DC121・DC123と重複
152	0.38	0.38	0.18	-0.06		123	0.20	0.20	0.12	-0.44	DC122と重複
153	0.40	0.32	0.27	-0.18	○	181	0.30	0.30	0.24	-0.31	BH591溝と重複
154	0.32	0.26	0.35	-0.23		182	0.28	0.24	-	-	BH591溝と重複
155	0.46	0.34	0.30	-0.15		DD121	0.26	0.26	-	-	
181	0.24	0.15	0.28	+0.04		122	0.32	0.28	-	-	
182	0.28	0.20	0.22	+0.01		181	0.36	0.28	-	-	

深さ(1)一棟出面からの深さ。 深さ(2)一海抜108.00mを基準とした高さ差。

○印は柱穴部分に当りの有るもの。 -印は未調査。



は縄文土器片やフレーク・針金、それに犬釘が採集されている（但し前二者以外、所在不明）。

〔埋土〕 この建物跡付近を被う埋土については、充分な観察がなされていないので、詳しい事はよく解らない。ただ、〔各グリッド内の遺物〕の項でも述べるが、建物跡に関連する各柱穴状ビットは、大部分が基本層序の2層に相当する部分で、不明確ながら認められた。また、ピット中の埋土はCA59住居跡の柱穴埋土などと比べて、かなり粗であった。特に柱心部分ではその傾向が著しく、この建物跡がかなり新しい時期のものである事を予想させた。

CC181建物跡（第3・10図、写真3-2）

〔位置〕 この建物跡は、CA151建物跡の南西部に並行する形で隣り合っている。

〔形状・規模〕 この建物もCA151建物跡と同様、歪みのある平面長方形の掘立柱建物である。その規模は、心々距離にして、桁行で約6.4～6.5m、梁行で4.1～4.4mを測る。建物を構成する柱穴は、全部で10あるが、CA151建物跡の様なベタ柱状の配置は見られない。柱穴の配列数は、桁行方向に4、梁行方向に3で、柱間寸法は、桁行方向では最短部で約1.4m、他の部分で約2.4～2.6mをそれぞれ測る。そして、梁行方向では約2.2～2.3mを測る。

〔方向〕 この建物跡もCA151建物跡と同様、北西—南東方向に長く、その長辺は北から西へ約56°偏っている。

〔重複・建て替え〕 CA151建物跡と同様、重複するピットは見られるものの、建て替えは認められない。

〔遺物〕 CA151建物跡と同様、この遺構に直接伴出する遺物は発見できなかった。

〔埋土〕 CA151建物跡と同様である。

(7) 各グリッド内の遺物

以上に述べてきた遺構が今回発見された遺構である。これらの遺構に伴って発見された遺物ではないが、発掘区域内の各グリッド内からは、第7・11図に示した様な、石器や土器類を主体とする遺物が若干出土している。その内容は、幾分の差異は認められるものの、BH591溝の出土遺物と、大体様相を同じくするものと予想される。

これらの遺物のうち、縄文土器片は主として、基本層序の項で説明した2層の下部付近から出土したものである。C区の北西部では、先の2層と3層の間にもう1つ、暗褐色の埴塙土が薄く挟まっているが、土器片の大部分は、この層と2層の境界部から出土している。

これらの土器片は、出土地点の平面的な位置関係から見ると、先に述べたCA151、CB181両建物跡などとの関連が予想される。しかし、土器片の包含層の堆積状況と建物跡の各柱穴状ビットの埋土状況を比べると、後者は前者を切り込んだ形で掘り込まれており、新規の様相を呈していた。従って、以上の事柄から、上記建物跡とこれらの土器片の間には、共伴関係がない

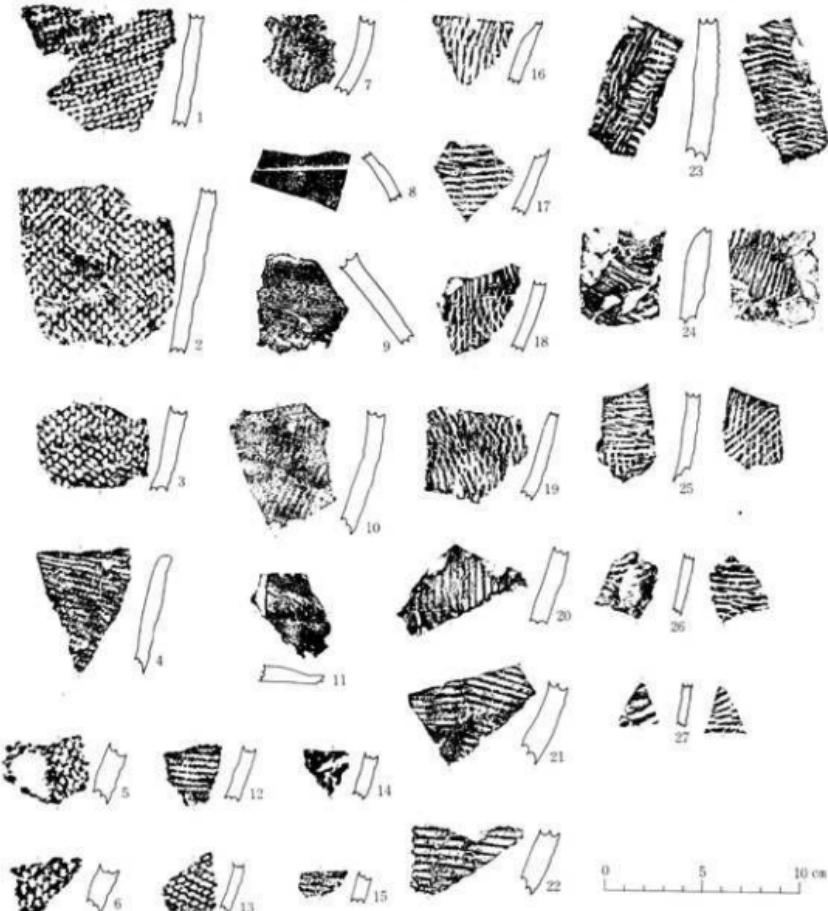
のと予想された。

＜縄文時代の遺物＞

A. 縄文土器（第11図1～4・6～15、第6表、写真9～1）

縄文土器は、全部で9点出土しているが、第11図1～4・6・12～15は、いずれもC区各グリッド内から発見された、深鉢型の縄文土器の胴部破片である。

これらの破片は、いずれも胎土中に多量の繊維を含み、焼きが甘い。器壁の外面には、いず



第11図

各グリッド内の出土土器 拓本 および断面実測図

れも、 $R < L$ (S字状) 原体を継ないし斜め方向に回転押捺した、単節の斜縄文よりなる。図でも解るように、施された縄文の単位粒子は、一般に粗いが、4・12のように細かいものも見られる。

これらの土器片は、文様から見て、時期的には縄文時代前期初頭の大木1式の土器などに比定される資料である。⁽⁹⁾

B. 石器類 (第7図10・13、第3表、写真7-2~4)

第7図10は、両端が欠けた石ヘラ状の打製石器の破片と思われる資料である。この石器の長軸方向の両側面は、やや粗く打ち欠かれ、横断面が凸レンズ状を呈する様に調整されている。

13は、やや厚手の台地状のフレークの1辺に、チッピングが施された片刃のナイフ状の打製石器である。チッピングが施されている、同じ面の反対側面には、素材の自然面が残り、裏面には、大剝離面がほとんど加工されずに残されている。

縄文土器 第6表 杉ノ上 I 遺跡出土土器破片一覧表

番号	写真番号	出土遺構	器形	残存部位置	残存部最大長	残存部最小長	残存部器厚	色調	製作方法・文様構成上の特徴	
									外 部	内 部
1	9-1	CE18グリッド	深鉢	体部	7.9cm	8.7cm	0.7 cm	褐、中黒	縄文S原体(RL)、縦回転	なし
2	*	CC12	*	*	9.7	8.0	0.7	赤橙、中黄	*	*
3	*	CF18	*	*	4.7	5.7	0.9	表面明るい赤橙 中濃灰	*	*
4	*	CA15	*	口沿部	5.2	4.5	0.6~0.8	赤橙、中黒	* S原体(RL)、斜め削起	*
5	*	CB151ビット	*	体部	4.0	4.2	0.9~1.0	褐、中黒	*	?
6	*	CF18グリッド	*	*	2.6	4.1	0.8	表面明るい赤橙 中黒	* S原体(RL)、縦回転	*
12	*	CA15	*	*	3.6	3.6	0.7~0.8	赤橙、中黒	*	?
13	*	CF18	*	*	3.5	2.9	0.6~0.7	表面明るい赤橙	* S原体(RL)、縦回転	*
14	*	CG03	*	*	2.3	2.4	0.5	*	摩擦のため不明	*
15	*	CA15	*	*	2.6	2.0	0.7	赤橙、中黒	縄文?	*

C. 石材 (第7図1・4~7、第3表、写真9-2・3)

・フレーク 同じく、第7図1・5・6はフレークである。そのうち、1は継長のフレークの長軸方向側面にチッピング様加工が施され、一見、石器の様にみえる。しかし、その割れ口は、他の剝離面の風化状況と比べてみると、はるかに新しく、ごく最近に加工された様相を呈している。

以上の様な理由から、この資料を石器とはせず、一応、フレークとして紹介することにしたい。

5は、三角形状の薄いフレークで、片面には自然面が残っている。6は、不定形のやや厚手

のフレークである。その片面には、大剝離面が大きく残っている。

・コア 4・7は、平面三角形状のコアの一類と思われる資料である。いずれも、その一部には、自然面が残っている。

＜平安時代の遺物＞（第11図7～10、16～27、第7表、写真10—3・4）

・須恵器 各グリッド内から発見された須恵器は、破片が全部で17点採集されている。そのうち、第11図7・10・10～27は、甕・壺類の胴体部破片である。これらの土器片は、いずれも灰褐色で、硬く焼きしまっている。破片はいずれも細片であるため、その全体形状はよく解らないが、その器壁外面には、平行線状の叩き目が縦・横・斜め方向に施され、時おり交錯して、斜め格子状の圧痕を残している。また、器壁内面には当て痕の見られない場合もあるが、23～27では内面にも外面と同様の圧痕が見られる。

須恵器 第7表 各グリッド内出土土器片一覧表

拓本	写真号	出土遺構	器形	残存部	残存部 最大長	残存部 最小長	残存部 最大厚	色調	製作方法・文様構成上の特徴		
									外 部	内 部	
7	10-3	CHI8グリッド	長甕類	体部	4.1cm	4.6cm	0.7cm	暗赤褐色	タタキ目、触ナシ	(ロクロすじ)	
8	*	BJ59	長頸瓶	*	3.1	5.3	0.6	表灰 中暗赤褐色	点粒状風化痕(ロクロ)	*	
9	*	CE09	*	肩部	5.0	5.0	0.7～0.9	灰	刷毛目痕(横方向)	刷毛目痕(横方向)	
10	*	CE18	*	大甕	体部	7.2	4.9	0.9	濃灰	タタキ目、灰、カブリ痕 ナナ痕、タタキ目	
11	*	CG06	*	板瓶	底部?	2.8	5.5	0.7	表外黒灰、内灰 中白灰	ヘラケズリ痕、自然釉 削離のため不明	
16	*	DA09	*	大甕	体部	4.1	4.0	0.6～0.7	黒灰	タタキ目、自然釉、ガラス光沢 タタキ目、触ナシ	
17	*	DBH5	*	*	*	4.0	4.3	0.8	表灰 中白灰	*	内部削離のため不明
18	*	CHI2	*	*	*	4.1	5.1	0.6～0.7	灰	*	触ナシ
19	10-4	CC09	*	*	*	6.1	5.7	*	表外黒灰、内灰 中灰	*	自然釉 タタキ目、触ナシ
20	*	CC12	*	*	*	6.7	4.3	0.9	表灰 中暗赤褐色	*	触ナシ
21	*	BE50	*	*	*	6.2	5.8	1.0～1.1	表外黒灰、内灰 中白灰	*	タタキ目、触ナシ
22	*	CE12	*	*	*	3.7	5.1	0.9～1.1	濃灰	*	自然釉 自然釉
23	*	不明	*	*	*	3.6	5.4	1.1	表外濃灰、内灰 中灰	*	触ナシ 触ナシ
24	*	CE09	*	*	*	6.0	6.2	1.0	明るい赤橙	*	*
25	*	DA06	*	*	*	5.4	4.9	0.7	表灰 中暗赤褐色	*	*
26	*	CA12	*	*	*	3.5	3.3	0.5	表灰 中暗赤褐色	*	*
27	*	CD18	*	*	*	2.4	2.2	0.5	灰	*	自然釉 *

8・9・11は、長頸瓶類の破片と思われるが、そのうち、8・9は胴体上部破片であり、11は底部破片である。そのいずれも、器壁外面にロクロ調整痕が見られる。色調や胎土の焼きし

まりは、前記の甕・壺類と大体同じである。

- ・土師器 なお、図示しなかったが、土師器の壺や甕類の破片が、合わせて各グリッド内の1・2層中から紛れ込んだ形で、わずかずつ発見されている。

<近世以後の遺物> (第12図、写真8-6)

- ・陶器 近世以後の陶器の胴体部破片が、DC59・CB62の2グリッドから、各1点ずつ出土している。いずれも、表土中から出土したものであるが、器形は不明である。

・古銭 BH591溝の南

端部付近にあるDGグ

リット内の表土攪乱部

から、第12図に示した

様な朱漆塗りの銅錢、

寛永通宝が1点単独で

出土している。この寛

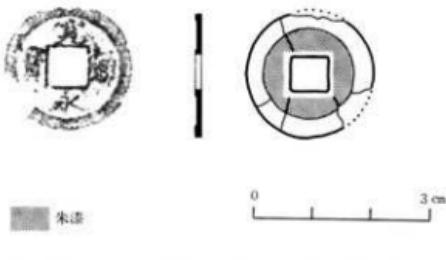
永通宝は、直径2.2cm、

辺縁部の厚さ約0.1cm

で、中央部には一辺約

0.7cmの方形の孔が穿いており、寛永通宝のうちでは比較的新期に属する個体である。²⁸

銭全体の形状の保存状態は比較的良好であるが、鋸が内部まで進行し、脆くなっているため、ヒビ割れして、一部が欠損している。朱漆は、銭字面の裏面の内圈中に塗られているが、その保存状態は、余り良好とは云えず、落剥しかかっている。



第12図 DG50グリッド出土朱漆塗り寛永通宝

4. まとめ

(1) 各遺構の性格と時期

(1) CA59住居跡の時期と性格

CA59住居跡は、今回の調査で発見された唯一の平安時代の住居跡であるが、その時期と性格について、もう少し具体的に考えてみたい。

CA59住居跡の壺に形態的に類似した壺類は、既に、住居跡内の出土遺物の項でも述べた様に、北上市鬼柳西裏、金ヶ崎町西根、江刺市瀬谷子などの北上川中流域の各遺跡で出土している。これらの壺類に対しては、現在のところ、沼山源喜治氏らによって、11世紀代の年代が推定されている。²⁹ その編年案に基づけば、このCA59住居跡の所属時期もほぼ同時期に比定でき

よう。勿論、以上の年代観については、将来的にはもっと吟味してゆく必要があるが、今のところ、それを否定する積極的な資料が見当たらない。したがって、ここではこの沼山氏らの考え方を採用して、一応、このCA59住居跡の所属時期を西暦紀元の11世紀代に位置づけしておく事にしたい。

仮に、このような年代的な位置づけが可能であるとした場合、CA59住居跡の性格付けをどのように考えたらよいであろうか。今回の調査で発見された住居跡は1棟のみであったが、その規模や形態から考えて、庶民の住宅と考えられる。同時期の住居跡は、付近の未調査区域内に、まだ数棟埋没している可能性が大きく、CA59住居跡は、これらの住居跡によって構成される集落跡の一部であると予想される。以上の様に考えた場合、次に集落跡の性格付けが問題になるが、この点に関しては、今回の調査だけでは明らかにし得ない面がある。したがって、その件に関しては、諸方面に於ける研究の成果を待って、検討を加える事にしたい。

(2) 溝類の形態と時期と性格

A. 形態 発掘区域内で発見された溝類は、合計10ないし11条であるが、その形態についてみると、幾つかの差異が認められる。例えば、溝自体の大きさで見ると、BH591溝の様に調査区の端から端まで及ぶ様な大規模なものから、CD501溝やCG501溝などの様に、比較的細く、短いものまで各種ある。同様に、溝の走向形態をみても、BH591溝やBJ591溝、CG501溝などでは、「く」の字状屈曲を示しながら直線状に走るのに対し、CB031溝などでは「S」字状に蛇行している。その走向方向についても、第11図からも明らかなように、各種ある。

B. 時期 さらに各溝の出土遺物についてみると、時期の判明する人工遺物の出土している溝は、BH591溝とCG061溝、CD181溝の3条の溝のみである。しかも、BH591溝の出土遺物の数が53点と例外的に多いのを除くと、他の2つの溝は、それぞれ各1点と非常に少ない。さらに、これらの遺物は、全て溝の埋土中から出土したもので、遺構そのものの時期を直接に示唆する資料とはなり得ない。したがって、今のところ、大部分の溝類の所属時期は不明であり、各溝、相互の時期関係もよく解らない。

ただ、その中で、やや時期的な幅を押え得るものについて見ると、BH591溝、CG061溝、CD181溝については、埋土中の遺物から推定して、埋没時の上限が平安時代以前には逆上り得ない事がほぼ確実である。さらに、この中でBH591溝とCD181溝については、その接合部に残る侵食痕の存在により、ある時期の共伴関係が推測される。

また、BI061溝については、遺物の出土状況から、CA59住居跡と同時期の共伴遺構である可能性も推測される。

BJ061溝については、遺構の切り合い関係から、CA59住居跡より後の時期に位置づけられる事が確実である。

CB031溝はCF061ピットを切っている。CF061ピットは、¹⁴C年代測定によって、 1190 ± 80 (years B.P.) の年代値が与えられている。これはつまり、このピットの所属時期が大体、西暦7世紀末～9世紀前半代に入る可能性の大きい事を示唆している。仮に、以上の様な年代観が正しいとすれば、CB031溝の上限が、早くとも西暦7世紀末以前には逆上り得ない可能性が大きい。

以上、ある程度、年代の解る溝類の時期について述べてきたが、その下限については、大部分不明である。わずかに、BH591溝が近現代に属する2つの電柱穴によって切られていて、それらの所属時期より古いという事が知られるのみである。また、同じBH591溝の南端部付近からは、朱塗りの寛永通宝が出土しているが、この付近は、後世の土層擾乱が著しく、この遺物が、果して溝の埋没時期を決める資料になり得るか、疑問のあるところである。

以上に述べてきた溝以外については、ほとんど時期関係が確認できない。しかしながら、全体的に見ると、これらの溝類が、多くの場合、BH591溝とほぼ平行ないし、直角方向に伸びているように見える。この事から、これらの溝類が時期的・空間的に何らかの有機的な関連性を有していたのではないかと推察される。

C. 性格 この様に、各溝類の年代については不明な点が多く、今後の研究に期待せざるを得ないが、次に、これらの溝類の性格について触れてみたい。

溝類の中には、BH591溝の様に、台地の端から端に及ぶ、比較的規模の大きい例が見られる。さらにこの溝の北部底面には、流水による浸食の痕跡が認められる。

以上の様な形態を示すBH591溝の性格としては、台地東端部とその西側を区切る、一種の境界溝と考える事が可能である。勿論、台地の平担部一帯の水抜き溝と考えられない事もないが、台地の面積や、起伏状況を考えた場合、そのような役割はあくまでも副次的なもので、その性格付けについては、やはり前者の考え方方が妥当であろう。

では仮に、前者の考えを採った場合、この溝の東側平担部にはどんな施設の存在が予想されるであろうか。周囲に溝をめぐらす占地例は、しばしば、開墾地・館跡・土臺の屋敷跡、あるいは環濠集落などに見られるところである。しかしながら、今回の調査では、この溝の性格を明らかにする関連遺構の存在は確認できなかった。

したがって、BH591溝の性格も今のところ不明である。なお、他の細長くて浅い溝類についても、今のところ、水抜き溝ないし、何らかの地境溝である可能性が強いものの、やはり性格不明である。

(3) 焼土ピットの性格と時期

A. 性格 焼土や炭化物の含まれたピットは、全部で5発見されている。そのうち、埋土状況や形態の類似から、これらのピットは、CA031ピット・CA032ピットのグループAと、CF

061ピット・DB061ピット・DC531ピットのグループBの2グループに大別できる。その性格としては、いずれも掘り込み式の野外炉と推定される。

Aのグループは、浅い皿状のピットであり、埋土の構成が比較的単純である。それに対して、Bのグループは、舟底状ないし鍋底状のピットで、各遺構の説明の項でも述べた様に、埋土の構成がやや複雑である。

さらに、埋土のしまり具合などに見られるピット内の埋土状況からは、AのグループがBのグループより、比較的新しい時期に位置付けられると予想された。

また、ピットの全体的な形状から観察すると、Aのグループのピットでは、焚口の位置がはっきりしない。おそらく、地面を簡単に掘り込んだだけの炉であろう。それに対して、Bのグループでは、長軸方向のうち一方の落ち込み傾斜が緩くなり、焚口部を形成している。

また、Aのグループでは、炉の上を被覆する施設の痕跡が見られないに対し、Bのグループでは、埋土中の粘土の存在から、ドーム状の覆い施設が伴っていた可能性も考えられた。この様に考えた場合、Bの性格としては、単なる掘り込み炉というより、野外に設けられた、かまど状の燃焼施設である可能性が強い。

B. 年代 以上の様な焼土ピットの時期は、一体いつ頃になるであろうか。先に分類した、A・B両グループの出土遺物は、CF061ピットのフレーク1点を除いて、全て焼土と木炭である。そこで、AグループからCA032ピットを、BグループからCF061ピットをそれぞれ選び、そこから出土した木炭を¹⁴Cによって年代測定したところ、おおよそ、次の結果が得られた。つまりCA032ピットの木炭は西暦14世紀後半～16世紀前半代に、CF061ピットのものは7世紀～9世紀代にそれぞれ位置付けられる。したがって、上記の2つのピットも、大体出土した木炭に位置付けられ、したがって遺構の時期も、CF061ピット→CA031ピットの順に位置付けられるであろう。この年代値については、正確を期して、さらに、検討を加えてゆく必要があるけれども、相対的な時期関係については、大体、信用していいのではないか。

以上、大雑把に焼土ピットの年代的な位置付けについて考えて来たが、さらに、大胆な想像が許されるならば、上記の2ピットの年代的な位置付けを以って、A・B両グループの全体の大よその時期差とみなす事も可能であろう。

(4) 掘立柱建物跡の性格と時期

時期・性格の不明な柱穴状ピットの中に混じって発見された、2棟の掘立柱建物跡の性格は、今のところ良く解らない。また、所属時期についても確実な伴出遺物がないため、不明である。

ただ、柱穴配置や建物全体の重み具合から考えると、これらの建物跡が、いずれも厳密な規格性を考慮して作られた建築遺構というより、掘立小屋ないし簡易住宅の様な、極めて粗略な建物の跡である事が予想される。

さらに、付近の古者の言い伝えによると、明治時代に東北本線の建設工事が行なわれた際、この付近に工夫小屋（飯場）が建てられた、との事である。また、これらの建物跡に直接伴つたものではないが、この遺構付近の粗掘りの際に、上げ土中から犬釘や針金が2～3点発見されている（但し、調査時に行方不明になっている）。

以上の事実や伝承から、現在のところ、この遺構の性格として、2つの建物跡の性格を工夫小屋の跡と考えたい。また、その時期についても、確証に乏しいが、大まかに、東北本線の開通した明治中期に位置付けておきたい。

(5) その他のピットの時期と性格

以上、述べてきた各遺構中に属さない各ピット類の時期は、伴出遺物がないため、ほとんど不明である。また性格についても、余り良く解らない。

- ・BH591・592ピット 伴出遺物から、近現代の電柱埋め穴であると推定される。
- ・BI501ピット このピットのさらに北西部には、地山層が溝状に暗色を帯びて続いている。この事から推定して、このピットは、BH591溝に北西方向から交換する溝の痕跡である可能性が強い。
- ・CA591・592・593・594ピット これらのピットは、切り合い関係とその類推から、CA59住居跡より新期に位置付けられるが、性格はよく解らない。
- ・CB561ピット その時期、性格については、良く解らない。
- ・CB591ピット 埋土の状況から、地山層の一部が、倒木の根によって捕獲されてできた、粘土堆のすわり穴と考えられる。
- ・CD501ピット 埋土の観察からは、BJ591溝との前後関係が確認できなかった。

(6) 古銭の性格

GH50グリッドの擾乱土層中から発見された、朱漆塗りの寛永通宝の用途と性格については、目下、検討中である。ただ、見通しとしては、祭祀ないしは儀礼に用いた、一種の祝錢のような性格を想定している。いずれ、この問題については、識者のご教示を仰ぎたい。

[2] 要 約

[1] では、今回の調査で発見してきた遺構や遺物の性格や時期について考えてきたが、この辺で、一応、今回の調査で得られた成果を下記の様にまとめてみたい。

- (1) 調査の結果、杉ノ上Ⅰ遺跡が縄文時代前期、平安時代およびそれ以降の歴史時代の、少なくとも3期に渡る複合遺跡であることが予想されるようになった。
- (2) 縄文時代前期の遺物の発見により、今回の調査区周辺部に、それに関連した遺構の在存が

予想される様になった。

- (3) CA59住居跡の発見により、杉ノ上Ⅰ遺跡付近に、11世紀代の集落跡の存在する可能性が大きくなった。
- (4) 舌状台地先端部を区切る大溝やその他の溝類の発見により、平安時代以降のある時期に、舌状台地の先端部が溝を必要とする、特殊な土地利用状況下にあった事が知られた。
- (5) 野外に設けられた掘り込み炉と思われる焼土ピットは、2種類発見されたが、これらのピットは、形態的に異なるばかりでなく、時期的にもかなり離れる造構である事が推定された。そのうち、古期のものは、¹⁴C測定によって、奈良～平安時代頃に、新期のものは室町～江戸時代初期頃にそれぞれ位置付けられた。
- (6) 工夫小屋様の掘立柱建物の発見により、近世以降・近現代に至る簡易建物の下記構造のあり方についての知見が新たに1つ得られた。

以上のまとめをもって、杉ノ上Ⅰ遺跡の調査報告を一切終わるが、その前に、今回の調査と報告のために、ご協力くださった各位にひとこと、お礼を申し上げたい。一々、名を掲げる事は省略させていただくが、東北新幹線関連用地内の調査という制約や、調査担当者の経験不足にもかかわらず、一応、報告をまとめる事ができたのは、この方々の努力と協力によるところが大きい。

勿論、本報告で述べられている事は充分とは云えず、数々の誤謬や不足が指摘されるであろう。しかし、その点については、今後の研究の進展に期待し、許しを乞う事にしたい。ともかく、この報告が、杉の上Ⅰ遺跡の持つ価値と重要性について知るための手掛けとして、今後、少しでも役に立つ事を期待したい。

なお、参考までに、日本アイソトープ協会に依頼した杉ノ上Ⅰ遺跡の焼土ピット、¹⁴C年代測定結果報告書の抄録を末尾に収める。この報告書のうち、試料コードN-3329はDC501ピット、N-3330はCA031ピットの各試料をそれぞれ意味している。(N-3324～3328・3331は他の遺跡の資料につき、省略)

昭和54年2月15日

岩手県教育委員会事務局文化課

菅原一郎 殿

東京都文京区本駒込二丁目28番45号

社団法人 日本アイソトープ協会

測定結果報告書

昭和53年9月7日に受取りましたC-14試料8個の測定結果がございましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
(省略)		
N-3329	8-6	410±75 Y.B.P. (395±75 Y.B.P.)
N-3330	8-7	1190±80 Y. * (1150±75 *)
(省略)		

年代は¹⁴Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのばる年数（Years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取の誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお、¹⁴C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます）

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

測定責任者 ⑩

第7表

杉ノ上 I 遺跡出土遺物一覧表

時期区分	大分類	品種名	残存部	CA50土	BH50馬	BH651馬	CE151馬	CG03馬	CF061 ピット	CB151 ピット	遺構内	構内計	合計	グリット内	合計	総計
時代	縄文土器	口邊部									1	1	1	1	1	1
		脚部												8	9	10
		底邊部														
	石器	石ヘラ		1								1		1	2	
		石鏃		1	3							1	3	1	2	5
		ナイフ状石製品												1		
	石材	磨製石斧		1								1			1	
		原石		1								1			1	
		コア		2							1		3	2	5	2
	陶器	アレーナ		1							2		3	3	5	8
		總計		5							1	1	1	7	16	23
時代	須恵器	口邊部		6								6		6		
		脚部	1	2	12	19					1	1		14	22	14
		底邊部	1		1								2		2	
		長頸瓶	脚部		1	1							1	1	1	2
		形態不明	脚部	8	10								8	10	1	9
	大型	甕	底邊部	2									2	1	2	12
		口邊部	1	3								5		1	6	
		脚部	1	3	7							3	9	2	3	12
	中型	口邊部		1								1			1	
		脚部		3								42		20	62	
時代	安土城	技術	口邊部	5								5		5		
		質	脚部	17	24	6	6	2	2			25	32	7	8	40
		甕	底邊部	2								2	1	3		
		小型	口邊部	3								3	1	4		
		甕	脚部	3								3	1	1	4	
	黒色	口邊部	3									3	1	4		
		内里	脚部		3							3	1	4		
		环	底邊部	5	2	5						3	1	3		
	茶色	復元品	2									2	10	1	2	11
		口邊部	2									2		2		
時代	代	内里	脚部	4	7							2	4	7	4	7
		黒色	底邊部	1								1		1		
		口邊部	12	5								17	1	18		
		脚部														
		底邊部														
	赤色	口邊部	21		1							22		22		
		脚部	18	52		1						18	53	18	53	
		底邊部	4									4		4		
	茶色	復元品	9									9		9		
		口邊部	6									6		6		
近世～現代	茶色系	脚部	1	7								1	7	1	7	
		底邊部	59		1							59		59		
		茶色系合計	98	11	3							112	10	122		
	土師器	口邊部	101	48	3	1	1	1				154	30	184		
		脚部														
	貯水池	底邊部														
	近世～現代	合計													3	3
	通称別種	總計	101	53	3	1	1	1	1	1	1	161	49	210		

注記

- (1) 岩手県教育委員会 1974 「埋蔵文化財分布図」
- (2) 岩手県企画開発室 1975 北上山系開発地域土地分類基本調査「日誌」
- (3) 周辺の遺跡に関しては、(1)の文献以外に下記の文献を参照した。
 - 紫波町史編纂委員会 1972 「紫波町史」第1巻 紫波町
 - 岩手県埋蔵文化財センター 1978 「福村遺跡現地説明会資料」
- (4) 復建コンサルタント 1973 「東北新幹線東京起点 自476K000M 至480K800M 間地質調査報告書」
原本は国鉄盛岡工事局に保管されている。
- (5) 岩手県教育委員会 1977 「昭和50年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
- (6) 1972年、岩手県教育委員会により調査されている。報告書未刊。
- (7) 草間俊一ほか 1971 「岩手県江刺市瀬谷子遺跡第3次調査報告」 江刺市教育委員会
- (8) 岩手県教育委員会 1979 「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書」II 岩手県文化財調査報告書第34集
- (9) 熊谷常正氏の教示による。
- (10) 小川吉義編 1969 「新寛永錢鑑識の手引」 万国貨幣洋行
青山礼志編 1974 「貨幣手帳」1974年版 ボナンザ
- (11) 沿山源喜治 1978 「東北北部の歴史時代の土器」 東日本に於ける歴史時代土器のシンボジウム
発表資料
- (12) その原理とか方法に関しては、下記の文献などを参照されたい。
 - 木越邦彦 1965 IV・3、放射性炭素による年代測定 「日本の考古学」 河出書房新社
 - 遠藤邦彦 1978 「¹⁴C年代測定」 ニュー・サイエンス社
- (13) 本報告の末尾に掲げた、「測定結果報告書」による。
- (14) 新規の開墾地で、筈や木根の侵入を防ぐため、周囲に深さ1m内外の溝を固らす事がある。
- (15) 館跡の周囲に廻る溝は、その性格上、杉ノ上Ⅰ遺跡の溝などより、はるかに大規模である。ただし、内部の各所に見られる溝類については、同じくらいの規模のものも見られる。
- (16) 岩手県教育委員会ほか 1974 「大瀬川館現地説明会資料」
 - 同 上 1975 「柳田館第1次調査現地説明会資料」
 - 同 上 1976 「柳田館第2次調査現地説明会資料」
- (17) 同 上 1976 「久保屋敷発掘調査現地説明会資料」
- (18) わが国に於ては、弥生時代以降の環濠集落が知られているが、本島では、まだその存在が充分確認されていない。ただ、奈良—平安時代に属する水沢市石田、江刺市宮地、北上市尻引などの集落跡で、環濠らしい溝が発見されている。
 - ① 岩手県教育委員会ほか 1975 「昭和50年度Ⅱ期 石田遺跡発掘調査現地説明会資料」
 - ・ 1976 「昭和51年度 石田遺跡現地説明会資料」
 - ② ① 1976 「昭和50年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
 - ・ 1976 「宮地遺跡調査中間報告会資料」

- 岩手県教育委員会ほか 1977 「昭和51年度、東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
- ③ 北上市教育委員会 1977 「尻引遺跡調査報告書」
- 08 岩手県南地方では冠婚葬祭などの儀式などで、人が大勢集まる時に、庭先に臨時のかまどを作る事があったという。その際、かまどの底部は地面をやや細長く掘り凹めて作られていた。また、このかまどには普通、覆屋を作わないが、伴なう場合には、ごく簡略なものが付けられた。
- なお、これと同様のかまどは、田畠のほとりに設けられる事もあり、農作業の折に、茶を沸したり、簡単な炊事をしたりするのに用いられた。以上の様な慣習は1960年頃までは岩手県南、特に東磐井・氣仙地方一帯では、確実に見られた。
- ただ紫波郡付近で同様の慣行が行なわれていたか、今のところ解らない。
- 09 測定結果については、03と同様、末尾の測定結果報告書による。
- 20 08で掲げた同一報告書中で、縄文後期に属する滝沢村卯遠坂遺跡のAH18フ拉斯コピット中の資料の測定値は 3690 ± 100 Y·B·Pで示されている。その他、平安時代に属する都南村下羽場遺跡の焼失住居跡の炭化材が 1660 ± 85 Y·B·P、同じく石鳥谷町大曲遺跡のDG65住居跡の炭化材が 1200 ± 65 Y·B·Pで、それぞれ示されている(年代値は ^{14}C の半減期を5730年として計算したもの)。これらの年代値は、いずれも予想されていた年代値よりも古過ぎる値である。そのため、 ^{14}C 年代については、その適用をめぐって若干の疑問が生じている。
- 21 戸塚陽太郎氏らの談による。

ふる だて えき まえ
古 館 駅 前 遺 跡

遺 跡 記 号：FDE

所 在 地：紫波郡紫波町中島字落合56—5 他

調 査 期 間：昭和48年10月1日～11月30日

調査対象面積：3360m²

平面実測基準点：東京起点 479.960km (BA50)

基 準 高：海拔 107.00m

1. 遺跡の位置と環境(第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P14)

古館駅前遺跡は紫波郡紫波町中島字落合に所在する。西方東根山(928m)に源をもつ五内川が沢田地区で一担分流し、本遺跡の東方200mの地点で両河川が合流して本流北上川に注いでいる。また地形的には西方に奥羽脊梁山脈が南北に走りその東縁に起伏量100~200m未満の丘陵地が形成されている。この丘陵地の東端から段丘の発達をみ北上川河谷低地に連なる。この段丘は三区分され上位、中位、下位の段丘群となる。また段丘と段丘の境界に段丘崖を発達させている。段丘崖の発達は中位段丘と低位段丘の境に顕著であり、本遺跡はこの中の中位段丘の縁辺に占地するもので四隅は低位段丘に囲まれた微高地となり、西方を除きU字形に崖線が遺跡をとり囲んでいる。

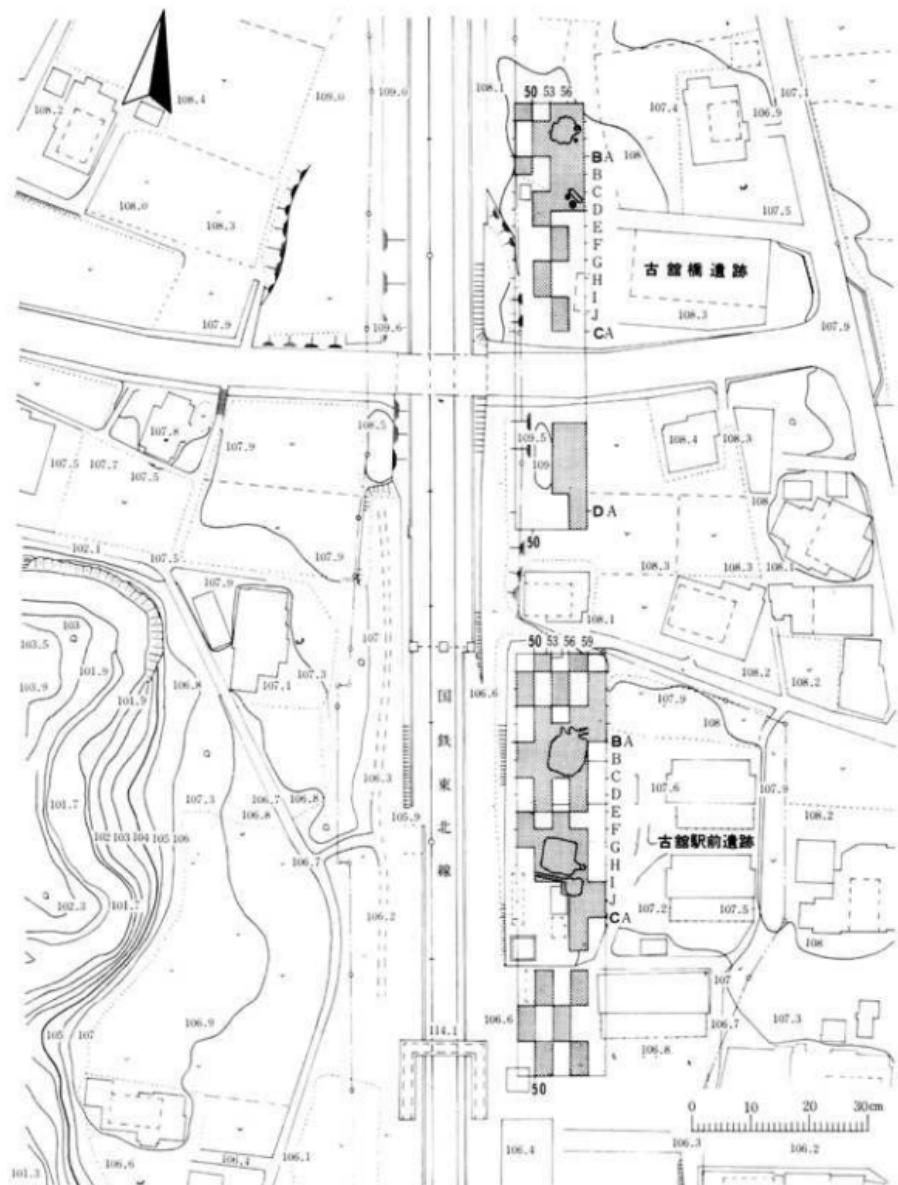
一方土地利用の現況は、国鉄古館駅の本屋からわずか北7m地点を南端とし北110mに至る区間が本遺跡の南北長となっている。このため遺跡は古館駅の付属施設である宿舎・通信配線室・浴場・物置・井戸その他の構造物をのせていることになる。したがって表土から地山面まで喰い込む擾乱及び削平が随所に見られ破壊の著しい遺跡となっている。

次に近隣にはほぼ同時期と思われる遺跡を探すと田頭・杉ノ上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・稻村・古館橋・白沢遺跡等々をみることができる。また北方に徳丹城遺跡がある。

2. 調査の方法と経過(第1図)

本遺跡の発見は、東北新幹線にかかるルート内の調査において昭和47年に発見されたものである。遺跡は東北新幹線の中心杭を基準とし、東京起点479.940kmから479.960kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸として設定した。また479.960kmを本遺跡の基準点としBA50と呼称し基準点間の方向角はN-9°05'-Wである。

調査はBA50の基準点をもとに3×3mのグリッド方式を採用し、古館駅本屋の北7m地点から北へ約120m、東西巾15mの範囲内を調査区として行った。この結果、竪穴住居跡2棟、竪穴式掘り込み土塗1基、V字型土塗1基、溝状遺構1条を検出した。またこれの遺構に伴う遺物は土師器、須恵器、土師質土器を主体とし、器種では、环・皿・甕・壺・長頸瓶・蓋を中心となり、特殊遺物として、須恵器の蒸し器、高台付椀型土器等を出土した。



第1図 グリッド配置図

3. 調査の結果

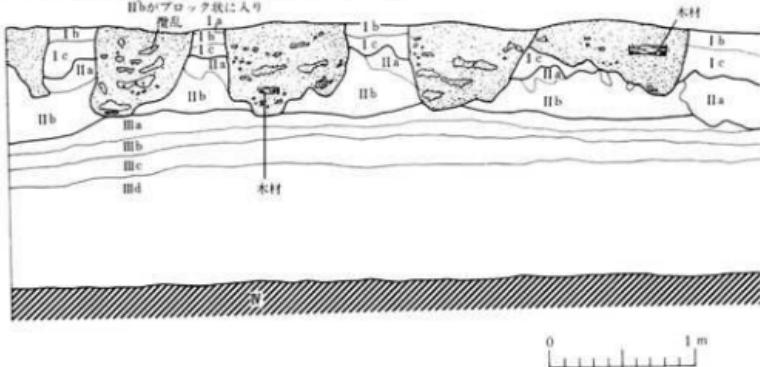
[1] 遺跡の基本層位(第2図)

本遺跡は東北本線施設工事及び駅舎その他の建造物等により著しい擾乱と削平を余儀なくされ基本層の観察は困難を極めた。

本遺跡では層位の把握のためBA50の東2.7m線を南北に6.3mにわたり深掘りした。その結果得られたのが第2図の土層断面図である。この位置は古館駅の宿舎と宿舎の空地部分であったが土層図にみるとごく擾乱が著しく深い所では地表面下約60cm辺まで及んでいる。層群は4層に分層され、さらに2~4層に細分される。I群は表土で耕作土となっている。Ia層は石炭ガラ・灰・砂利などの混合土である。Ib層は暗褐色を呈する耕作土で固くしまっている。Ic層も色調は暗褐色もしくはこげ茶色を呈しているが上層と異なり粘性をもつ。II群は2層に分層され、IIa層は火山灰土でこげ茶色を呈し若干軟質である。一方IIb層も火山灰土であるが濃いやまぶき色を呈し前者と色調を幾分異にし且つ粘着性をもつ。III群は4層に分層され本層群は粘土層となる。IV層は礫層となる。なお第3図は国鉄ボーリング調査の柱状図で調査地点は東京起点479.860kmである。これは本遺跡の南方100m地点に当る。本柱状図においても表層地質はほぼ一致するものと思われる。次に遺構検出面をみるとII層群の上面から掘り込まれていることが確認された。

注記

Ia	石炭がら、灰、小石等が混じった土	IIIa	粘土、やや濃いやまぶき色(7.5YR %)大山灰質、粒子は細かい
Ib	耕作土、暗褐色(5YR %)固くしまる	IIIb	粘土、やまぶき色(7.5YR %)粘着性大、固い
Ic	耕作土、暗褐色(5YR %)こげ茶色、粘着性あり	IIIc	粘土、青味の強いやまぶき色(10YR %)固い
IIa	火山灰土、こげ茶色(7.5YR %)柔らかい	IIId	粘土、黄橙色(10YR %)固い
IIb	火山灰土、濃いやまぶき色(7.5YR %)粘着性あり	IV	礫層
	IIbがブロック状に入り		



第2図 基本層位図

[2] 発見された遺構と遺物

(1) 穴住居跡とその出土遺物

BA 50住居跡（第4図、図版2の5）

古館駅前遺跡は東北本線古館駅の駅舎及び宿舎その他駅舎付属施設などの建造物の真下にあり擾乱が著しく遺構の検出が極めて困難であった。本住居跡はBA 50地点から東約2mで検出された。

〔位置〕 BA 50から東に2~8m、同じく北1m~南5mの範囲で検出した。

〔検出面〕 本住居跡は地上に古館駅の宿舎があり、且つコンクリートの基礎が埋設され擾乱が著しく遺存状態は劣悪であった。したがって検出面の確認は難しく表土下のⅡ層群中、つまり橙色ローム面で壁の確認をするに至った。

〔平面形〕 南北6m、東西5.5mの隅丸長方形プランを呈し、長軸方向はほぼ磁北と一致する。

〔埋土〕 第4図の実測図にみると東西に走る二本の溝による擾乱と床面上に2m~2.5mの大不正円形の擾乱がある。したがって埋土の層位区分が判然とせず単層としてとらえざるを考えた。埋土は黒褐色（7.5YR 3/4）を呈し粘性は少なく微粒子を混入している。

〔壁・床面〕 壁高は西壁で約20cmを計測し、東壁は22cmである。北壁は16cm、南壁は27cmで全体として北壁がわずかに低い傾向をみせている。

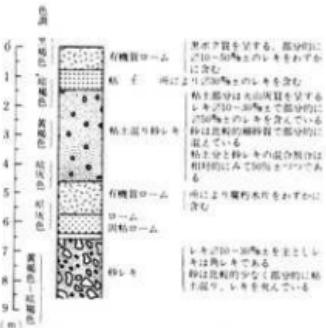
床面は高低差が殆どなくわずかに北高、南低の傾向をみており、また貼床は認められない。

〔周溝〕 北東隅から南西隅にかけて壁の真下を半周している。周溝の下端巾は約20cmから30cm内外を測り一般に広い。床面からの深さは6~15cmを測る。なおこの周溝は北西隅で新しい溝によって切られ周溝の溝底部のみを残している。

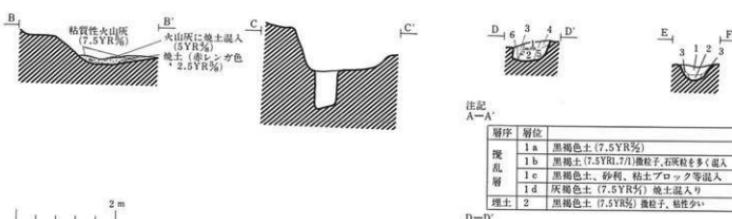
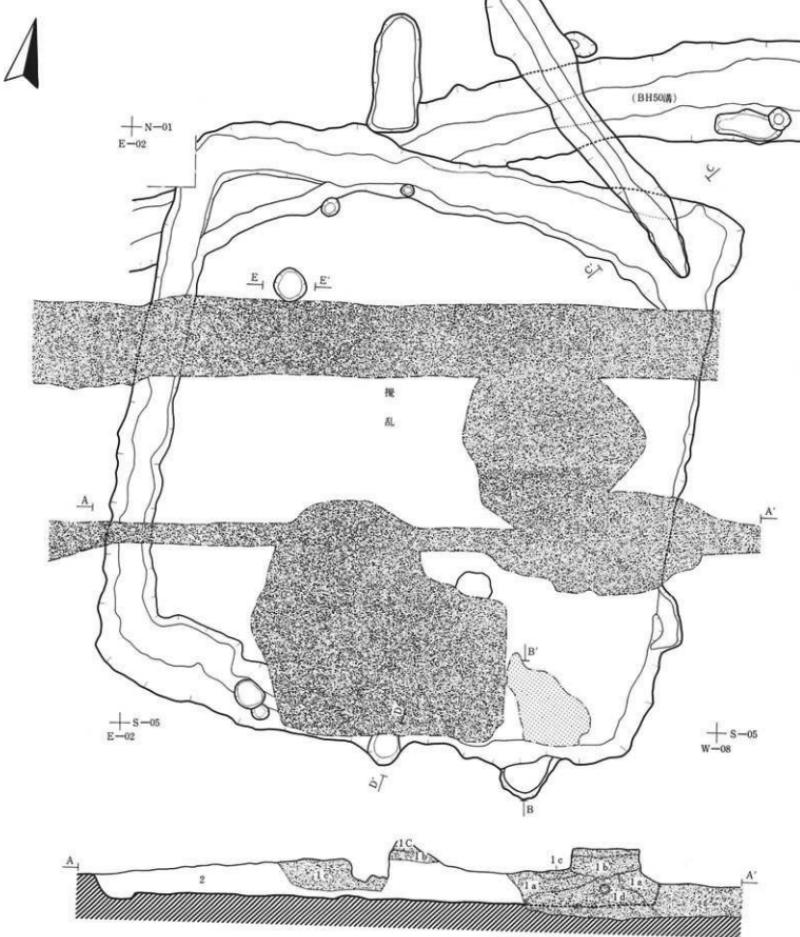
〔ピット〕 床面上に1個、周溝及び壁面上に3個の計4個を検出したが、柱穴と想定されるには至らなかった。

〔かまど〕 東壁の南寄りにかまど遺構を検出したが左袖部分まで排水槽のコンクリートの基礎のがび遺存状態が悪くわずかに焚口部を残存するのみであった。火床部の底部に焼土・木炭粒を多量に含んだ褐色土が検出された。また奥壁付近と推定される位置で土師器の环が倒伏して出土し、左袖部と推測される位置では土師器の長胴甕が倒立して出土している。なお煙道及び煙出部の検出はできなかった。

その他、床面南東隅で長軸1.1m大の不正形焼土の広がりが検出されたが、前記のかまどとの関連については不明である。



第3図 土層柱状図



第4図 BA50住居跡平・断面図

E-E'

- 暗褐色土 (部分的に砂の火山灰混入)
- 暗褐色土 (よりやや中黒 (焼成の火山灰土混入))
- 褐色 (火山灰土のベースの中に褐色土かまばらに混入)

〔遺物出土状況〕 住居跡南東隅の床面直上で土師器壊のほぼ完形品をまた木葉底の壊底部破片をはじめ土師器・須恵器の壊・皿・高台付椀・蓋・小形甕・長胴甕・長頸瓶等々の復元可能な土器及び破片を出土した。一方埋土内から多くの破片を出土している。

本住居跡は北東隅付近にV字状土括（AJ56土括）が構築され埋没した後に本住居跡がこれを切って構築されたものである。また北西隅は本住居跡が廢棄された後に北東から南西方向に直線上に伸びる浅い溝で切られている。さらに本住居跡は東北本線開通に伴い駅舎等の建設により著しい破壊を受ける結果となった。

〔出土遺物〕（第5・6・7図、図版3）

本住居跡出土の遺物は土器・石器などであり、土器は土師器・須恵器・土師質土器の三種類となる。ここでは完形・復元土器・図上復元土器を主体に述べることにする。

土師器

壊1（第5図1a、図版3） かまと内出土の約 $\frac{1}{2}$ を欠損するロクロ成形による内黒壊で法量は口径14.4cm、底径7.4cm、器高3.5cmを計測する。形状は器高が低く、底部は回転糸切り後、軽い回転ヘラケズリの再調整が行われる。体部は丸味をもって内湾氣味に外傾し、口縁部わずかに外反する。調整は底部内面は磨滅により判然としないが体部上半には巾の狭い横方向のミガキが施されている。

壊2（第5図2） ロクロ成形による住居内出土の内黒壊で口縁部を若干残存する。図上復元により口径15.0cmを計測した。全体に作りが丁寧で、口縁部直下をロクロ回転による凹線が一周する。器厚が薄く胎土は精良で均質となっている。調整は内面にのみとどまるが口縁部から体部に及ぶ横方向のミガキが明瞭に認められる。体部中央でさらに、斜方向のミガキが交錯している。二次調整の丹念な仕上げが伺える資料である。

甕1（第6図25、図版4） 小形甕で、口縁部から体部下半までの一部を残存する破片である。ロクロ成形で、内外面とも再調整は認められない。胴部はわずかにふくらみをもって立ち上がり口縁部で「く」の字状に外反し、口唇部は上方に直立氣味に挽き出される。口縁部に二次加熱による部分的な剥落が認められる。また広範囲にわたって煮汁状のカーボンの付着がある。胎土は黄白色である。

甕2（第6図26、図版4） 胴部下半を欠損した長胴甕でロクロ成形により最大径を口縁部にもつものである。胴部は直立氣味で口縁部は強く「く」の字状に外反し、口唇部は上下方向に挽き出され、巾0.5cm内外の縁帯が回る。調整は胴部に斜方向の平行叩き目痕がありその上をヘラケズリ調整の再調整がなされ、内面の調整は認められない。胎土は精良とはいはず径1cm内外の礫を含みまた、石英・雲母の細砂を多量に混入している。焼成は硬質で、色調は赤褐色を呈し口縁部付近には二次加熱による赤変部分もみられる。

甕3 (第6図27、図版4) 口縁部約 $\frac{1}{2}$ と胴部上半を若干残存する長胴甕の破片である。巻き上げ成形により口縁と胴部の境に段を有し口縁部が長く外反する。調整は口縁部から胴部にかけて平行叩き目痕が認められる。一方口縁部内面はヨコナデが、また胴部は横方向のハケ目調整が全面にわたりみられる。胎土は砂礫を含み脆弱で内外面とも器面の剥落が著しい。一方口縁部内面にカーボンの付着が一層する。

甕4 (第6図30、図版4) ピット壁際出土の破片、ロクロ成形による長胴甕である。法量は口径22.2cmを計測しやや大型である。胴部はややふくらみをもって立ち上がり内窩傾向をみせる。口縁部は「く」の字状に外反し、且つ口唇部は上方に挽き出されている。外面の調整は口縁部から胴部にかけて斜方向の平行叩き目、胴部には縦・横方向のヘラケズリ調整を加えている。一方内面の再調整は認められない。胎土は石英・雲母の粒子を含みわずかに礫の混入も認められる。焼成は硬質で、色調は酸化炎焼成による赤褐色を呈し、口縁部付近にわずかなカーボンの付着が認められる。

甕5 (第6図31、図版5) ロクロ成形による小形甕の底部破片である。底部は回転糸切りにより内外面の再調整は一切認められない。胎土中に雲母・砂礫等をわずかに含み、焼成は良好で黄白色を呈するものである。

甕6 (第6図32、図版5) 胴部上半を欠損する小形甕である。ロクロ成形で底部は回転糸切り、調整は内外面とも行なわれず、ロクロ痕のみである。胎土はわずかに細砂を含むが精良で焼成も良好である。色調は黄白色を呈している。

甕7 (第7図34、) 胴部下半から底部を残存するピット内出土の小形甕で、成形技法は巻き上げである。器形は底部が高台付で、断面図が台形を呈するものである。底部と胴部の境は屈曲線をもって画され、胴部は内窩しながら直立気味に外傾して上方に伸びる。調整は胴部下半に平行叩き目が、また底部付近は横方向のヘラケズリ調整がみられる。内面は底部にヘラケズリ調整が同様に施される。一方底部外面には木葉痕を残す(第7図34の6)。胎土は極めて脆弱で破片断面は薄片となって剥落する。色調は赤褐色を基本とするが部分的に黒褐色のところもみられる。

その他に本住居跡埋土内・床面・ピット埋土内などから6片の叩き目調整痕をもつ甕の胴部小破片が出土している。第8図1は斜方向に3条の平行叩き目をもつもので叩き目の巾は一部欠損のため不明である。叩きしめのあとヘラケズリの再調整を行なっている。焼成はやや良好で色調は赤褐色を呈している。同図2は格子目の叩き目を明瞭に残すものである。叩き目の巾1.6cmを計測する。内面にあて板痕の痕跡がありヘラナデ調整を行ない焼成・色調とも前者に類似する。同図3はやや大形の破片でロクロ未使用で三条の巻き上げ接合痕を残している。外面に3ヶ所にわたり巾2.5cmの大平行叩き目痕をもち、さらにその上をヘラケズリ調整で仕

上げている。内面の調整は磨滅があり判然としない。色調・焼成等は前者に類似する。他の3片はいずれも平行叩き目痕でその上をヘラケズリ再調整で仕上げている。このうちピット埋土上面出土の1片は内面に内黒処理がなされ焼成は硬質で色調も赤褐色で他の2片とやや異なるものである。

須恵器

环1 (第5図3、) ロクロ成形で底部と体下半部の一部を残し他を欠損、胎土中に若干の石英粒子を含むが概ね精良である。焼成は硬質で色調は灰白色を呈する。底部は回転ヘラ切り無調整で内外面の調整は認められない。

环2 (第5図4、) 底部の約 $\frac{1}{2}$ を残存する破片である。底径6.4cmを測る。ロクロ成形、底部は回転糸切りの切り離しで蒐書きの刻線がみられる。焼成は極めて硬質である。色調は青灰色且つ体部と底部に3条の火棒を内外面に残している。

环3 (第5図8、図版3) ピット内出土で口縁部の $\frac{1}{3}$ を欠損する。法量は口径13.1cm、底径7.4cm、器高3.7cmを測る。口径に対する底径比が大きく、器高の低い环である。体部はロクロによる凸凹が顕著で立ち上がりはほぼ直線的に外傾する。焼成は硬質で色調は灰白色を呈する。底部切り離しは粗めの回転糸切りで内外面とも調整はない。体部内面にロクロ回転による渦状の隆起文が残る。

环4 (第5図9、図版3) 口縁部の一部を欠損するほぼ完形に近い环である。法量測定値は口径13.2cm、底径6.8cm、器高3.8cmを計測する。器形は底部から口縁部にかけ直線的に外傾し口唇部は丸味をもって終結する。底部は回転糸切りの切り離しで調整はみられない。焼成は硬質で色調は青灰色であるが部分的に茶褐色を呈する。内外面に数条の火棒が認められる。

环5 (第5図11、図版3) 完形に近い环で法量は口径13.2cm、底径7.6cm、器高4.6cmを計測する。体部は底部からふくらみをもって立ち上がるが体中央付近からは直線的に口縁部に至る。胎土中に小礫を混入し、焼きブクレがみられる。底部切り離しは不明で再調整はヘラケズリと思われるが判然としない。底面にジグザグの蒐書き様の沈線がみられる。また口縁部の内側にカーボンの付着がある。

环6 (第5図15、図版3) 全体の約 $\frac{1}{2}$ を欠損する。復元実測で口径14.0cm、底径7.4cm、器高3.6cmを得た。器形は底部から体部中央付近まで内寄しながら外傾し口縁部で外反する。底部切り離しは回転糸切りで調整はなく、体部下半に横方向、または斜方向のヘラケズリ調整を行なっている。色調は赤褐色を呈するが焼成は硬質である。

环7 (第5図19a、図版3) ピット内出土の口縁部をわずかに欠損する环で法量は口径14.2cm、底径7.9cm、器高3.5cmを計測した。底径が大きく且つ器高は類例中極端に低い。底部切り離しは回転糸切りで再調整はない。胎土は堅緻で焼成も硬質である。色調は灰黄色を呈してい

る。

高台付楕型土器 1 (第5図22、図版4) 底部の一部を残存する破片である。図上復元の結果、底径8.9cmを測る。ロクロ成形で脚部を欠損しているが基部の痕跡から若干外方に開脚するものと思われる。底部と体部の境に陵をもち強く屈曲して立ち上がる。調整は認められない。焼成は硬質で色調は黄褐色を呈する。

蓋 1 (第5図23) ロクロ成形で天井部を欠損し口縁部の一部を残存する。また端部のかかえりの浅いのが特色となっている。色調は灰白色系で焼成は硬質である。

長頸瓶 1 (第7図37、図版5) 小形長頸瓶もしくは壺の肩部から体部にかけての小破片と思われる。成形にロクロを用い、内外面の調整はみられない。胎土・焼成とも良好で、器形は推測で胴部が球形状を呈するものと思われる。次に頸部付近から流れた自然釉が緑色を呈し体部中ほどへ流下、末端で径0.8cm大の半球状の滴となって停止する。類例の少ない自然釉として異彩を放つ。

壺 1 (第7図38、図版5) 脇部と底部の破片であるが夫々を接合する部品を欠失している。やや大型の壺で残存する底径は7.2cmを測り、底部は平底で脇部下半はほぼ直線的に外傾し中ほどから内窓気味に内傾に転ずるものである。調整は斜方向の平行叩き目を体部から底部にかけて施し、さらにその後ヘラナデ調整を行なっている。内面は全てヘラナデ調整である。胎土は堅緻で焼成も硬質である。色調は外面が黒褐色、内面は青灰色を呈している。

また須恵器破片で、第9図1は大腹脇部の破片である。外面は平行叩き目工具を用いて強く叩かれ、部分的にヘラケズリ調整がなされている。内面は青海波及び同心円状のあて板痕を明瞭に残している。胎土・焼成とも良好で典型的な須恵器である。

第9図2は外面に平切叩き目がみられ破片全面に自然釉が認められる。内面は前記同様の工具によるあて板痕を残す。色調・焼成とも前者に類似する。

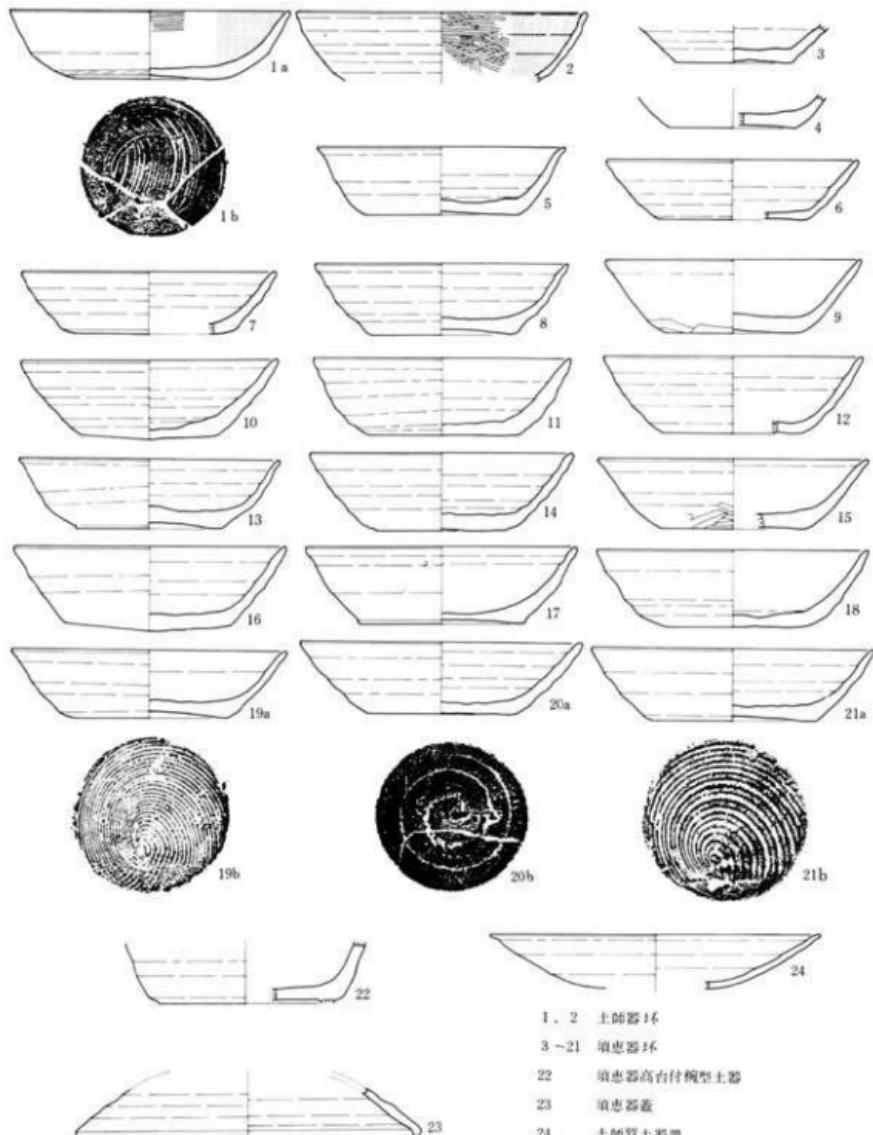
第9図3は格子目の叩き目で、あて板は1に類似するが色調は褐色を呈し部分的に若干の灰色を帯びる。内面は淡い灰色となっている。焼成は堅緻である。

第9図4は2に類似するものであるが自然釉の色調が前者は黒色に近いのに対しこれはやや緑色を呈している。

第9図5は4に類似するが器厚の薄い破片である。また自然釉の剥落が著しい。

第9図6は外面に平行叩き目工具による压痕を明瞭に残し灰黑色の自然釉が全面にみられる。内面は1に類似する。胎土・焼成等も同様である。

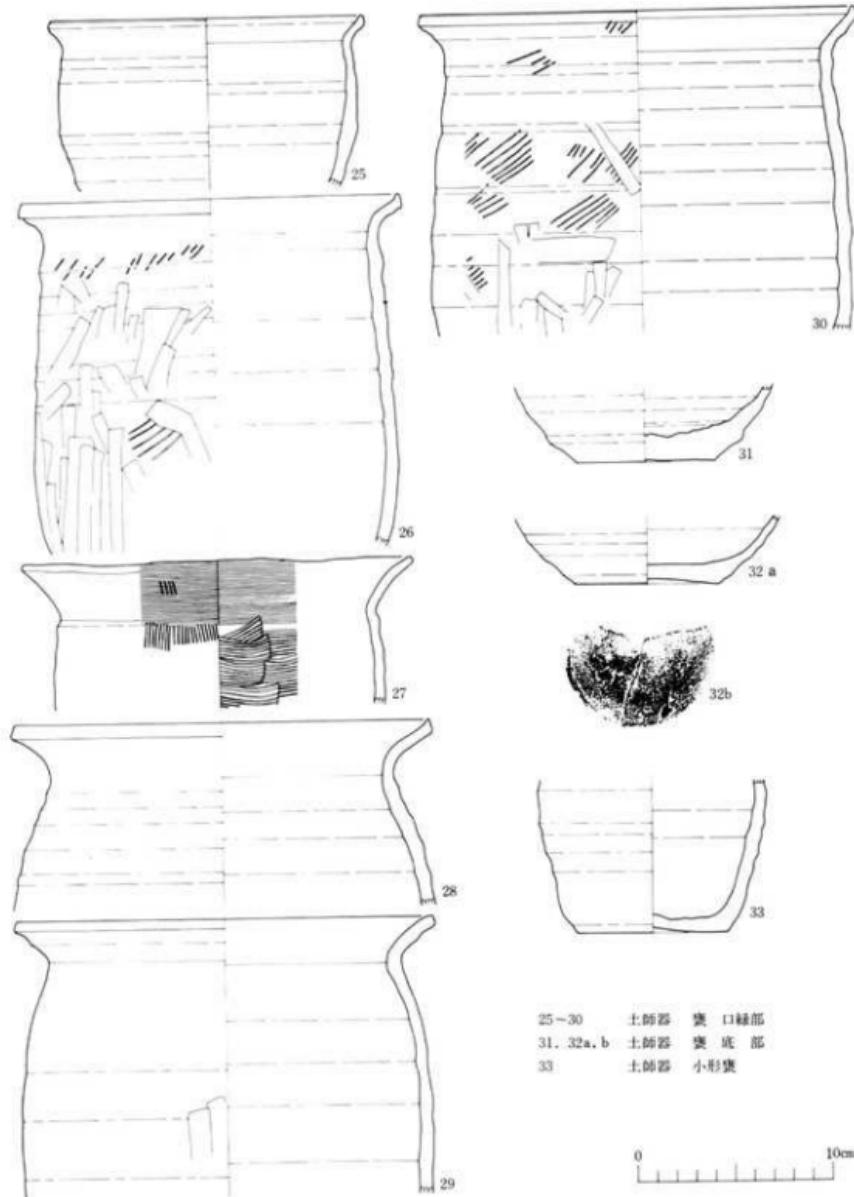
皿 1 (第5図24) 口縁部と体部の一部を残存する破片を復元実測したものである。推定口径17.0cmを測る。体部はわずかにふくらみをもって立ち上がり口縁部で外反する。器厚は薄く胎土中に小礫をわずかに含む。焼成は硬質で色調は暗褐色である。外面全体に黒褐色のカーボ



- 1, 2 土師器環
- 3~21 頃甕器環
- 22 頃甕器高台付模型土器
- 23 頃甕器蓋
- 24 土師質土器皿

第5図

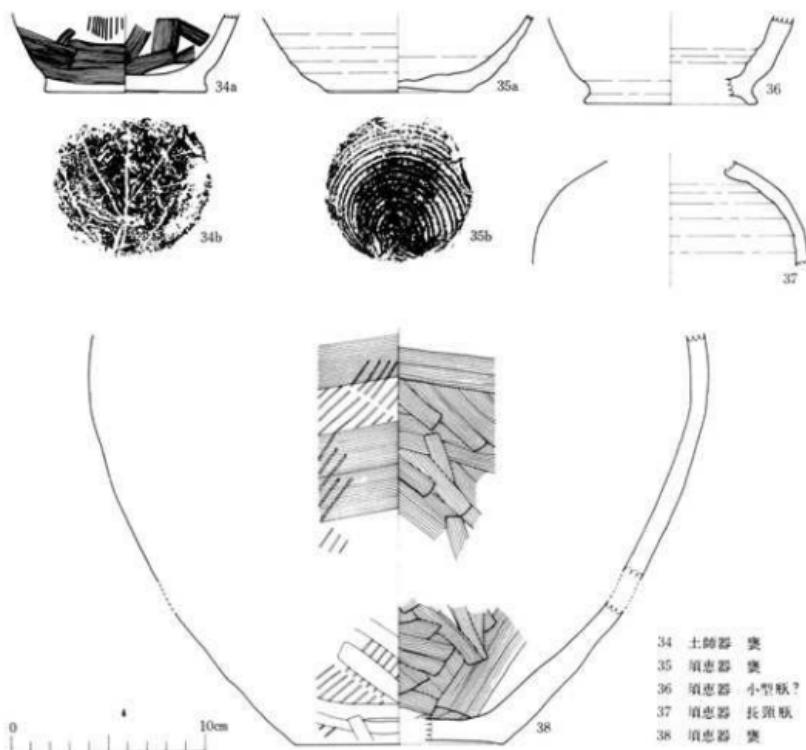
BA50住居跡出土土器実測図(1)



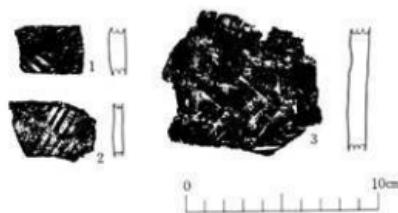
25-30 土師器 壺 口縁部
31, 32a, b 土師器 壺 底 部
33 土師器 小形壺



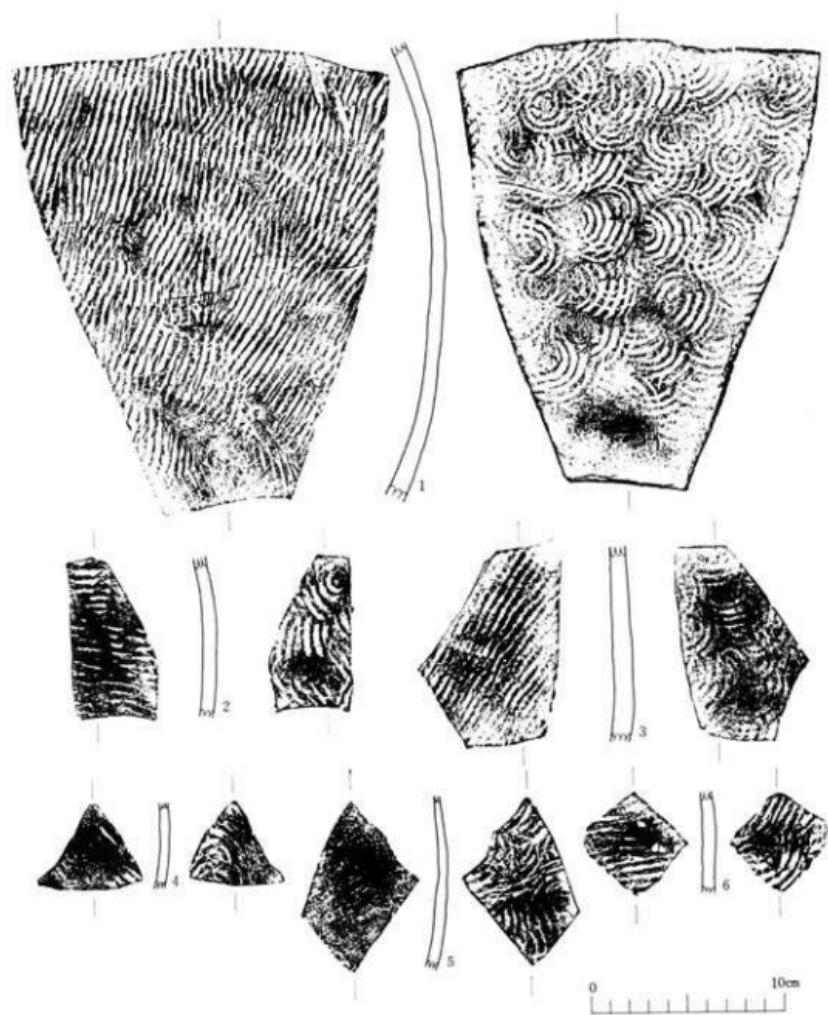
第6図 BA50住居跡出土土器実測図(2)



第7図 BA50住居跡出土土器実測図(3)



第8図 BA50住居跡出土土筛器拓影図

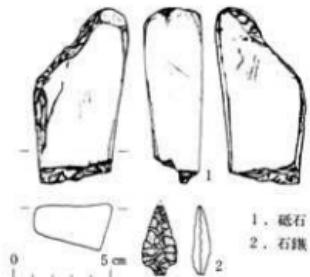


第9図 BA50住居跡出土須恵器破片拓影図

ンの付着がみられる。

石器（第10図、図版5）

住居跡埋土内から出土したものである。1は砥石の破片で研磨部を三面に残している。長軸8.5cm、巾4.5cm、高さ約3cmを測り、端部は欠損している。各面とも使用痕が残されている。2は石鎌で、残存長3.6cmを測る。器形は尖頭部と基部から成り、基部が凸状を呈しえぐりがやや深く、側縁にわずかなふくらみが認められる。なお基部の先端と尖頭部の一部をわずかに欠損している。



第10図 BA 50住居跡出土石器実測図

BF 53住居跡（第11図、図版2）

本住居跡はBA 50住居跡から南約10m付近で検出されたものである。BA 50住居跡同様に古館駅の付属建物である浴場及び物置の真下に位置するもので擾乱が著しい。

〔位置〕 基準点BA 50から南へ約17m付近で住居跡の北西コーナーを検出した。また南西隅はほぼBA 50のセンター上に位置し東へ約9mのびていた。

〔検出面〕 耕作土の下、橙色ローム面（Ⅱ層）で掘り込み面を検出した。

〔平面形〕 南北・東西のいずれも約6mを測り、隅丸方形プランを呈する住居跡である。

〔埋土〕 住居跡の北壁に平行して国鉄宿舎の排水溝が付設されそのため地山層まで擾乱を受けている。一方床面上に10数個の方形もしくは円形の束柱埋設の際に掘られた穴があり破壊が著しい。以上から埋土の分層が判然とせず、単層としてとらえた。埋土は暗褐色土で粘土ブロックを混入するものである。

〔壁高〕 東壁が20cmを測り最も深く、他は10cm内外を計測した。一方壁面の傾斜角は北がきつく南にゆるい傾向をみせている。

〔床面〕 床面は起伏が少なくほぼ平坦である。南北では南側が10cmほど高くなっている。貼床は認められないが一般に壁直下は固くひきしまっている。

〔ピット〕 床面上に3個のピットを検出したがこのうち形状・深さ・埋土等からP₁とP₂の2個を柱穴と断定した。このうちP₁は埋土に柱あたりを明瞭に残している。

〔かまど〕 かまどは東壁やや南辺寄りに付設され焚口部・煙道・煙出部を夫々検出した。焚口部の袖は左右とも破壊され痕跡をとどめない。煙道は東壁に対してほぼ垂直に伸び、壁端から約2mを測る。かまどの上部構造は削平により消滅し底部のみを残存する。火床部は4層に分層され、第3層が赤褐色を呈し焼土層となっている。煙道部は若干上り勾配で煙出部は一部掘り込まれている。

〔遺物出土状況〕 床面直上からの出土が主なものであり壁周辺部にやや密度が高い。また特に集中的に出土する範囲は南東コーナー付近である。遺物は土師器及び須恵器の破片を主体とする。

〔遺物〕

須恵器（第12図1）

壺1（第12図1） 口縁部の約 $\frac{1}{3}$ を残存する破片を図上復元したものである。推定計測の結果口径12.8cmを測る。体部の立ち上がりが直線的で口縁部がわずかに外反する。器厚が薄く、内外面とも再調整は行なわれない。胎土中に若干の砂粒を混入するが焼成は良好で色調は灰黄色を呈している。

蓋1（第12図2） 天井部を欠損し口縁部の一部を残存する小破片である。図上復元で径14.4cmを測る。口縁端はわずかにかえりをもつ。残存部分での再調整は認められずロクロ回転の痕跡のみである。胎土はやや精良で焼成も良好である。色調は橙色がかった灰色を呈する。

甕1（第12図4） 口縁部をわずかに残存する小破片を図上復元したものである。ロクロ成形により口縁部が強く「く」の字状に外反し、口唇部は上方に強く引き出されている。器厚は薄い。なお調整は内外面ともみられない。

須恵器壺の小破片をみると底部切り離し技法が回転ヘラ切りのものと回転糸切りのものの二型式がみられる。口縁部は外反するものと直線的に終焼するものに分けられる。焼成は硬質のものとやや軟質のものに、また色調は青灰色のものと黄白色を呈するものに二大別される。これらは再調整を全く受けていない。以上から須恵器の壺は大きく二区分されるものである。

甕類は胴部破片で斜方向の平行叩き目のものが2点、内面はハケ目痕を横方向に施してある。長頸瓶の底部付近の小破片が1点みられ内外面の調整はなくロクロ痕のみである。壺の破片2個の中1点は底部切り離しが回転糸切りで再調整がなく底部から体部にかけ明瞭な黒色の火襷が三条認められる。他の1片は胴部付近と推測されるが内面はロクロ痕、外面は暗オリーブ褐色の半透明の自然釉が全面にかかるものである。

土師器

甕1（第12図3） 口縁部をわずかに残存する小破片を図上復元したものである。ロクロ成形により口縁部がゆるく「く」の字状に外反し、口唇部は水平に切られた形状を呈する。器厚が厚く胎土中に石英その他の細砂を多量に内包している。色調は褐色を呈し口縁部に若干のカーボンを付着する。なお調整は内外面とも横方向のハケ目が施される。

土師器甕破片（第13図） 甕胴部破片であるが外面に格子目状の叩き目の痕跡を残すものである。叩き目と同時に全面にわたってヘラケズリ調整が継・斜方向から施されている。内面は

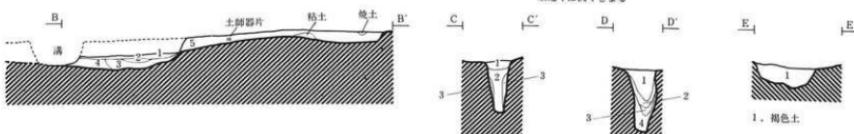
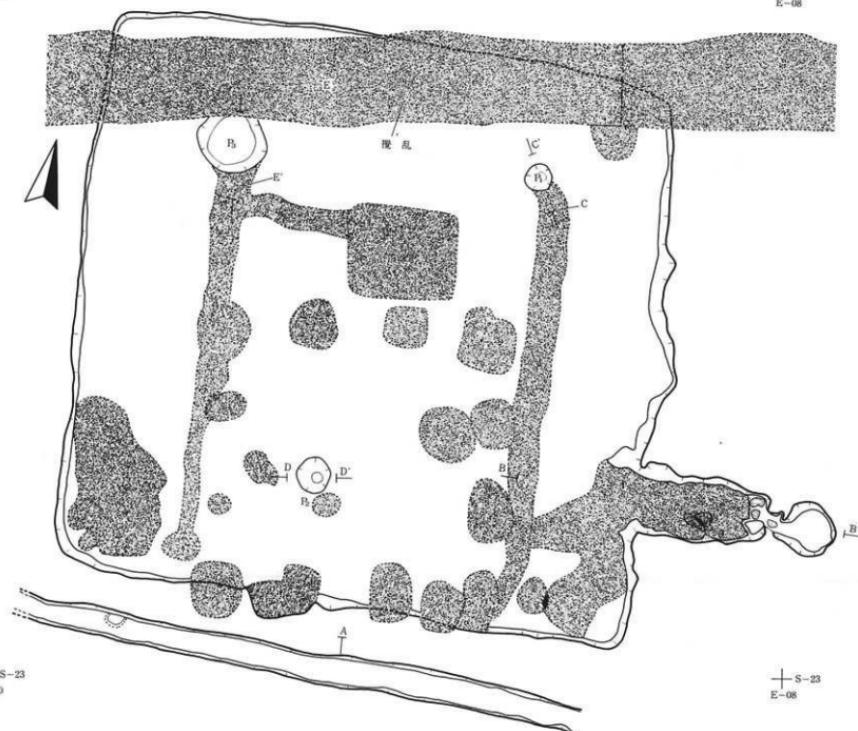
+ S-16
E-00

A'

+ S-16
E-08

+ S-23
E-00

+ S-23
E-08



1. 褐褐色土、本炭、燒土の粒子を混入
2. 黄褐色 燃土の小ブロック混入
3. 赤褐色 燃土層
4. 始褐色 燃土をブロック状に混入
5. 始褐色 火山灰土、炭化木を含む

1. 黒土色、黄色ロームをブロック状に混入
2. 黄褐色粘土
3. 始褐色土
4. 黄色粘土



第11図 BF53住居路平・断面図

磨滅が著しく調整等は不明である。胎土中に多くの砂粒を混入しているが焼成は良好で硬い。色調は黄橙色を呈している。

BI 53掘込み土括

(第14図)

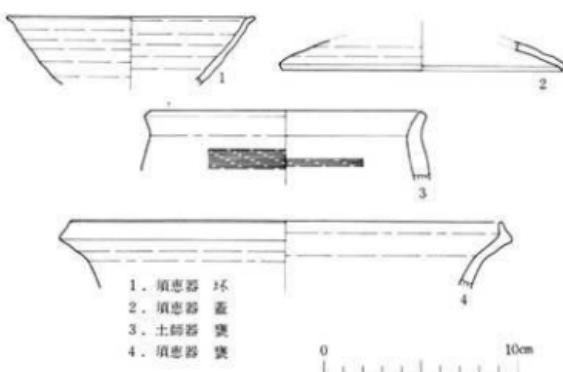
BF 53住居跡の南約0.5m付近、表土下の橙色ローム面で検出された。2.2m×2.4mの

ほぼ正方形プランを呈する竪穴式の掘込み土括である。埋土は3層に分層され、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土で焼土粒を混入する。3層は褐色土で火山灰土である。また第2層の黒褐色土の中に多量の石炭粒を含むブロックが混入している。本土括も東壁と南西コーナーで大きな擾乱を受けている。壁高は10cm内外を測り浅く傾斜角はゆるい。床面は南北にS字状の段差が走る。ピットは1個確認されたが柱穴と断定するには至らなかった。遺物は土師器・須恵器の破片をわずかに出土したが、南西付近の床面状で須恵器の蒸し器底部破片を出土している。なお遺構の性格は不明である。

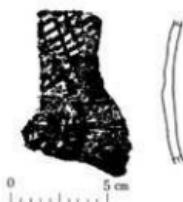
〔出土遺物〕

須恵器

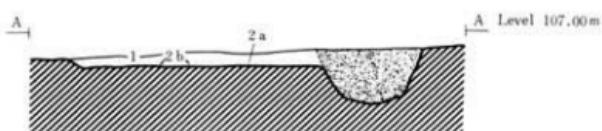
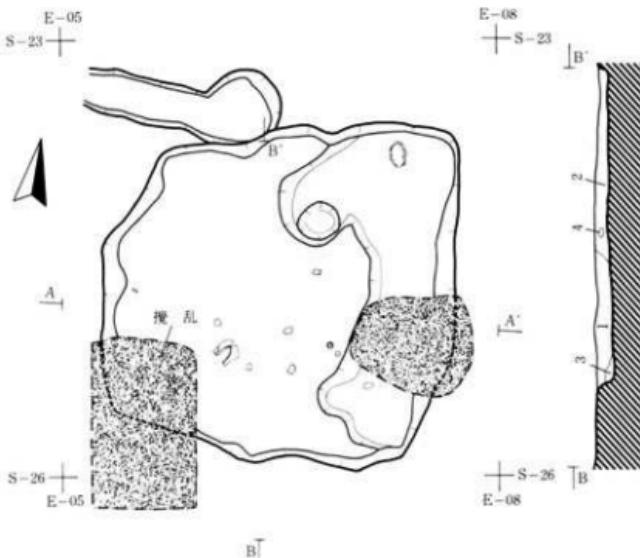
蒸し器 1 (第16図4、図版5) 脚部から体下半部の一部を残存する破片である。底径19.4cmを測る。脚部高は約2cmで脚部の接地面に一条の陵線が回る。脚部から体部はゆるやかに内弯しながら上方に伸びる。底部は空洞で抜けている。また体部下半内面に2個の刺突による凹状のくぼみをもつ。くぼみは長径2cm、短径1.5cm、深さ5mmである。刺突は棒状の刺突具を用い垂直方向に突きさしその後捩った痕跡をもつ。2個の穴は対をなし反対側にも穿孔されていたものと想定される。胎土・焼成とも良質、堅緻で色調も青灰色を呈する。



第12図 BF 53住居跡出土土器実測図



第13図 土師器甌破片拓影図



第14図 BI 53埴込み土拡平断面図



A-A'

- 1 黒褐色土 (7.5YR 5/6)粘性なくぼさぼさ
- 2 a 暗褐色やや粘性あり。少量の施土粒混入
- 2 b 2 a に褐色 (7.5YR 5/6)火山灰混入
- 3 暗褐色 (7.5YR 5/6)

B-B'

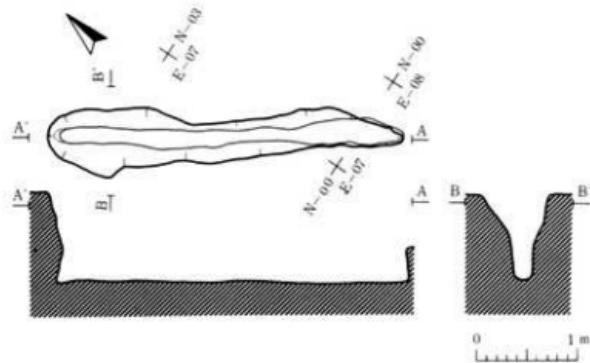
- 1 黒褐色土 (7.5YR 5/6)
- 2 a 暗褐色 (7.5YR 5/6) 施土粒混入
- 3 褐色 (7.5YR 5/6)火山灰土
- 4 黒褐色土 (7.5YR 5/6)石炭粒多量に混入

AJ56 V字状土塹

(第15図、図版2)

BA 50住居跡の北東隅に検出された遺構である。検出面は橙色ローム層から掘り込まれている。規模は長軸で約3.5m、最大巾70cmを測り、長軸方向は西に約40°の傾きをみせている。北東の約 $\frac{1}{3}$ はBA 50住居跡に切られまた北西約 $\frac{1}{3}$ は新時期の溝で切られており中央部がわずかに原型をとどめて遺存する。

したがって土塹の深さはこれらの破壊に

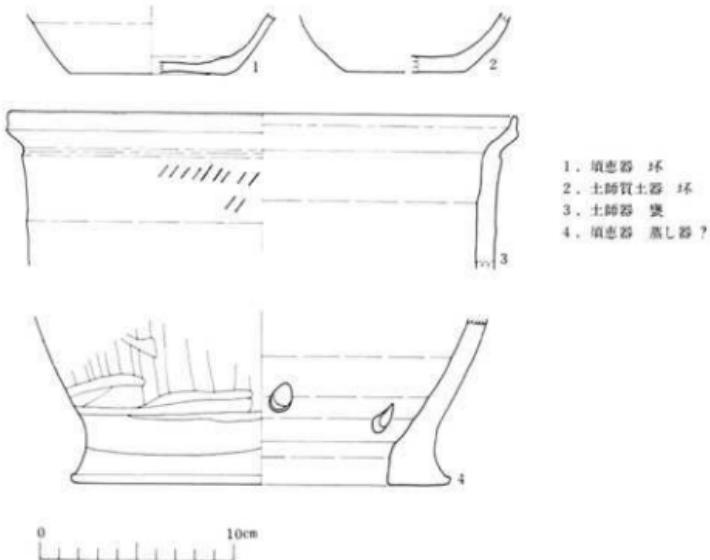


第15図 AJ56 土塹平面図

より構築頭初のものより浅くなっている。北東端で30cm、北西端で約90cmを測る。埋土は黒色土と火山灰土の混合土であるが下層ほど火山灰土の含有が多くなる傾向をみせる。埋土内からは遺物の出土はなかった。

BH 50溝 (第4図)

BI 53掘込み土塹の北壁から北西方向に約7m、巾30cm、深さ5~6cmの溝状遺構を確認した。埋土は暗褐色土に火山灰をシルト状に含んだ土で、遺物の出土はなく遺構の性格・時期等については不明である。



第16図 BI 53掘込み土塹及び遺構外出土土器実測図

4. 考 察

〔1〕 発見遺構

本遺跡で発見された遺構は竪穴住居跡2棟、掘込式土括1基、V字状土括1基、溝1条である。両住居跡の検出面は第II層赤褐色ローム面に求められる。平面プランは隅丸長方形及び方形のプランでBA 50住居跡は主柱穴に相当する柱穴は発見されない。BF 53住居跡は2個の柱穴を確認でき、うち1個は住居跡の対角線上にのるが他の1個は大きくずれて配置されるものである。また、かまどはいずれも東壁南辺寄りに付設されるがBA 50住居跡はかまど基底部のみ残存し他を消滅するもので構造・規模等は把握できない。BF 53住居跡はくり抜き式の煙道をもつが上部構造は削平によって残存せず、また燃焼部・袖ともに搅乱で消滅している。したがって位置関係に共通性を求めるだけである。

次に両住居跡は伴出遺物で量的に差が著しく、BF 53住居跡は土器の細片が若干出土するにすぎない。しかし、両住居跡とも器種内容においてほぼ共通し、遺物は床画、住居内ピット・

住居跡埋土内がほとんどを占め住居跡に共伴するものと考えられる。

以上、構造と遺物の両面から大略を記したが、住居跡構造については相去造構群のものにその類例をみることができる。^(注1)

掘込式土括 BF53住居跡に近接して検出されたものであるが、形状・規模等で竪穴住居に似るが、かまど・柱穴・貯蔵穴等の付設を伴わないことと出土遺物において土師器・須恵器の細片が若干出土しているが、ただ1点、須恵器の蒸し器状土器の破片が出ている。土器細片の観察から時期的には両住居跡と隔たりのないものと思われるが他に例がなく性格は不明である。

V字状土括 本土括はBA50住居跡と切り合い関係にありV字状土括を切って住居跡が構築されていることから住居跡に先行するものであろうし、この類例は県内はもとより、県外にも多数求められる。時期は縄文時代と考えられ、性格は動物捕獲の陥し穴とする説が最も有力視されている。また埋土内から性格・時期を決定づける伴出資料がなく説得力に欠けるが概ね形状等から陥し穴と考え大過ないものと思われる。^(注2)

BH50溝 巾・深さとも小規模のもので、また埋土観察からも性格・時期について云えるものはなかった。

以上が本遺跡における遺構である。

[2] 遺物について

本遺跡から出土した遺物は土器類・石器類に大別され、土器類は土師器・須恵器・土師質土器となる。また器種は種類がやや多く、壺・皿・高台付楕円形土器・蓋・小形甕・長胴甕・長頸瓶・壺などとなる。石器はわずかに2点で砥石の破片と石鏃である。

以上の出土土器について概略を記してみたい。

・土師器

A類は成形・調整にロクロを使わないもの

B類はロクロ使用のもの

壺 B1類 ロクロ成形で、底部切り離しが回転糸切り、外底部手持ちヘラケズリ調整、内面はミガキ調整で黒色処理されているもの。

B2類 ロクロ成形で、底部切り離しが回転糸切り、外底部は回転ヘラケズリ調整、体部内面は横方向のヘラミガキ、底部は放射状のミガキで黒色処理されているもの。

B3類 ロクロ成形で、底部切り離しが回転糸切りで無調整、内面に黒色処理が施され、またミガキ調整が底部に放射状に行なわれるもの。

第2表

遺構 遺物 名 目 番 号	写真 番号	種別	器形	法量測定値				測			
				口徑	胴径	底径	器高	口 内	縁 外	体 部	上 半 部
cm	cm	cm	cm					内	外	内	外
	1	土師器	环	14.5		7.4	3.5	横方向ヘラミガキ			
	2	-	-	15.0				ヘラミガキ		ヘラミガキ	
	3	道意器	-			6.0					
	4	-	-			6.4					
	5	2	-	12.8		7.8	3.5				
	6	-	-	13.0		7.4	3.1				
	7	-	-	13.1		7.6	3.2				
BA	8	3	-	13.1		7.4	3.7				
	9	4	-	13.2		6.8	3.8				
	10	5	-	13.2		7.0	4.1				
	11	6	-	13.2		7.6	4.0				
	12	-	-	13.4		7.0	4.0				
	13	7	-	13.5		7.7	3.6				
	14	8	-	13.6		6.8	4.0				
	15	14	-	14.0		7.4	3.6				
	16	9	-	14.0		8.6	4.4				
	17	-	-	14.0		8.6	4.0				
	18	10	-	14.0		6.8	4.0				
	19	11	-	14.2		7.9	3.5				
	20	12	-	14.6		7.6	3.7				
	21	13	-	14.6		8.4	3.7				
	22	-	高台付輪 型土器	12.4		8.9					
	23	-	环	17.4							
	24	-	皿	17.0							
	25	15	土師器	甕	16.0						
	26	16	-	-	19.2	15.3					
	27	17	-	-	20.0	18.7	ヨコナタ	ヨコナタ	ハケ目	ハケ目	
	28	18	-	-	21.2	17.0					
	29	19	-	-	21.4	21.8					
	30	20	-	-	22.2	21.1					
	31	-	-	-	21.6	7.0					
	32	22	-	-		7.4					
	33	23	上鉢器	甕		7.6					
	34	21	-	-	11.5	8.2					
	35	道意器	-			7.2					
	36	25	-	高台付輪 型土器	12.7	7.0					
	37	-	-	長脚甕	10.8					ハラナタ	タタキ・ハラナタ
	38	24	-	長脚甕							
BF 53 住 W 跡	1	道意器	环	12.8							
	2	-	环	14.4							
	3	土師器	甕	14.5						ハケ目	ハケ目
	4	道意器	-	22.0							
遺 構 外	1	道意器	环			8.4					
	2	-	-			6.0					
	3	上鉢器	甕	26.0							タタキ
B I 島上尾	4	26	道意器	基し器		19.4					

I類 小形甕

- A 1類 成形にロクロを使用せず、口縁部が体部の延長として終わり、内弯するもの。
- A 2類 卷き上げ成形で口縁部が極めて短く、わずかに「く」の字状に外反、内外面ともヘラケズリ調整の施されるもの。
- B類 成形にロクロを使用し、内外面とも再調整はなく、口縁部が「く」の字状に強く外反し、また口唇部が上方に強く挽き出されるもの。

II類 長胴甕

- A 1類 成形にロクロを用いず、口縁部が極端に長く「く」の字状に外反し、頭部に段を有するもの。
- A 2類 成形にロクロを使用せず、頭部が比較的短く「く」の字状に外反、口唇部は平面的か、または丸くおさまるもの、調整はハケ目・ヘラケズリ・ナデなど行なわれるもの、木葉底もこれに含む。
- B類 ロクロ成形で、口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が強く上方に挽き出される。またナデ・ヘラケズリなどの調整のみられるもの。

・須恵器

坏

底部切り離し技法から

- I類 ロクロからの切り離しが回転ヘラ切りによるもの。
- II類 ロクロからの切り離しが回転糸切りによるもの。
- III類 ロクロからの切り離しがその後の調整のため不明のもの。

再調整技法から

- A類 底部に手持ちヘラケズリの再調整をうけるもの。
- B類 底部に回転ヘラケズリの再調整をうけるもの。
- C類 底部切り離し後再調整のほどこされないもの。

以上の類別基準にしたがって分類したのが第2表である。

土師器の坏は復元可能のもの1点でB2類に属するのである。破片も含めた観察ではB3類が1点出土している。他は口縁部と体部の破片である。いずれも黒色処理され、ミガキを伴うもので、これらはロクロ使用土師器の第I段階から第II段階にまたがるもので9世紀初頭から10世紀にかけての所産と考えられる。⁽³⁾

須恵器の坏はII Cが全体の36.8%で最も高率であり、次いでI Cが31.6%でこれにつづく。底部切り離しにヘラ切りと糸切りの両者がほぼ同率と考えられ、さらにIA類のように手持ちヘラケズリの再調整のものが1点出土している。このことは土師器の坏同様にヘラ切りと糸切りが共存し、特にヘラ切り後回転ヘラケズリ調整のものが21.1%を占めることはロクロ使用に

第1表 BA 50住居跡出土土器破片数（古館駅前）

器種 破片数	土師器		須恵器					土師質土器
	环	變	环	變	長頸瓶	高台付	蓋	环
口縁部	5	35	33	6				6
体部	5	230	6	36				0
底部	1	8	6	0				3
	(2)		(10)	(3)	(1)	(1)	(1)	

※()内数字は実測個体数

よるヘラ切りから糸切りへの転換期、いわゆる移行期に該当するものと考えられ、土師器の环同様にやはり第1段階から第2段階にまたがる時期と理解したい。

一方、环類に少數の土師質土器の共伴事実がある。桑原滋郎氏は宮城県の例でロクロ土師器の変遷を大別して三段階に分けている。これによれば第3段階に相当し年代的には9世紀以降となる。これを岩手県内の例でみると、伊藤博幸氏は「10世紀代後半の瀬谷子窯衰退期を一つの契機としている……」^(注4)と見解を述べ、さらにロクロ使用土器の第3段階（11世紀代）^(注5)に位置づける説もある。环類に限定してみた限りでは、本遺跡はロクロ使用土器の転換期から土師質土器に至るまでの間となり、およそ9世紀初頭から10世紀あたりに位置づけられるものと考える。

次に土師器變類をみると小形變と長胴變に大別され、これらはロクロ使用と、巻き上げ後体部上半から口縁部にかけてロクロを用いたもの及びロクロの使用の全くないものに三分類される。小形變では、底部切り離しに回転糸切り無調整のものと、回転ヘラ切りのものの二形態があり、長胴變では肩部有段のもの、また体部外面に叩き目のあるもの、さらには叩きしめとあて板痕を有するものや底部に木葉の圧痕を残すものなどがあり、バラエティーに富むと同時に時間的な巾を示唆するものである。前述した肩部有段の變は既に8世紀代から出現し、本遺跡では古式の土師器となる。また、叩きしめ工具による土師器變の破片の出土をみ、これは猫谷地CE12住居跡において巻き上げ後工具で叩きしめを行なったものが出ている。^(注6)

土器の諸様相と住居跡構造から総合的に本遺跡をみると、ロクロ未使用の土師器環の伴出がなく、この点上限をロクロ使用土器への移行期とみ9世紀初頭とおさえ、住居構造等から過去遺跡群にその類例を求めて10世紀頃までと理解したい。

注1. 岩手県教育委員会 北上市教育委員会 「相去遺跡」現地説明会資料 1973

- 注2. •埼玉県教育委員会 「坂東山遺跡」1973
•岩手県教育委員会 発掘調査略報「高柳遺跡」1977
•岩手県埋蔵文化財センター 都南村「湯沢遺跡」1977
•岩手県教育委員会 北上市「藤沢Ⅰc、藤沢Ⅰd遺跡」1977
•岩手県教育委員会 滝沢村「高柳遺跡」1977
•岩手県教育委員会 滝沢村「大綏遺跡」1977
•岩手県教育委員会 滝沢村「高屋敷Ⅱ遺跡」1977
- 注3. 「岩手県のロクロ使用土師器について」高橋信雄 考古風土記 第2号 1977
- 注4. 「ロクロ土師器环について」桑原滋郎 東北史学会 1969
- 注5. 「岩手県の古代土器生産について」伊藤博幸 岩手史学研究 1976
- 注6. 「岩手県のロクロ使用土師器について」高橋信雄 考古風土記 第2号 1977
- 注7. 「東北北部の歴史時代の土器」沼山源喜治

参考文献

- 岩手県史 1961
北上市史 1968

ふる だて ばし 古 館 橋 遺 跡

遺 跡 記 号：FDB

所 在 地：紫波郡紫波町中島字落合44-2 他

調 査 期 間：昭和48年 9月18日～12月8日

調査対象面積：4200m²

平面実測基準点：東京起点 480.060km (BA50)

基 準 高：海拔 107.80m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P14）

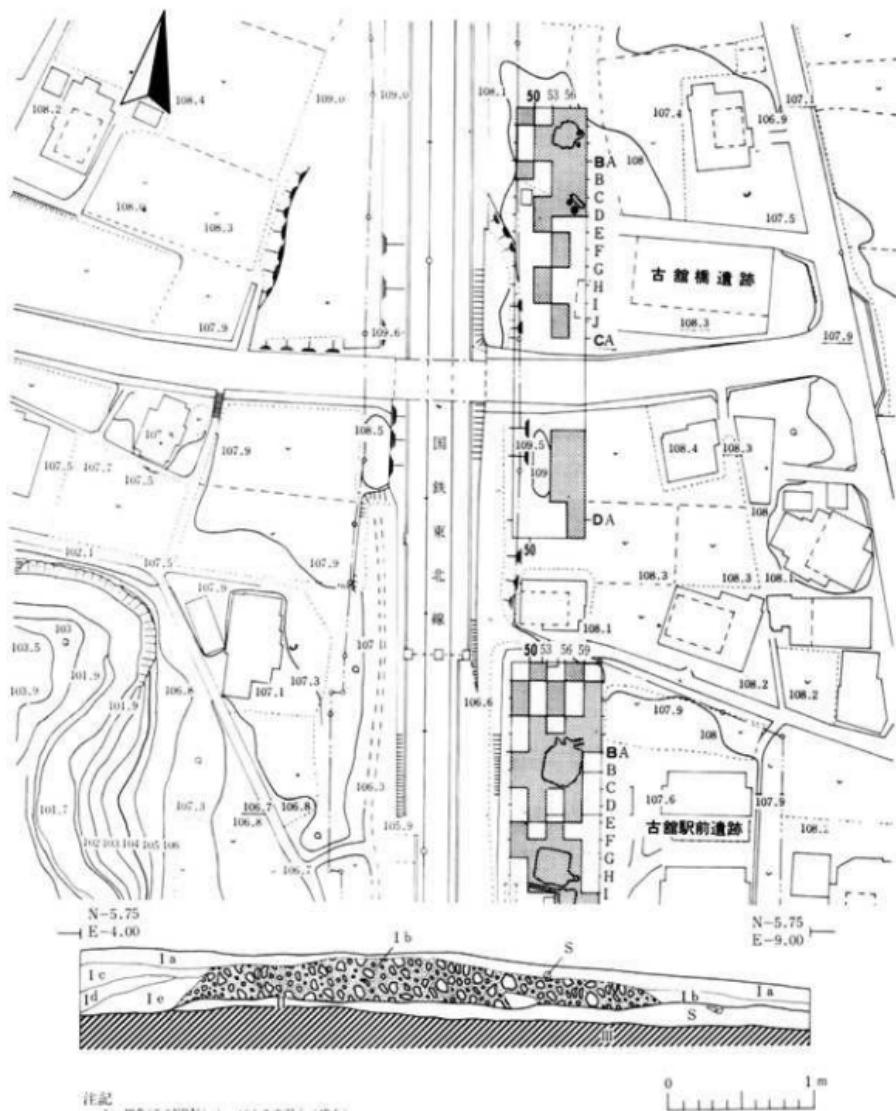
古館橋遺跡は紫波郡紫波町字中島に所在し、国鉄東北本線古館駅の北方約170mに位置する。南の古館駅前遺跡と隔たることわずかに15mである。これら両遺跡は東北本線に沿って南北に長く伸びている。

本遺跡の北方約220m付近を五内川が東流し東北本線の真下で流路を南東に転じ遺跡の東方を迂回して北上川に合流する。遺跡は砂礫段丘のうちの中位段丘東端に位置し、微地形では微高地状を呈する標高108.6mにのるものである。五内川との比高差は5mで全体に東に向う緩斜面の高位部分に占地する。西方15mには東北本線が走り本線部分は掘削され凹地状を呈している。更に本線の西は若干の高まりをみせるが西端は約1mの段差をもって低地に連なる。

周辺の土地利用は、東に隣接して古館農業倉庫が建ち北側には民家が建っている。東西方向には幅員7mの道路が通じている。遺跡内は畠地として利用され耕作土は東北本線施設の際の盛土で旧表土はこの盛土の下に埋没していることになる。

2. 調査の経過と方法（第1図）

本遺跡は、東北新幹線の中心杭を基準とし、東京起点480.040kmから480.060kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸として設定した。また480.060kmを本遺跡の基準点としBA50と呼称した。基準点間の方向角はN-90°05'14"-Wである。調査はBA50の基準点をもとに3×3mのグリッド方式で行なった。本遺跡も古館駅前遺跡同様に東北本線工事の際の削平・搅乱を余儀なくされ且つほぼ全面にわたって盛土がなされている。盛土は5層から構成され現地表面下20~45cmで旧表土に達するものである。遺構は旧地表面下の橙色ローム面で検出されている。本遺跡内で検出された遺構は竪穴住居跡1棟、U字型土括3基、ビーカー型ピット2基、溝状遺構1条を検出した。このうち竪穴住居跡以外の遺構に関しては遺物の出土はなかった。出土遺物は、土師器・須恵器・土師質土器で器種は壺・甕・長頸瓶等となっている。



注記

- Ia 楢色(7.5YR 4/1) 土。パシスの混入（盛土）
- Ib 黄褐色(7.5YR 5/1) 土。径2~7mmの大砂利混入（盛土）
- Ic 楢色(7.5YR 4/1) 土。小石を含む（盛土）
- Id 黑褐色(7.5YR 3/1) 土。旧表土とIcの混合土（盛土）
- Ie 黃褐色(7.5YR 5/1) 土。小石を含ます。粘性がある（盛土）
- II 灰褐色(7.5YR 4/1) 土。旧表土。土の粒子が細かい
- III 橙色(7.5YR 4/1) 火山灰土。粘性大。微粒子（堆山）

第1図 グリッド配置図および遺跡の基本層位図

3. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位（第1図）

本遺跡は東北本線工事の際盛土が行なわれ、また倉庫等の建造物により一部攪乱を余儀なくされていた。現状は畠地として利用されているが、この耕作土は盛土を活用したもので旧表土はこの下に埋没している。BA50から北5.75m、東4m～9mの東西土層断面をみると、層群はⅢ群に分層される。Ⅰ群は旧表土に盛土された人為的な堆積土層である。Ⅰ層群は5層に分層され、Ⅰa層は現表土で耕作土である。色調は褐色を呈しバミス質である。Ⅰb層は黄褐色を呈し、径2～7cm大的礫を混入した盛土層であり本層群の中で最も層厚の厚いものである。Ⅰc層は褐色で小礫を多数混入するがⅠb層に比べ粒子は小さくわずかに粘性をもつ。Ⅰd層は旧表土と盛土の混合土であり黒褐色を呈する。Ⅰe層は褐色土をベースとし黄褐色土が混入し若干の粘性をもっている。Ⅱ層は盛土前の旧表土層と考えられ暗褐色の色調を呈している。粘性がわりあいあり粒子が細かく土質は一般に柔らかい。Ⅲ層は橙色の火山灰（ローム層）土で粒子が細かく粘性は強い。

本遺跡は以上の土層より構成されるが、遺構検出面はこのうち第Ⅲ層の橙色ローム面となる。

〔2〕 発見された遺構と遺物

〔1〕 積穴住居跡

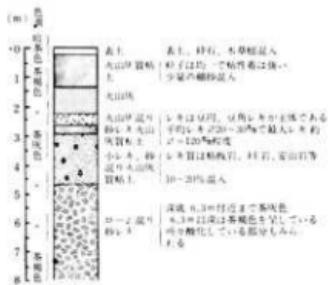
AII53住居跡（第3図、図版1）

本遺跡内で発見された唯一の住居跡で、BA50から北に3m、東に3mの地点で検出されたものである。

〔検出面〕 第Ⅲ層の上面、橙色ローム面で検出された。検出地点は東に緩斜する面である。

〔平面形〕 南北約4.2m、東西約4mを測る隅丸方形プランを呈している。住居跡は北壁部分の破壊が著しく両コーナーとも原型をとどめない。また西壁部分は削平により壁の確認ができなかった。

〔埋土〕 住居跡内の埋土は3層に分層される。基本層は床面直上から10cm内外で堆積した黃色土で、この上に黒色土の層が形成され、さらに上面に部分的にレンズ状に焼土層がのるもの



第2図 基本土層柱状図

である。したがって大略は単層としてとらえられる。

〔壁・床面〕 壁高は10~25cmを計測し、西壁は擾乱と削平により遺存度は極めて悪い。壁面の傾斜角はややゆるやかである。

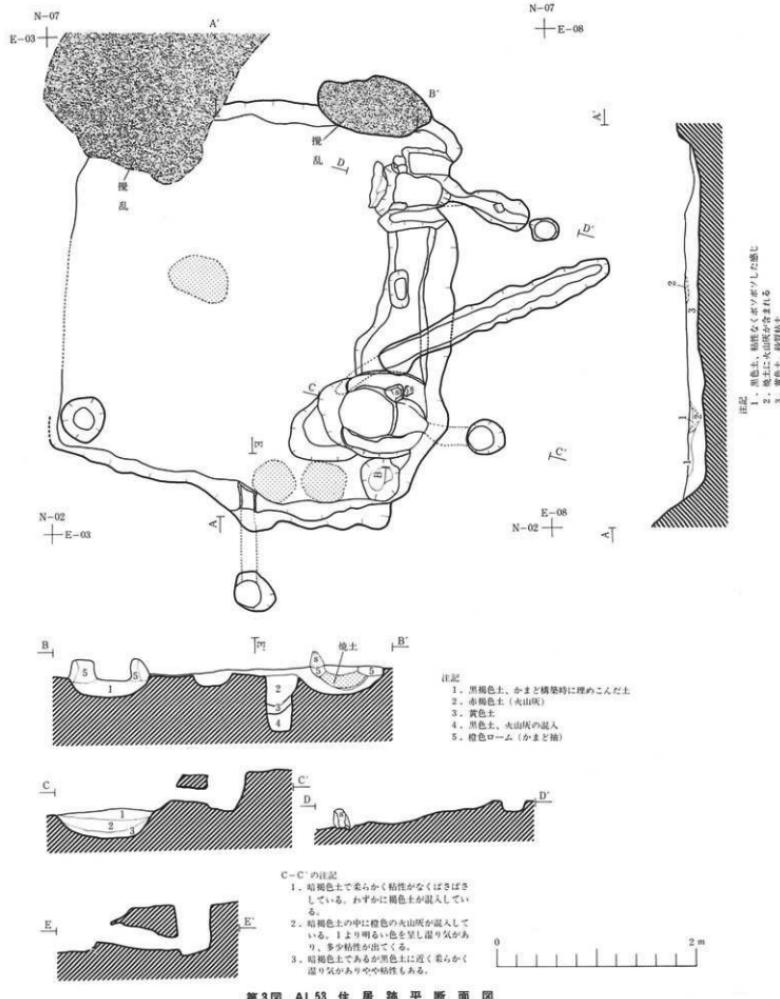
床面は全般に凹凸が少なく硬くしまっている。貼床の痕跡は確認されず床面直上に多数の炭化材の散布を見る。

〔周溝〕 東壁の壁直下に周溝を検出した。この周溝は1号かまと2号かまととの間に走るものでその他には認められない。規模は上端幅約40cm内外で深さは床面から3~4cmである。したがって幅広の極めて浅い周溝である。

〔かまと〕 本住居跡内で3基の検出をみた。東壁北寄りを1号かまと、南寄りを2号かまと、南壁のものを3号かまとと便宜上呼ぶことにする。1号かまとは東壁の北寄りではほぼコーナー近くに付設されたものである。本かまとは燃焼部・煙道・煙出部を遺存しているが上部構造は削平され原型をとどめない。火焼部は地山面を20cmの深さで掘り込み、この上に地山面と水平に黒褐色土を埋めこむ。左右の袖は基部をわずかに残存しており、袖には芯として石を使用するものである。焚口部の手前には長径45cm大の川原石を補強材として用いている。煙道は壁際から75cmの長さで屋外に伸び、かつ煙出し部の平面形は円形を呈している。煙道は壁に対し約20°南に傾いている。2号かまとは同じく東壁に付設されるが、南寄りで火焼部・煙道・煙出部を夫々遺存する。燃焼部は床面を約30cmほど掘り込み、1号かまとと同様に粘土を床面まで埋め込んでいる。この面は加熱により焼土化している。なお左袖の中央辺に川原石を補強材として用いている。燃焼部の埋土は3層に分層され、1層は暗褐色を呈しわずかに褐色土を混入する。2層は暗褐色の中に橙色の火山灰を混入する。3層は暗褐色土である。煙道はやや下降気味で壁から約70cm屋外に伸びる。煙道の方位は壁に対してほぼ垂直方向である。煙出しビットは一段掘り込まれ上方へ垂直に立ち上がる。なお煙道はくり抜きとなっていた。3号かまとは燃焼部ではなく煙道と煙出部のみが残存する。煙道は壁端より90cm外方に伸びくり抜きとなっている。また傾斜は下り勾配で約10°を測り、煙出部は前者に類似する。煙道内の埋土は黒褐色土で粒子に多少粗さが目立つ。

〔ビット〕 住居跡内に2個検出されたが柱穴と断定するに至らなかった。

〔遺物出土状況〕 埋土内から土師器・須恵器・土師質土器が出土し、器種は壺・小形甕・長胴甕・広口壺・長頸瓶等である。



第3図 AI 53 住居跡 平断面図

[出土遺物](第4図、図版2・3)

〈土師器〉

坏1 (第4図1) 底部と体部の一部を残存する内黒坏である。成形にロクロを用い底部切り離しは再調整のため不明である。底部から体部の立ち上がりは内寄傾向を示しゆるく外傾する。調整は底部内面が放射状のヘラミガキが、体部上半は上下方向のミガキで丹念に仕上げている。底部外面は回転ヘラケズリの再調整がわずかに認められるが、磨滅及び擦痕等で明瞭さを欠く。また体部への調整は及ぼされていない。色調は橙を基調とし、やや褐色を呈す。胎土は均質である。

坏2 (第4図2) 全器形の $\frac{1}{4}$ を残存、ロクロ成形による内黒坏である。底部は回転糸切り非再調整、体部は丸味をもって内寄しながら外傾し口縁部で外反する。法量は口径13.8cm、底径5.8cm、器高4.3cmを計測する。調整は底部内面でやや幅の広い放射状ヘラミガキが、体部は横方向のヘラミガキが夫々施されている。外面の調整は一切認められない。胎土は精良で焼成も硬質である。内面に一部加熱を受け再酸化がみられるが、全体に茶褐色を呈している。

坏3 (第4図3) 底部の約 $\frac{1}{2}$ を欠損また体部若干を残存する内黒の坏である。底部切り離しは回転糸切り後回転ヘラケズリ調整を行なっている。体部はややふくらみ内寄しながら立ち上がる。内面の再調整は底部で放射状ヘラミガキ、体部下半は横、または斜方向のヘラミガキが錯綜する。胎土は均質で焼成も硬質、色調は茶褐色を呈している。

坏4 (第4図6) 口縁部をわずかに残存するロクロ成形の小破片である。内外面とも黒色処理が施されている。体部は内寄しながら外傾し口縁部でわずかに外反する。黒色処理は極めて丹念であり再調整も内外面にわたり行なわれる。内面は口縁部で縱方向、体部上半は横方向、下半は斜方向となっている。外面は口縁部で横方向、体部中央で斜方向から縱方向に変る入念なミガキが特徴的である。

甕1 (第4図14) ロクロ成形による小形甕の口縁部破片である。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端は上方に挽き出され縁帯が一周する。器厚は薄く胎土中に小砂粒を多量に含むが焼成は良好である。二次加焼を受け赤変及び剥落が認められる。一方口縁部から体部にかけてカーボンが付着する。

甕2 (第4図15、図版2の10) 卷き上げ成形でロクロは使用されない。法量は口径17.4cmを測る。体部は内寄しながら外傾し、肩部付近でほぼ垂直に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は極端に短かく、「く」の字状にわずかに外反する。胎土は粗雑で、砂粒・小礫を多量に含み器肌はざらざらしている。調整は内外面とも上下方向にヘラケズリが施され、口縁部は手づくねと考えられる。色調は茶褐色を呈している。

甕3 (第4図16、図版2の9)大型の長胴甕で口縁部を残す破片である。口径20.0cmを計測する。ロクロ成形で胎土は均質である。胴部はややふくらみをもち口縁部で「く」の字状に外反する。口唇部は内傾し上方に挽き出され、縁帶は隣で区画され幅1cm弱で一周する。調整は体部外面にヘラケズリが部分的に施される。色調は黄橙色を呈し、焼成も良好である。

甕4 (第5図18、図版3の11)長胴甕の口縁部から胴部上半の破片を図上復元したものである。推定口径20.2cmを測る。成形は巻き上げにより胴部は丸くふくらみ、口縁部はゆるやかに「く」の字状に外反し、口唇部は丸くおさまる。調整は口縁部外面は横方向のヘラナデ、胴部は縦また斜方向のハケ目調整が施されている。内面にも同様の調整がみられる。

甕5 (第5図19) 底部の約3/5と胴部若干を残す巻き上げ成形による破片である。底部は平底で胴部はほぼ直線的に外傾する。外面の調整は底部付近で強い調子のヘラケズリが縦及び斜方向に施される。内面は胴部下半で縦方向のヘラナデ、底部は不定方向に同様の調整が認められる。胎土はやや均質で焼成は堅緻である。

甕6 (第5図20) 底部を残す巻き上げ成形による破片である。底部から胴部の立ち上がりが内弯しながら外傾する。底部は平底の木葉底である。葉脈の圧痕から3~4枚の広葉樹の葉を用いたものと思われる。胴部の再調整は幅広のヘラケズリを斜方向に行ない内面も同様である。底部はヘラナデと指ナデによる調整が同える。胎土は粗く焼成は堅緻である。色調は赤褐色であるが赤味がやや強い。

甕7 (第5図22、図版3の14)かまと内出土の口縁部をわずかに欠損するほぼ完形の小形甕である。法量は口径14.4cm、底径10.0cm、器高14.0cmを計測した。成形は巻き上げにより胴部中央に最大径をもつ。口縁部は内弯氣味で口唇部は丸くおさまる。調整は口縁部付近はヨコナデ、内面は横方向のヘラナデが行なわれている。胴部外面は縦方向の幅広のヘラケズリを主体に横方向もわずかにみられる。内面は底部付近までヨコナデ、底部は不定方向のヘラナデを用いている。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質であるが巻き上げの継ぎ目からの剥離が著しい。色調は黄白色で口縁部付近には二次加熱による赤変が認められる。

〈須恵器〉

壺1 (第4図7、図版2) 全器形の約3/4を欠損、体部はわずかにふくらみをもって内弯しながら外傾し口縁部で外反する。器壁の立ち上がりはきつく、また底径は小さい。成形技法はロクロにより、底部切り離しは回転糸切りで調整は認められない。焼成はやや良好で白黄色を呈する。また内外面の調整は認められない。

壺2 (第4図8、図版2) 器形・成形・胎土等は壺1に全く類似するが、色調は赤褐色を呈している。これは第一次焼成の際の色調とは考えにくく、かまと付近出土からおそらく二次

的加熱で赤変したものと思われる。

坏3 (第4図9) 坏1に類似する器形を呈するが色調が黄橙色を呈するものである。底部は回転糸切り、内面のロクロ痕が明瞭に残されている。

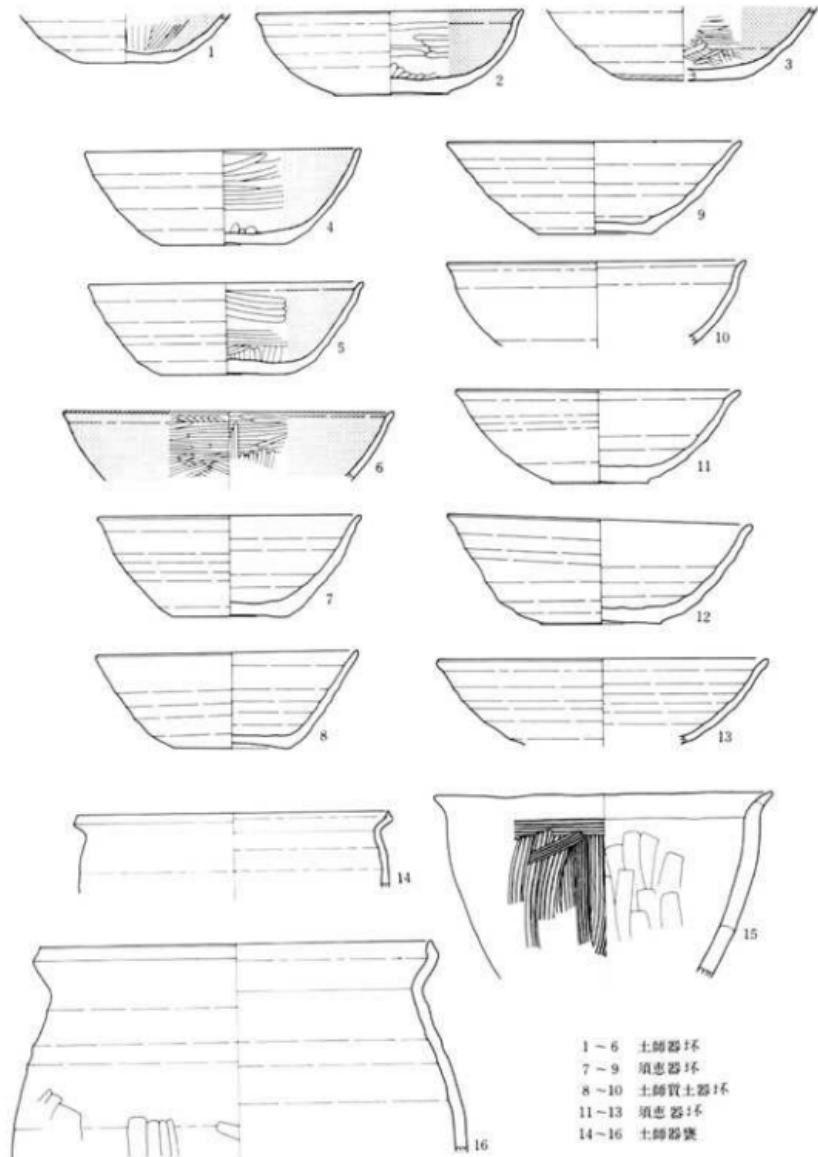
坏4 (第4図11、図版2) 約3分を残存する復元土器である。法量は口径14.6cm、底径5.0cm、器高4.7cmを測る。体部は丸味をもって外傾し口縁部は「く」の字状に外反する。底部は回転糸切りで調整はなく、また底部径が口径に比べ著しく小さいのが特色である。内面にロクロ回転による渦状の隆起文が残る。胎土は精選され、焼成も極めて硬質であるが色調は黄褐色を基調に一部赤褐色の部分もみられる。なお内外面とも再調整は施されていない。

坏5 (第4図12、図版2) 約3分強を残存する坏で器形・成形・焼成・色調・胎土のいずれもが極めて類似するものである。ただ内外面のロクロ回転による凹凸が顕著である。

坏6 (第4図13) 口縁部をわずかに残存する破片で、坏5に近似するものである。内面にカーボンの付着が認められる。

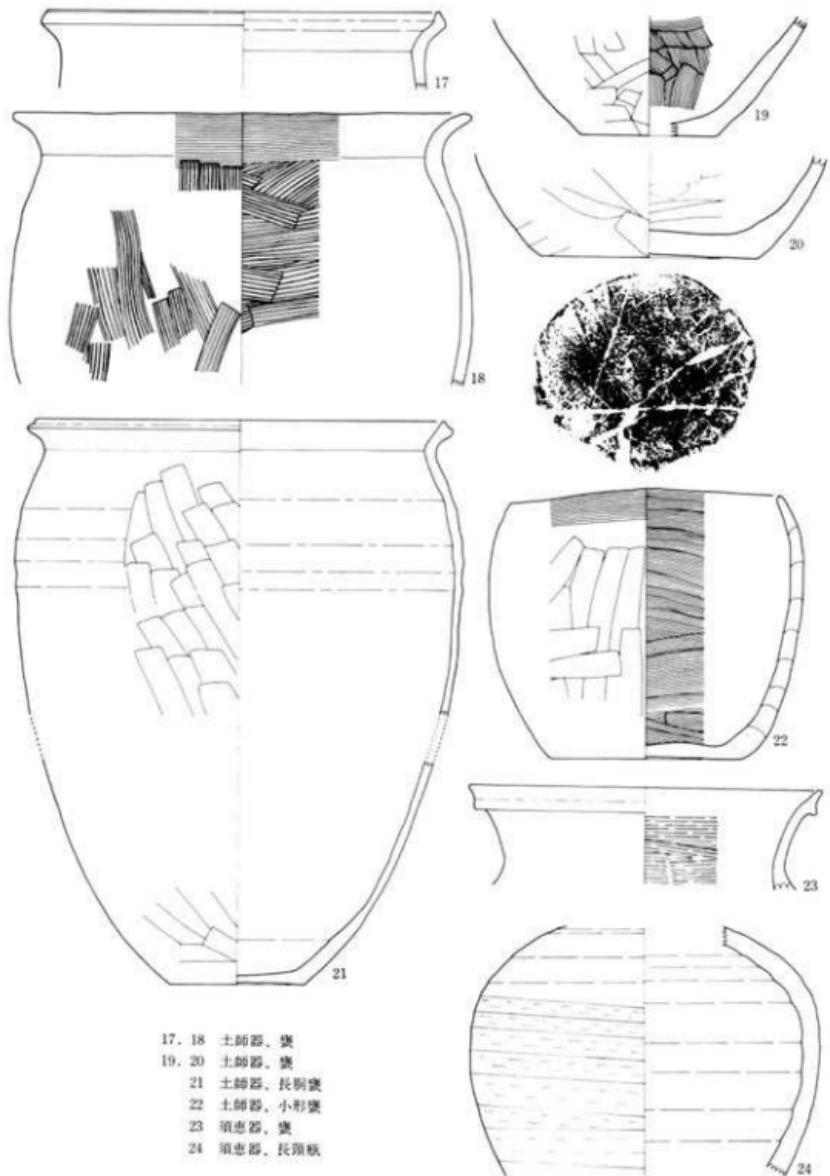
甕1 (第5図23) 広口甕の口縁部破片である。肩部からゆるやかに外寄しながら外傾しラッパ状に立ち上がる。口唇部は上下方向に強く挽き出され、縁帶の断面が外方で「く」の字状の屈曲をみせる。調整は内面のみでカキ目調整が全面に施されている。色調は青灰色を呈している。

長頸瓶1 (第5図24、図版3) 頸部と底部を欠損する。胴部は球形状を呈するもので最大径を肩部に求める。成形はロクロにより内外面とも調整は認められない。胎土は均質で、焼成も硬質である。色調は内外とも青灰色を呈し、胴部から底部にかけて自然釉がかかる。



第4図 A153住居跡出土土器実測図





第5図 A153住居跡出土土器実測図

〈土師質土器〉

环1（第4図10）口縁部の約 $\frac{1}{4}$ を残存する破片である。成形はロクロにより体部は丸くふくらみ外傾し、口縁部は外反する。胎土は脆弱であり、焼成は軟質である。また色調は褐色で胎土中に粒子の細い砂粒を含んでいる。

AI56土壤（第7図）

当土壤はAI53住居跡の東壁で検出され、北東から南西方向に伸びるU字型土壤である。AI53住居跡は本土壤と切り合関係にあり、そのため南西部部分の約 $\frac{1}{2}$ は住居跡により切られていた。長軸は約2.5m、短軸は約30cmを測る。長軸の下端は約3.1mで南西部分は長くえぐり込まれている。埋土は2層に分層され、1層は黒褐色の腐植土で2層は砂質粘土の黄色土である。また住居跡内に入り込んだ土壤の上部を床面と同じ砂質粘土で貼っていることから、住居跡以前に構築された土壤と考えられる。一方、埋土内から遺物の出土はなかった。

AJ53土壤（第7図）

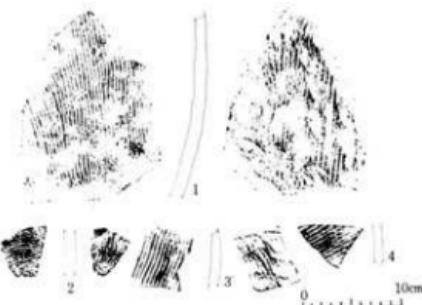
AI53住居跡の南1mを隔てて、南東より北西の方向に長軸2.5m、短軸0.5mの土壤を検出した。検出面は地山ローム面である。埋土は自然堆積で4層に分層される。1層は暗褐色土、2層は火山灰のブロック、3層は明褐色土、4層は地山ローム層の崩壊土とみられる。なお本土壤においても出土遺物はなかった。

BB56土壤（第7図）

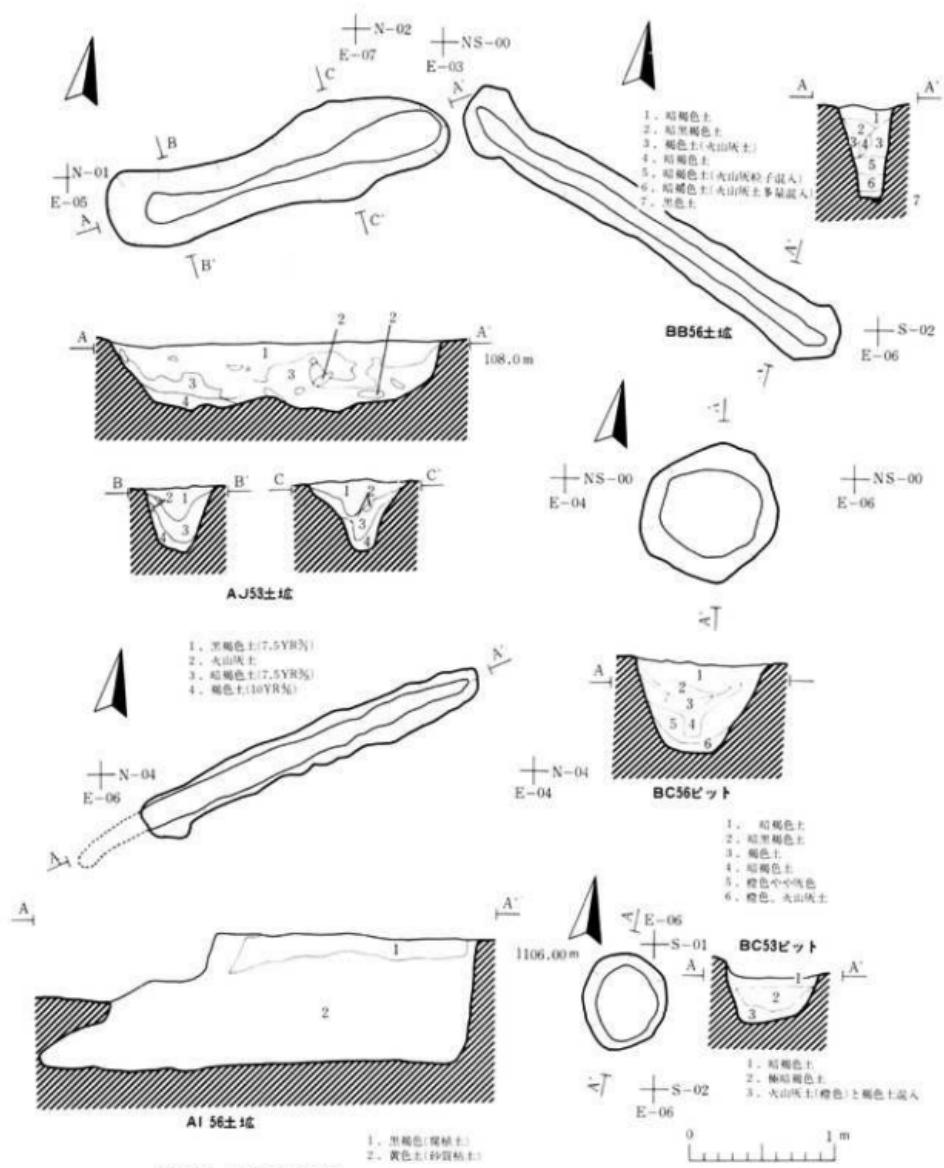
本土壤はAI53住居跡の南約8m付近に位置し、遺構検出面は第Ⅲ層の橙色ローム面である。構造は長軸3m、短軸0.4m、深さ0.7m弱を計測するものである。断面形はU字状を呈しているが、上面の形状が両端にふくらみをもたせた特異なものである。また壁の立ち上がりは急峻である。埋土は7層に分層されるが2～4層は人為的か自然堆積かは判然としない。5～7層は自然堆積層で埋土は暗褐色土・橙色火山灰土・暗褐色土で火山灰土の混入土、黒色土である。一方、埋土内から遺物の出土はなかった。

BC53ピット（第7図）

BB56土壤の北西端の南側で小形ピットを検出した。上端径は約60cm、下端径50cm、深さ30



第6図 AI53住居跡出土須恵器片拓影図



第7図 土壌平断面図

cmを測るものである。検出面は地山ローム面で断面形はビーカー型の形状を呈する。埋土は3層に分層され自然堆積と考えられる。1層は暗褐色土、2層は極暗褐色土、3層は橙色の火山灰土でわずかに褐色土を混入している。埋土内からの遺物の出土はなく、時期・性格等は不明である。

BC56ピット（第7図）

本ピットはBC53ピットの南東約1.5mの地点で検出されたものである。上端径は約1mで、下端径は60cm、深さは約60cmのやや大形のビーカー形ピットである。壁の傾斜角はやや緩い。埋土は6層に分層されるが、埋土内からの遺物の出土はなかった。なお本ピットも性格・時期については不明である。

4. 考察

〔1〕発見遺構について

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡1棟、U字型土壙3基、ビーカー型土壙2基である。

住居跡はほぼ方形プランで、東壁直下に一部周溝を付設し、東壁に2基、南壁に1基の計3基のかまどを付設している。これらは煙道をくり抜きとし、いずれも屋外に伸ばしたものである。この3基のかまど位置をみると、いずれも壁中央から片寄りをみせている。これは相去遺跡群の例にみられるものである。ただ主柱穴の検出ができなかったことから即断はできない。^(注1)また3基のかまどの先後関係は判然としないが、3号かまどは壁付近に袖及び焚口部を消失している。これはこのかまどを廃棄し床面から袖、その他を除去したものと考えられ、おそらく1～2号かまどに先行するものではなかろうか。1号と2号においては、残存状況がほぼ同程度のため、いずれが先行するか一概には云えない。

U字型土壙は3基発見されたが、このうちAJ56土壙は、AI53住居跡東壁と切り合い関係にある。土壙断面の観察ではAJ56土壙の第2層を掘り込んでAI53住居が構築され、またAJ56土壙の南西端は壙底部でAI53住居跡の床面下に約0.5mほど潜り込んでいる。以上からみて、AJ56土壙が埋没した後にAJ53住居跡が構築されたものと考えられる。また本土壙からの伴出遺物はない。AJ53土壙は上端幅のやや広いものであり、BC56土壙は両端がやや丸味を帯び、前記のものと若干様相を異にする。埋土の堆積からほぼ自然堆積と考えられる。これら3基の土壙はいずれも遺物の出土がなく、性格・時期等については不明である。

BC56ピット・BC53ピットは小形ピットで遺物の出土はなかった。以上の土壙群をみると、

いずれも黄褐色ローム面からの掘り込みで、時期的には大きな開きがないものと思われる。このような土壌は近年岩手県内でも多くの検出例をみ、特に湯沢遺跡^(注2)、北上市藤沢遺跡^(注3)、岩手郡淹沢村高柳遺跡^(注4)、同じく大綏遺跡^(注5)、高屋敷II遺跡^(注6)、県外では埼玉県坂東山遺跡などがあげられる。

現在までのところ、本土壌の性格と時期については、動物捕獲を目的とした陥し穴説が有力となっており、構築時期を縄文期とおきえるのが通説となっている。

本遺跡の場合も埋土下層からの伴出遺物に欠け、築営時期及び機能については判然としないが、AJ56土壌を住居跡が切っていることから、少なくともそれ以前の構築物であることは疑いのないところである。以上から本遺跡における構築は、縄文時代と平安時代に営まれたものであると云える。

〔2〕出土遺物について

本遺跡出土の遺物は全て土器類で、土師器・須恵器・土師質土器である。器種別では壺・小形甕・長胴甕・長頸瓶・広口甕・蓋などとなる。数量的にそれほど多い出土点数とは云えないが、一応器種毎に分類を試みたのが第1表である。なお、類別基準は古館駅前遺跡に準じた。これによるとAI53住居跡の壺類では、須恵器と土師器は同数となっている。底部切り離しはいずれも回転糸切りを採用していること、また、底部への二次調整のあるものが全体の30%で、この中に回転ヘラケズリが1点含まれている。

本遺跡は前述したとおり個体数量が少ないとから、破片数の一覧を加味して更に検討を加えたい。第2表はAI53住居跡出土の土器破片一覧表である。これによると土師器壺では内外黒のものが共伴している。内外黒色処理された壺には回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整をほどこされたものも含まれている。一方、須恵器壺と土師器壺の破片比率は須恵器43.3%、土師器25%となり、須恵器壺が土師器壺を上まわる数値をみせている。須恵器の壺は土師器壺同様に、底部切り離しが回転糸切りのものが圧倒的であるが、その中に個体で1点、破片で1点の回転ヘラケズリ調整をうけたものが含まれている。

次に甕類は土師器・須恵器とも出土しているが、土師器は数的に多く、類別基準では須恵器は割愛するものとした。土師器甕は小形甕と長胴甕に分けられる。小形甕の中で第4図15、第5図22はいずれもロクロ未使用の小形甕で、胎土・焼成など良好とは云えず、また調整も粗いヘラケズリが全体全面に施され、時期的に上るものと思われる。なお木葉痕を残す底部破片が1点出土している。ロクロ使用のものは、口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部が挽き出される一般的傾向をみせている。第2表の破片一覧表をみると、土師器と須恵器の甕破片では前者が79.4%、後者が20.6%と、土師器が須恵器を大幅に上回る結果をみせている。

次に、須恵器の甕は完形品ではなく、いずれも破片のみにとどまるが、それらをもとに観察す

第1表

表面 形状 番号	種 別	形 式	法 規 制定 額	測 量				整 理				記 述
				内 径 (mm)	外 (mm)	上 部 内 径 (mm)	下 部 外 (mm)	内 部 深 度 (mm)	外 部 深 度 (mm)	内 部 容 積 (mm ³)	外 部 容 積 (mm ³)	
1	上端部	規	56	50	50							B ₁ (不明) 貨物外側にカーボンの付着
2	1	*	138	58	43							B ₂ (明記未切り) カラビ地板有り
3	*	*		60								B ₃ (明記未切り) の塊、専用ハタケスリ
4	2	*	142	64	49							B ₄ (明記未切り)
5	3	*	142	66	47							B ₅ (明記未切り)
6	*	*	17.0			ヘラミガキ	ヘラミガキ					B ₆ (不明) 内外観
7	4	粗毛面	*	126	60	52						B ₇ (明記未切り)
8	5	*	135	60	51							B ₈ (明記未切り) 面にカーボン有り
9	6	*	152	58	48							B ₉ (明記未切り)
10	100% 上部	*	15.4									B ₁₀ (不明)
11	7	粗毛面	*	16.6	50	47						B ₁₁ (明記未切り) 貨物表面と床面の隙間にカーボン有り
12	8	*	15.6	62	54							B ₁₂ (明記未切り)
13	*	*	17.0									B ₁₃ (不明) 体部内面にカーボン
14	上端部	規	16.0									B ₁₄ (明記未切り) 内外観にカーボン
15	10	*	*	17.4	16.1							B ₁₅ (明記未切り)
16	9	*	20.0	23.5		4.07±0.17 ^a	4.07±0.17 ^b	~298.0±2.2	~298.0±2.2			B ₁₆ (本體) 巻き上げ
17	*	*	20.2									B ₁₇
18	11	*	23.6	23.9		ヘタナデ	ヘタナデ	ハタニ	ハタニ			B ₁₈ (本體) 巻き上げ
19	*	*		7.0								B ₁₉ (本體) 巻き上げ
20	*	*		11.2								B ₂₀ (本體) 巻き上げ
21	12	*	21.0	23.2	7.0	26.0						B ₂₁ (全面) 粗面状のカーボン接着
22	14	*	14.4	16.2	10.0	14.0	ヘタナデ	ヨコナデ	ヘタナデ	ヘタナデ		I.A 巻き上げの完形品(その他)
23	13	滑毛面	*					ヨキ	II			体部上半にカーボンの付着
24	13	*	長頭版	18.0								

ると、大形甕・広口甕・長頸瓶などとなる。いずれも焼成は良好で色調も青灰色を呈している。また第6図の破片の拓本は、体部外面は平行

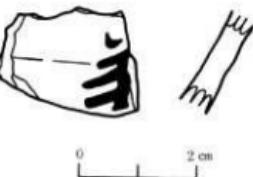
叩き目、あるいは平行叩き目の交錯したものや、内面にあて板痕をもつものがあり、古館駅前遺跡出土の青海波文は1点も出土していない。

特殊なものとして、第8図に土師質土器の環の小破片に墨書き記録のものがあるが、文字の大半が欠損のため読解できない。

第2表 AI53住居跡出土土器破片一覧（古館駅）

器種 破片数	土 師 器			須 惠 器			土師質土器
	环		甕	高台付	环	甕	長頸瓶
	内 黒	内外黒					
口 線 部	11	0	7		19	1	6
体 部	11	4	112		20	31	15
底 部	0	0	4		6	0	1
完形、復元個体数	5	1	9		4	1	1
							3

5.まとめ



第8図 塗書土器実測図

調査の結果を要約すると、およそ次のようになる。

1. 本遺跡は、古館駅前遺跡同様に擾乱・削平の著しい遺跡で、遺存状態は良好とは云えなかった。
2. 遺構検出では、住居跡1棟の他は数基の土壤のみに終った。
3. 住居跡の時期に関しては、構築方法・平面プラン・遺物の共伴関係から次のように云える。
 (1) 柱穴の確認はできなかったが、かまど位置などから西根遺跡、猫谷地遺跡より下るものであること。
 (2) 遺物では、土師器環を主体とするが、ロクロ使用、回転糸切り底、黒色処理、ミガキ調整などからロクロ使用土師器の第二段階に相当し、10世紀代を中心とするものであろう。ただ、前段階にみられるヘラ切り手法によるものが含まれることと、土師質土器が破片で共伴することから、これより若干上り9世紀中葉頃から10世紀にかけての時期と考えられる。
4. 本遺跡は、遺構・遺物において古館駅前遺跡に近似することから、両遺跡はほぼ同時期に営まれた可能性が強い。
5. 住居跡と土壤の時期差については、土壤は住居構築前の遺構と理解される。

- 注1. 岩手県教育委員会、北上市教育委員会 「相去遺跡群」発掘調査現地説明会資料 1974
- 注2. 岩手県埋蔵文化財センター 都南村「湯沢遺跡」 1977
- 注3. 岩手県教育委員会 北上市「藤沢Ic、藤沢Id遺跡」 1977
- 注4. 岩手県教育委員会 滝沢村「高柳遺跡」 1977
- 注5. 岩手県教育委員会 滝沢村「大緩遺跡」 1977
- 注6. 岩手県教育委員会 滝沢村「高屋敷II遺跡」 1977
- 注7. 埼玉県教育委員会 「坂東山遺跡」 1973
- 注8. 埼玉県教育委員会 「坂東山遺跡」 1973
- 注9. 金ヶ崎町教育委員会 「金ヶ崎町西根遺跡」 1959
- 注10. 岩手県教育委員会 「猫谷地遺跡」現地説明会資料 1974
- 注11. 「岩手県のロクロ使用土師器について」 高橋信雄 考古風土記 第2号 1977

参考文献

- 岩手県史 1961
- 北上市史 1968
- 水沢市史 1974
- 福島県「母畠地区遺跡発掘調査報告(Ⅱ)」 1978

紫波地区北部～盛岡地区南部の概観

1. 各遺跡の位置

東北新幹線は、紫波町日詰付近から盛岡市仙北町までの区間内では、東北本線の東側に沿って南北に走っている。そのうち、紫波町を除いた矢巾町南部から盛岡市南部に至る区間内には、合計9ヶ所の遺跡が知られている。その内わけを見ると、南から順に、矢巾町では白沢、又兵衛新田、下赤林Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・高畑^{たかはた}の6ヶ所、都南村では下永井・津志田の2ヶ所、そして盛岡市では南北1ヶ所の各遺跡が、それぞれ並んでいる。

2. 遺跡の立地

これらの遺跡は、全て北上川西岸部に広く発達する河岸段丘上に立地している。

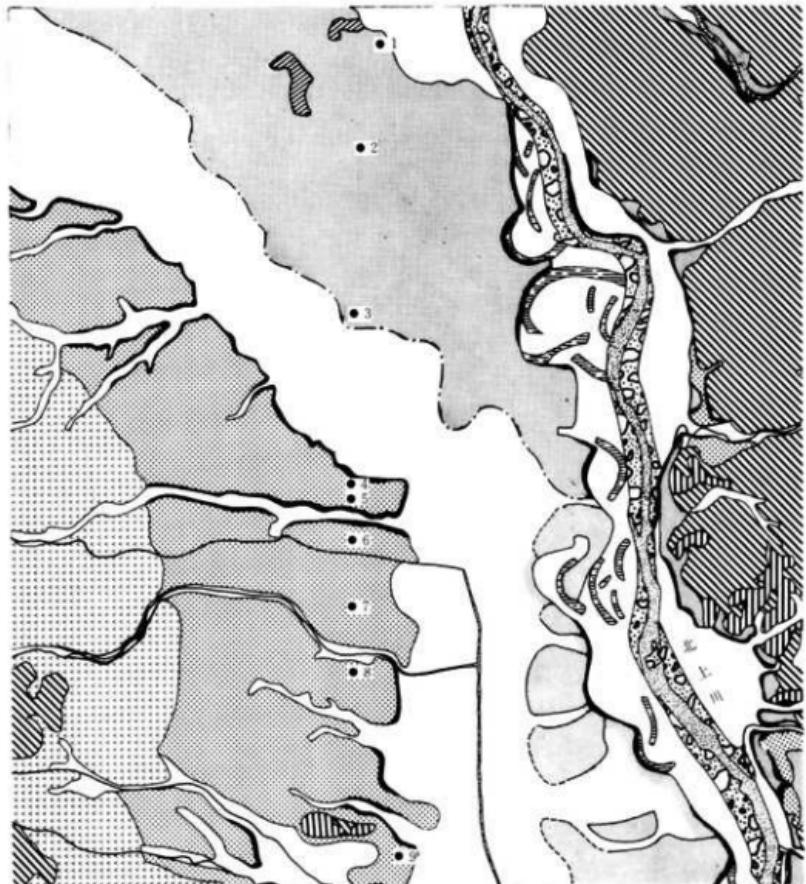
県北の北上山地に源を発した北上川は南下を続け、途中、盛岡市内で零石川・中津川・菜川の3河川と合流する。さらに、北上川は幾つかの小河川と合流しながら、北上盆地の東辺部を南下するが、その西岸部には広い平野が発達している。

盛岡市南部から紫波郡北部にかけての地域では、北上川沿岸の低地帯を除いて、この平野部が最低2つの段丘面に区分される。そのうち、下位の段丘は都南段丘と呼ばれ、盛岡市南部から矢巾町東部にかけての、主要な平野部を構成している。上位の段丘は花巻段丘と呼ばれ、花巻市から都南村方面にかけて、低位の段丘の西側一帯に広く発達している。この段丘の西辺は、箱ヶ森、赤林山・南昌山、東根山、新山などの山地東麓に発達した扇状地群と不明瞭に境を接しているが、全体的に開析が進み、東辺部では各所に比高差10m内外の段丘崖が形成されている。この段丘面上には、矢巾町の白沢森のような残丘地形もみられるが、それ以外は、おむね平坦である。

以上の2つの段丘の西方には、先の扇状地群に取り囲まれた形で、もう一段高い段丘面の痕跡が残っている。その他、西方の山地周辺部には、城内山や谷地館山、飯岡山などの小山地が点在しており、湯沢森や洞ヶ森、その他の残丘あるいは丘陵性の地形が各所に見られる。

以上の様な地形区分の中で、前記各遺跡の立地状況を見ると、矢巾町内の6遺跡は、全て花巻段丘に乗っており、しかも、そのほとんどが段丘の辺縁部に立地している。

都南村の2遺跡は、都南段丘上に乗る遺跡である。都南段丘は、微地形からみた場合、旧零石川の流路に関連した低地帯と、それらに取りまかれる高地帯の2地形に細分できるが、上記の2遺跡は、この微地形区分から言えば、ちょうど高地帯の辺縁部に立地する遺跡であると言えよう。



第IV図 紫波地区北部～盛岡地区南部地形概念図

盛岡市の南仙北遺跡は、上記の都南段丘の北辺部に立地しており、その北側一帯は、北上川と零石川によって形成された氾濫源になっている。

各遺跡の立地する2つの段丘上は、現在、大部分が水田になっているが、一部は畠地や宅地として利用されている。その他、ごくわずかではあるが、山林や原野としての土地利用もみられる。^{注1)}

3. 周辺の遺跡

今まで述べてきた9ヶ所の遺跡周辺には、原始・古代の遺跡が数多く知られている。その中には、矢巾町の徳丹城跡^{注2)}・秋森古墳群^{注3)}・清水野遺跡^{注4)}・都南村の湯沢遺跡^{注5)}・百目木遺跡^{注6)}・盛岡市^{注7)}の太田方八丁遺跡^{注8)}・蝦夷森古墳群などがある。

徳丹城跡や太田方八丁遺跡は、当地方に於ける古代史の解明のために、重要視されている城柵官衙遺跡である。また、それに隣接して、秋森や蝦夷森の古墳群は、古墳時代からの墓制の名残りを留める終末期の古墳群として、古くから諸書に紹介されている著名な遺跡である。

その他、湯沢遺跡は绳文時代中期の大集落として、清水野遺跡は当地方に於ける弥生時代開始期の代表的遺跡として、また、百目木遺跡は古代の大集落として、それぞれ有名であるが、いずれも宅地造成工事や開田工事によって、大半が壊滅している。

注1. 地形区分の記述に関しては、下記の資料を援用した。

岩手県企画開発室 1975 「北上山系開発地域土地分類基本調査」(日誌)

経済企画庁総合開発局 1974 「土地分類図(岩手県)」縮尺1:200000

中川ほか 1963 「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻 第812号

岩手県埋蔵文化財センター 1978 「都南村湯沢遺跡」

注2. 矢巾町西徳田地内に所在している。

板橋源・佐々木博康(編著) 1972 「陸奥国徳丹城跡」 岩手県教育委員会

注3. 矢巾町藤沢地内に所在している。

板橋源・佐々木博康 1969 「秋森古墳」 矢巾町教育委員会

注4. 矢巾町煙山地内に所在し、山王茶屋遺跡と隣接するが、ほぼ同時期の遺跡である。

岩手県 1962 「岩手県史」第1巻 上古篇・上代篇

注5. 都南村飯岡字上湯沢地内に所在している。

岩手県埋蔵文化財センター 1978 「都南村湯沢遺跡」

注6. 都南村見前字百目木地内に所在している。都南村教育委員会により、昭和53年に調査されている。

都南村教育委員会ほか 1978 「百目木遺跡第1次～第4次現地説明会資料」

注7. 盛岡市教育委員会ほか 1978 「太田方八丁遺跡・発掘調査概報 1977」

岩手県教育委員会ほか 1977 「太田方八丁遺跡現地説明会資料」第1次～4次

注8. 盛岡市上太田地内に所在している。

小谷末治 1955 岩手県太田村蝦夷森古墳調査報告 「岩手史学研究」No.18

板橋源・佐々木博康 1969 「盛岡市上太田蝦夷森古墳」 盛岡市教育委員会



第V図 各遺跡の位置と周辺の道路

周辺の遺跡地名表

No.	名 称	時 代	No.	名 称	時 代
1	角破門	下 壁	58	谷田	路
2	法	道	59	宮地	路
3	ト	道	60	A	路
4	櫻	道	61	B	路
5	根	坂	62	野	路
6	久	坂	63	垣	路
7	い	坂	64	坂	路
8	西	坂	65	田	路
9	生	I	66	高	路
10	横	坂	67	川	路
11	生	II	68	陣	路
12	陳	坂	69	通	路
13	津	坂	70	下	路
14	田	坂	71	大	路
15	葛	坂	72	櫻	路
16	長	坂	73	中	路
17	百日本(西部、北部)	道	74	山	路
18	百日本東部	道	75	矢	路
19	新都	道	76	森	路
20	南	道	77	白	路
21	越	道	78	上	路
22	山	道	79	田	路
23	寺	道	80	越	路
24	高湯	C	81	西	丹
25	湯	B	82	徳	城
26	間坂	道	83	魯	郡
27	坂	道	84	乙	郡
28	の島	道	85	高	郡
29	中沢	D	86	松	郡
30	永	道	87	乙	郡
31	下	道	88	櫻	郡
32	永	道	89	下	道
33	大	道	90	下	道
34	島	道	91	櫻	道
35	木	道	92	白	道
36	本	道	93	白	道
37	杉	道	94	間	道
38	高	道	95	櫻	道
39	手	道	96	白	道
40	代	道	97	白	道
41	神	道	98	白	道
42	菖	道	99	石	道
43	蒲	道	100	白	道
44	蘆	道	101	白	道
45	見	道	102	白	道
46	和	道	103	白	道
47	三	道	104	白	道
48	百	坂	105	白	道
49	利	坂	106	え	道
50	野	坂	107	世	道
51	前	坂	108	自	道
52	大	坂	109	太	道
53	通	坂	110	不	道
54	手	坂	111	白	道
55	代	坂	112	白	道
56	久	坂	113	白	道
57	家	I			
	上	坂			
	石	坂			
	下	谷			
		地			
		I			

板橋源、佐々木博康 1970 「盛岡市上太田蛭夷森古墳」 2報 岩手県教育委員会

なお、第Ⅲ図は岩手県企画開発室発行の5万分の1地形分類図「日詠」をもとに、一部加筆して作成したものである。図の作製にあたっては佐藤二郎氏から提供された資料と空中写真的実体視の成果を参照した。空中写真実体視の作業に当たっては、高橋文夫氏らの好意により、埋蔵文化財センター所蔵の資料・施設を使用した。

又兵衛新田遺跡

遺跡記号：MBS

所在地：紫波郡矢巾町大字又兵衛新田60-1 他

調査期間：昭和49年10月18日

調査対象面積：2080m²

1. 遺跡の位置と立地（第IV図P272、第V図P274）

本遺跡は紫波郡矢巾町大字又兵衛新田に所在し、矢巾町役場より北方約0.2km、矢巾駅より北方約0.3kmの地点に位置する。

遺跡の所在する矢巾町は、西部には南昌山・東根山などの第三系からなる山地があり、岩崎川、大白沢山などの扇状地面とつながっている。東部は南流する北上川と接する。

東北新幹線は、矢巾町の中央やや東寄りを南北に縦断し、現在の東北本線と平行して走る。

矢巾町の西部には、扇状地帯の段丘群が広範囲に発達している。これらの段丘群は中川久夫氏^{注1)}らの研究成果によれば、新旧を別にする3段以上に分類され、高位段丘を石鳥谷段丘、中位段丘を二枚橋段丘、低位段丘を都南段丘と呼んでいる。また、二枚橋段丘と都南段丘の間に花巻段丘を設けており、これは二枚橋段丘が削削されて生じた侵食面であるとし、両者を明確に区別している。

高位の石鳥谷段丘は西部山地の東縁の城内山付近に部分的に分布する。中位の二枚橋段丘も同様に西部山地の東縁の山麓部に孤立して断片的に分布している。花巻段丘は、岩崎川などの扇状地面として最も広く発達し、低位の都南段丘は花巻段丘の外縁部に発達する。

本遺跡は低位の都南段丘面上に立地する。遺跡の北側には岩崎川が東流し、西側および南側は花巻段丘との段丘崖となっている。

注1) 中川久夫ほか「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻 第812号 1963

また、段丘区分に際しては高橋文夫氏が作成した地形面区分図を参照した。

高橋文夫「Ⅲ地形・地質」『都南村湯沢遺跡』岩手県埋蔵文化財センター 1978

2. 調査の経過

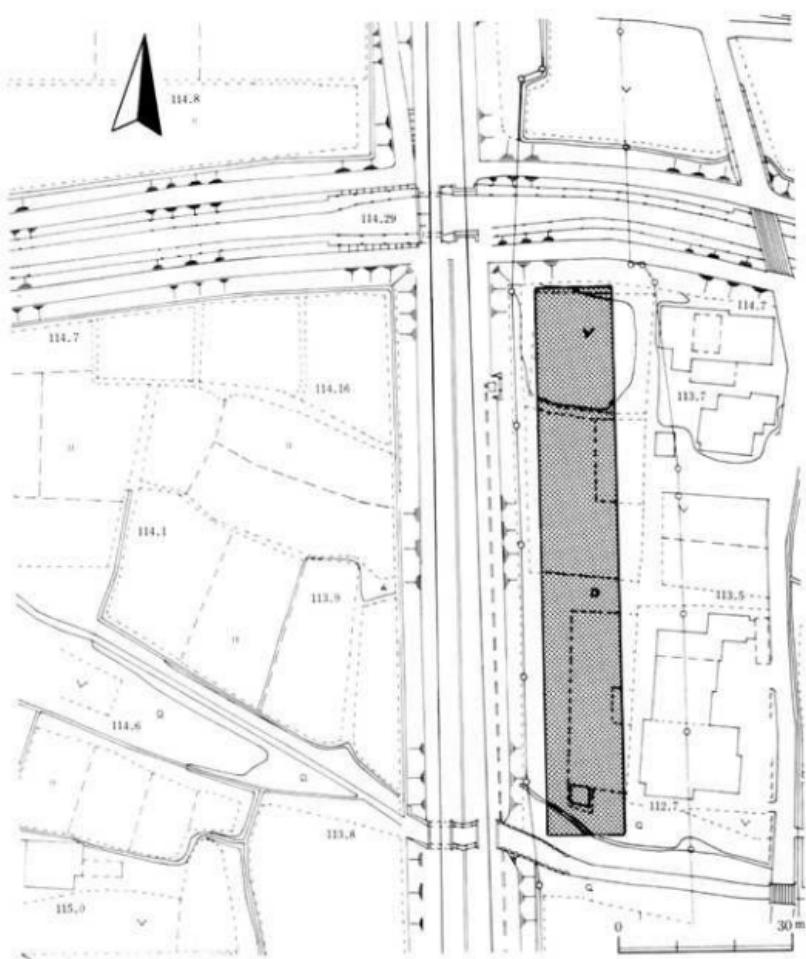
本遺跡は47年度に実施された新幹線路線敷予定地内にかかる分布調査によって発見された遺跡である。土師器片・須恵器片を表探している。

調査区域は南北約90m、東西約23mとなり、約2,080m²を調査対象とした。

調査区域内の地目は宅地・草地となっており、人力での粗掘には多くの困難が伴うことが予想されたため、表土の除去は重機(ブルトーラー)を用いて行なった。その面積は約1,300m²となっている。

3. 調査の結果

調査の結果は、土器の破片が2点出土したのみで造構は検出できなかった。出土した土器はロクロ使用の土師器壺の体部片である。



第1図 遺跡地形図

4.まとめ

本遺跡は、北端に岩崎川をひかえた段丘縁辺部に位置しており、ある程度遺構の存在が予想されたものである。しかし、今回の調査では遺構が検出されず、出土遺物も極めて僅少である。また、その遺物も調査区北端よりの出土であり、岩崎川の搬入品である可能性が強い。

高 畑 遺 跡

遺 跡 記 号：TH

所 在 地：矢巾町下矢次第4地割字松ノ木他

調 査 期 間：昭和47年11月24日～12月2日

調査対象面積：640m²

平面実測基準点：東京起点 484.700km (BA50)

基 準 高：海拔117.40m

I. 遺跡の位置と環境 (第IV図P272、第V図P274)

高畠遺跡は、紫波郡矢巾町下矢次地内に所在し、東北本線矢幅駅より南方1.2kmの地点にあり、東北本線に隣接した約640m²の西から張り出している一段高い微高地状の東端で、畠地となっていた。東北本線ぞいに農道が南北に走り、調査地は農道東側に接している。周辺は水田、畠地からなっており、調査地はこの水田面より約1m高い。この調査地がのる面は地形的には、低位段丘（都南段丘相当面）であり、金ヶ崎段丘に対比される。近接した遺跡は発見されていないが、周辺1km以内には、下赤林I、II、IIIの新幹線ルート内の各遺跡があり、又、欠堀（縄文後期・平安時代の散布地）、上矢次I（平安時代・キャンプ）、茨垣（縄文・弥生・平安の集落跡）の各遺跡が発見されている。（第IV表）

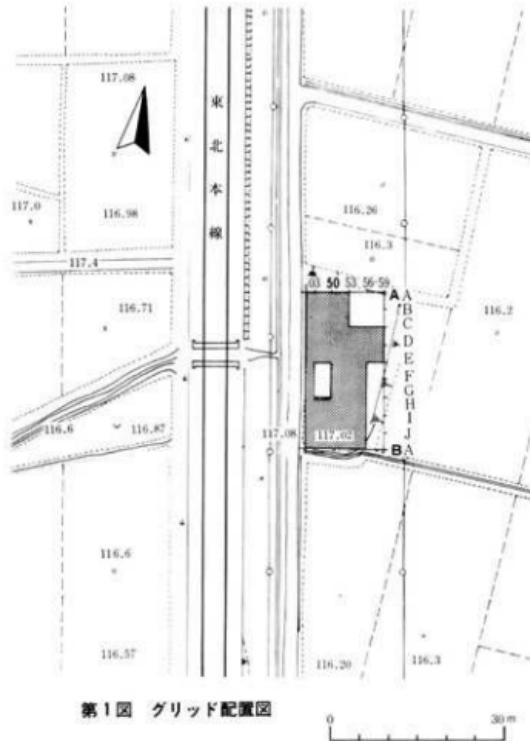
2. 調査の方法と経過

本遺跡は、東北新幹線建設事業の施行に伴って昭和47年に実施した遺跡の分布調査の結果発見されたもので、若干の土師器片等が散布していた。調査は、路線敷内の微高地全体を対象に別記したような中心軸、基準点を設け、ほぼ全面発掘をし、遺構、遺物の検出につとめた。

3. 調査の結果

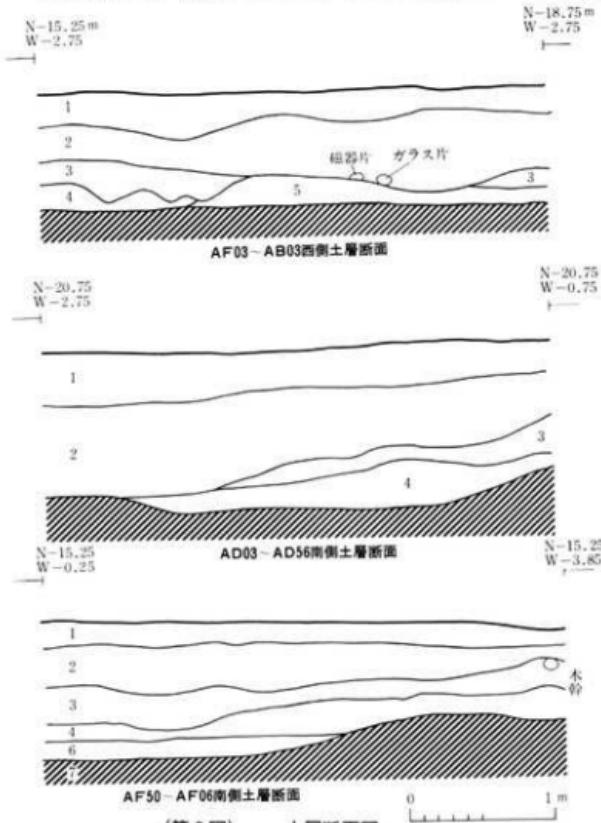
〔1〕 遺跡の基本層序

遺跡の基本的層序は、A F 03-A B 03間の両側土層断面



第1図 グリッド配置図

(第2図1)、及びAF50—AF06南側土層断面(第2図3)の観察の結果、いずれも第I層表土は約20cmであり、第II層は盛土で黄色土の粘土ブロックや雑物(ビン片、陶器片)が混入している。この盛土は、20~60cmあり、かなり不規則な堆積を示している。土器片はこの盛土中から出土する。第III層は粘性のある茶褐色土で若干第IV層も含まれる。第IV層は黒色の強い腐植土で水分が多く含まれる。また、AH03の土層においては第IV層の下に砂層がある。第V層



(第2図) 土層断面図

層	層位	土色	土性	その他の
1	I	灰	粘性強い	
2	II	黄褐色(塊状)	粘土のブロックも混入する	ガラス片、金屬片など混入
3	III	茶褐色	粘性強い	
4	IV	黒	腐植土	
5	V	棕	粘土	
6	VI	灰	砂と粘土の混土	
7	VII	古	グライ化した粘土	

は若干、赤味がかった粘土層となる。第VI層はグライ化した粘土層である。

[2] 発見遺構と遺物

調査の結果、遺構は検出されず、遺物が若干採集されたのみである。遺物は、大部分が第II層盛土中からの出土であり、他は第I層からの出土である。他の層からの出土はない。

出土遺物の破片数は次のとおりである。

出土遺物数(破片数)

	上部器	山内黒土器	須恵器
16	(4)		6
塵	33		

・土器器

(第3図、写真図版1-3-5)

内黒黒色土器は环口縁部及び底部片であるが、1点を除き小片のため実測図作成はできなかった。No.3はロクロ成形されている环で、内面のヘラミガキは密である。推定口

径は15cmである。

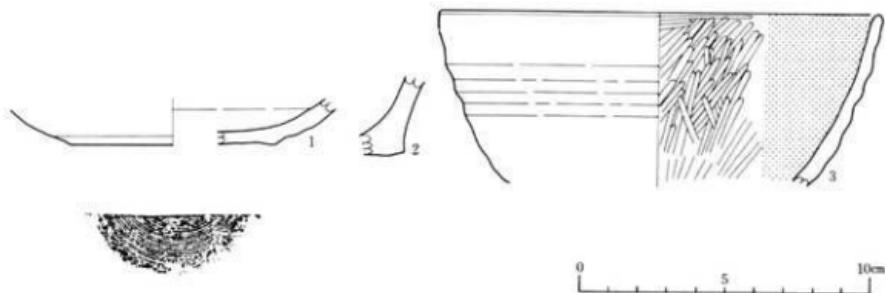
その他の土師器も、小片が多く、全体を復元実測できるものはなかった。しかし、一部口縁部片をみると、上端が上にのび断面三角形に近いものが見られ、ロクロによって調整されている。体部破片をみると、内外面にロクロ痕が観察される。しかし、全体に磨滅が著しく、調整痕などはっきりしないものが多い。底部をみると、痕跡不明のものが多く、わずかに木葉痕を観察できるものぐらいである。

・須恵器（第3図、写真図版1-4）

須恵器は土師器にくらべ、量的にも少なく、わずかに坏底部片が実測図（第3図1）に作成できたのみである。この片は、図上復元では底部径は7cmで、体部のたち上がりはあまり強くない。底部は、回転糸切りによってロクロから切り離され、その後の調整はない。

4.まとめ

今回の調査では、遺物のほとんどが第II層の盛土中から出土したことから、この調査対象の微高地状の地形は、過去の周辺の開田の際の盛土、ないしは、東北本線工事の際の拡幅による残土として盛られたものとも考えられる。したがって、本来の微高地は、現東北本線の路線付近までのびていたものと考えられ、今回の調査で出土した遺物に関連する平安期の遺跡は、その微高地、特に西方畠地などの微高地に存在する可能性が強い。



(第3図) 出土遺物実測図

しも あか ばやし
下 赤 林 I 遺 跡

遺 跡 記 号：SAB I

所 在 地：紫波郡矢巾町赤林第115地割字茨垣他

調 査 期 間：昭和47年10月25日～12月16日

調査対象面積：2720m²

平面実測基準点：東京起点 485.330km (BA50)

基 準 高：海拔117.70m

I. 遺跡の位置と環境 (第IV図P272、第V図P274)

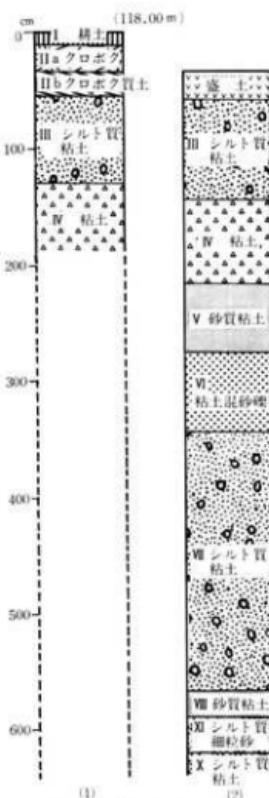
下赤林I遺跡は、紫波郡矢巾町赤林地内にあり、東北本線矢幅駅の北約2kmの東北本線沿いに位置する。本遺跡の西方には、奥羽山系から流れる支流が形成した大小の段丘化した扇状地群の発達が見られる。この扇状地群の西側には、箱ヶ森・赤林山・南昌山・東根山などの第三系からなる標高850m前後、またはそれ以上の山地がある。本遺跡はこれら奥羽山系・後背山地に沿う山麓扇状地の東側で、低位段丘面上にある。この低位段丘は中川氏らの研究として花巻段丘に相当するものとされている。この花巻段丘は、本遺跡西方に広範に分布するが、本遺跡北方では下位のいわゆる都南段丘面との境界が不明確なものとなる面もある。本遺跡は以上のような低位段丘面上にのるが、位置的には花巻段丘東縁部にあたり、遺跡北部は旧河道となっており、本遺跡畑地面との比高は約2.3mである。

本遺跡の周辺には、東北新幹線ルート内にある下赤林II・III遺跡・高畠遺跡があり、更に北約2kmには大渡野I・II遺跡・南野遺跡などがある。また、平安時代遺跡としては下谷地遺跡などがある。(第IV表)

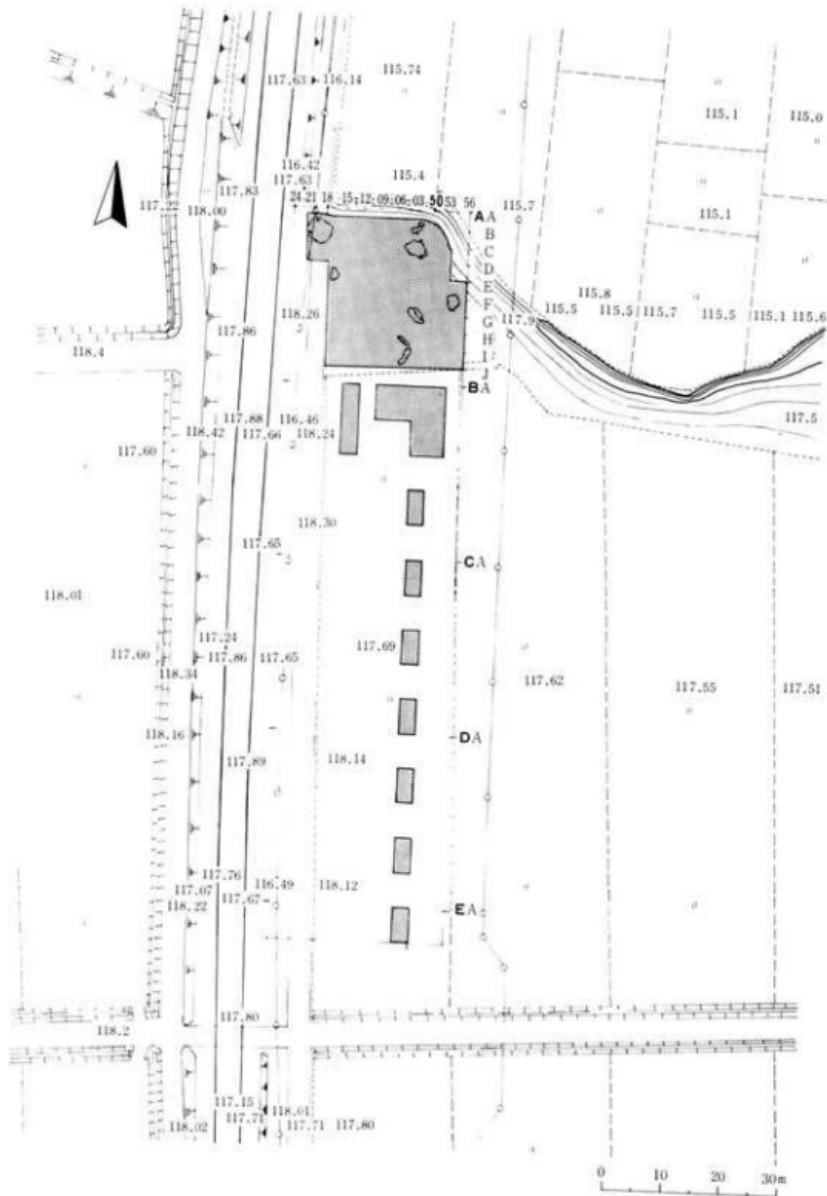
遺跡の現状はAブロックは畑地であり、Bブロック以南は水田である。なお、畑地と水田との比高は約40cmである。

2. 調査の方法と経過

本遺跡は、昭和47年に実施した東北新幹線建設地内の遺跡分布調査によって発見された遺跡で、若干の土師・須恵器片を表採した。調査は、まず路線敷内の遺跡全体を対象に $3\text{ m} \times 3\text{ m}$ のグリッドを設定し、2グリッド($3\text{ m} \times 6\text{ m}$)を市松状に表土を除去して遺構の検出につとめた。中心軸・基準点・実測基準高は別記のとおりである。



第1図 基本土層柱状図



第2図 グリッド配置図

3. 調査の結果

[1] 遺跡の基本層序

遺跡は微高地上的畠地と一段低い水田面とからなる。遺跡の基本層序はこの畠地面と水田面とで観察したが、以下その概略を述べる。

畠地の層序はAB12グリッドで深掘りを行ない、第1図(1)のような結果を得た。また、水田面については、国鉄・盛岡工事局作成によるボーリング資料を参照した。(第1図(2))

AB12グリッドの層序は以下のようである。第Ⅰ層は表土で黒褐色のクロボク質土で約10cmの厚さになっている。第Ⅱ層はa、bに二分されるが、黒色の強いクロボク土である。Ⅱa層はしまりがなく、草木根を含むものであり、Ⅱb層はⅡa層に比べ粘性が強いもので、焼土ブロック・土器片を多く含む。第Ⅲ層は地山で淡黄色(2.5Y 1/4)のシルト質粘土層であり、第Ⅳ層は灰白色(2.5Y 5/1)の粘土層である。ボーリング結果によると、約70cmの厚さをもち、以下の層に続くようである。

次に水田面の基本層序についてみると、AB12グリッドのクロボク質土を欠くが以下Ⅱb層までの各層はほぼ同じ厚さを示しているようである。

[2] 発見された遺構と遺物

調査の結果、Aブロック畠地上から竪穴住居跡1棟、ピット・焼土遺構・土器などが発見された。なお、Bブロック以南の水田面からは遺構・遺物の発見はなかった。

(1) 住居跡

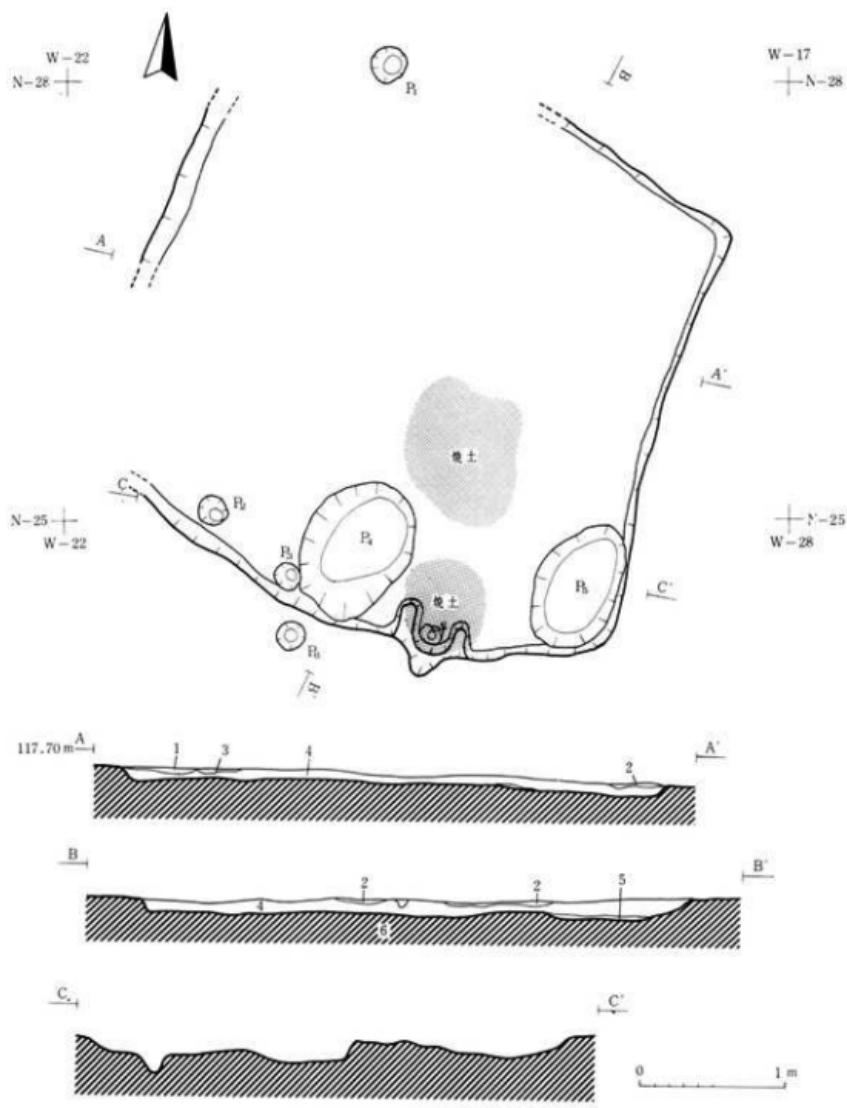
AB24住居跡 (第3図、写真図版2-1)

【遺構の確認面】 微高地西寄り、東北本線寄りの農道とコンクリート排水溝下に一部かかる形で確認された。遺構確認面はクロボク下の淡黄色シルト質粘土層である。

【保存状況】 東北本線沿いの農道、およびコンクリート溝工事の際の搅乱、削平のため住居跡の北、および西隅が失われている。

【重複・増改築】 認められない。

【平面形・長軸方向】 住居跡北、西隅が失われているので正確な形は不明であるが、残存している壁と、柱穴状ピットの配列、住居内堆積土の分布等から推定すると、隅丸のほぼ正方形のものと考えられる。方向はほぼ南北で、大きさは3.5m×3.6m程度と推定される。住居跡の床面積は12.6m²(推定)である。



第3図 AB 24住居跡 平・断面図

層No.	土 色	土 性	そ の 他
1		盛 土	農道設置の際に敷いたもの
2	黒 色 土	シルト質土	草根を多く含み、バサバサしている
3	黒 色 土	クロボク質土	粘土ブロック若干混入
4	黒 色 土	クロボク質土	粘性強く、焼土ブロック・土器片含む
5	赤 褐 色	焼 土	粘土ブロック片を若干混在
6	淡 黄 色	シルト質粘土	

〔堆積土〕 基本的には2層であるが、全体として地山面の削平、流失があり、10~15cm程度の堆積である。第1層は盛土で農道敷設の際のもので、砂利・粘土等を含む。第2層は耕作土で、草根を多く含み、バサバサした土である。第3層は黒色の強いクロボク質土で、粘土ブロックが若干混入している。第4層は3層に類似するが、粘性が強く、焼土ブロック・土器片などを混入する。第5層は焼土ブロックで赤褐色を呈し、粘土ブロック片も若干混在する。第6層は地山で淡黄色(2.5Y 4/4)のシルト質粘土層である。

〔壁〕 地山を壁としており、わりにかたくしまっている。底面からやや傾斜をもって立ちあがり、残存壁高は約10~15cmである。なお南辺では壁にくいこんだビット(P_4 、 P_5)が認められた。

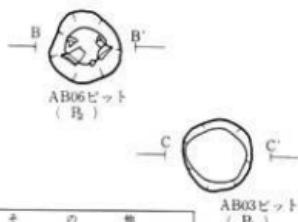
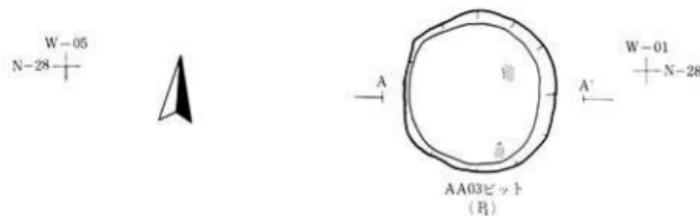
〔床〕 地山をそのまま床面としており固くしっかりしているが、白色粘土のブロックが広がり一部凹凸のみられるところもある。特に南辺中央部付近に黄白色の粘土の広がりがある。

〔柱穴〕 住居北側および南側に計3個のビット(P_1 、 P_2 、 P_3)が認められた。床面からの深さはそれぞれ13cm、14cm、13cmである。形態や深さに若干の疑問があるが、他にビット状のものは認められず、柱穴と考えられる。

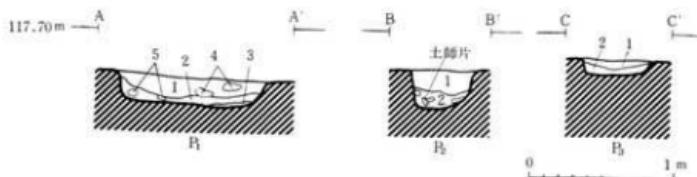
〔周溝〕 認められない。

〔カマド〕 カマドは南辺やや東寄りにとりつけられている。白色粘土により側壁を構築している。天井部はないが、天井部崩落と考えられる黄白色粘土がカマド内に堆積しており、燃焼部前部にはスミ片が散在していた。燃焼部奥壁近くには土師器甕(写真図版3-6)が倒立しており、更にその下に土師器环がやはり伏せた状態で出土した(写真図版4-1)。煙道部は削平のため残存しない。しかし、カマド付近は全般に風倒木によると思われる粘土の盛り上がりがあり、正確なカマド全体の形状・堆積土の觀察はできなかった。

〔貯蔵穴〕 南辺のカマドをはさんで2個のビット(P_4 、 P_5)が検出された。共に、梢円形をしており、浅いなべ底状のビットである。ビット4の底部には赤褐色の粘性ある焼土が堆積しており、土器片も認められた。ビット5もほぼ同じ堆積を示しており、灰の混入も認められた。貯蔵穴としては深さに疑問があるが、焼土・灰などが堆積していることから、灰溜め的なビットとも考えられる。他のビットは木根によるものである。



番号	土色	土性	その他の
1	黒褐色土	泥土	シルト質土の中に砂土粒、木炭粒を含む 細粒質のつさやすく、べとつく。
2	黒褐色土	砂土の混入	より幾度片、木炭粒を多く含み、灰も入る。 粘性つよい。土器片を含む。
3	赤褐色土	泥土	灰、木炭粒を多く含む
4	黄白色土	粘土ブロック	
5	赤褐色土	燒土ブロック	



第4図 Aブロック ピット・焼土(1) 平・断面図

〔その他の施設〕 認められない。

〔年代決定資料〕 特に遺物がまとまって発見されたところはないが、床面から散在的に小破片が発見されたほか、カマド燃焼部から土師器甕と壺（内黒）が復元可能で発見された。これらはいずれもロクロ使用によるもので、底部切り離しは回転糸切り技法を用い、外面にヘラ削り調整のないものである。

〔出土遺物〕 住居に伴うと考えられる遺物には床面上、およびカマド燃焼部出土の土師器甕片がある。

土師器

壺（第6図1・3、写真図版4-1） いずれも平底で回転糸切り痕が観察される。1は口縁部径14.2cm、底部径5.6cm、器高5.6cmの完形である。内面に緻密なヘラミガキが施され、黒色処理が加えられている。体部中央には2条のロクロ成形時の痕跡がみられる。器高がやや高く、体部は若干内弯気味に立ちあがる。胎土は緻密で、にぶい橙色（7.5YR 3/4）を呈する。焼成は硬質である。この壺は後述するNo.8の土師器甕の下に重なった状態で出土したもので、カマド燃焼部奥壁にありながら火熱を受けた痕跡は見られない。

甕（第6図8、写真図版3-6） 口径が器高より若干大きいもので、比較的小型の甕である。ロクロによる成形のみで、他の調整は加えられていない。底部切離しは回転糸切りの痕跡があるが、磨滅が著しいため、明瞭でない。口縁部が「く」の字状に外反し、口唇部で若干立ち上がる。胎土には砂粒が混入し、ザラつく。計測値は、口縁部径15.8cm、底部径7.7cm、器高14.0cmである。胎土の色調は橙色（7.5YR 3/4）である。この甕は前述のAB24住居跡カマド燃焼部奥壁に土師器壺（第6図1）の上に伏せた状態で出土したもの（写真図版2-3）であるが、火熱を受けた部分が体部下半だけの小範囲である。

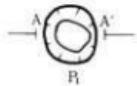
(2) A ブロック・ピット、焼土(1) (第4図)

AA03ピット（P₁） Aブロック畠地の北側、クロボク土下の淡黄色シルト質粘土層上面で検出された。平面形はほぼ円形を呈し、上面径105cm、底面径90cm、深さ20cmを測る。ピット西壁においては、壁高18cmで垂直に近い立ち上がりを示している。東壁も西壁と同じ立ち上がりである。壁は堅くしっかりしている。底面はやや堅い。埋土は5層に分けられるが、黄白色の粘土と赤褐色の焼土が共にブロック状で入りこんでいる。特に炭化物・灰・木炭片なども混入しており、全体として柔らかい土質である。土器片の混入はなかった。

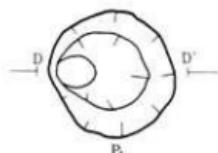
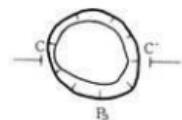
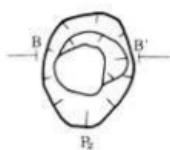
AB06焼土（第4図）

AA03ピットの南50cm地点、地山面上に検出されたもので、40cm×30cmの楕円形状の広がりをもっている。しかし木根のため、北端に焼土の浮きあがりがあり、若干欠損している。焼土

W-05
N-22

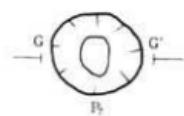
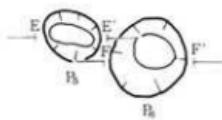


EW-00
N-22

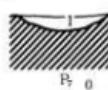
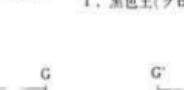
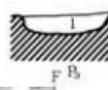
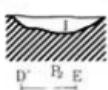
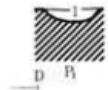


N-18
W-05

EW-00
N-18



A A' B B' C C' 117.70m 埋土
1. 黒色土(クロボク質土)



第5図

A ブロック ピット(2) 平・断面実測図

の厚さは5cmである。

〔出土遺物〕（第6図2・11、写真図版3-5、4-3）焼土中から土師器壺（第6図2、写真図版4-3）が出土した。ほぼ完形のもので、口縁部径15.1cm、底部径5.3cm、器高4.5cmである。ロクロ成形によるもので、底部は回転糸切りによる切離しが行なわれている。内外面に緻密なヘラミガキ痕がみられ、内面を黒色処理している。ヘラミガキ以外の再調整は見られない。体部から口縁部まではやや丸味をもつて外傾している。外面の色調はにぶい橙色（7.5 YR 4/4）で、口縁部に墨書きと思われる跡が認められるが不明である。また、焼土付近から土師器壺片（第6図11、写真図版3-5）が出土した。比較的大型のもので、ロクロ調整によるものである。体部外面に刷毛目痕があり、また、口縁部外面には、ナデ状の痕跡も認められる。

AB06ピット（P₂） AB06焼土の南50cm地点、確認面は淡黄色シルト質粘土層上面である。平面形はほぼ円形を呈し、上面径50cm、底面形40cm、深さ25cmを測る。ピット東・西壁ともほぼ垂直な立ち上がりを示し、壁の周囲および底面は堅くしっかりしている。埋土は2層に分かれるが、黒色土・焼土・粘土ブロック・木炭片などが混じり、ぼきぼきした柔らかい混土である。

〔出土遺物〕 AB06ピット中から土師器壺・壺片が出土した。いずれも底面直上からのものである。（写真図版2-2）

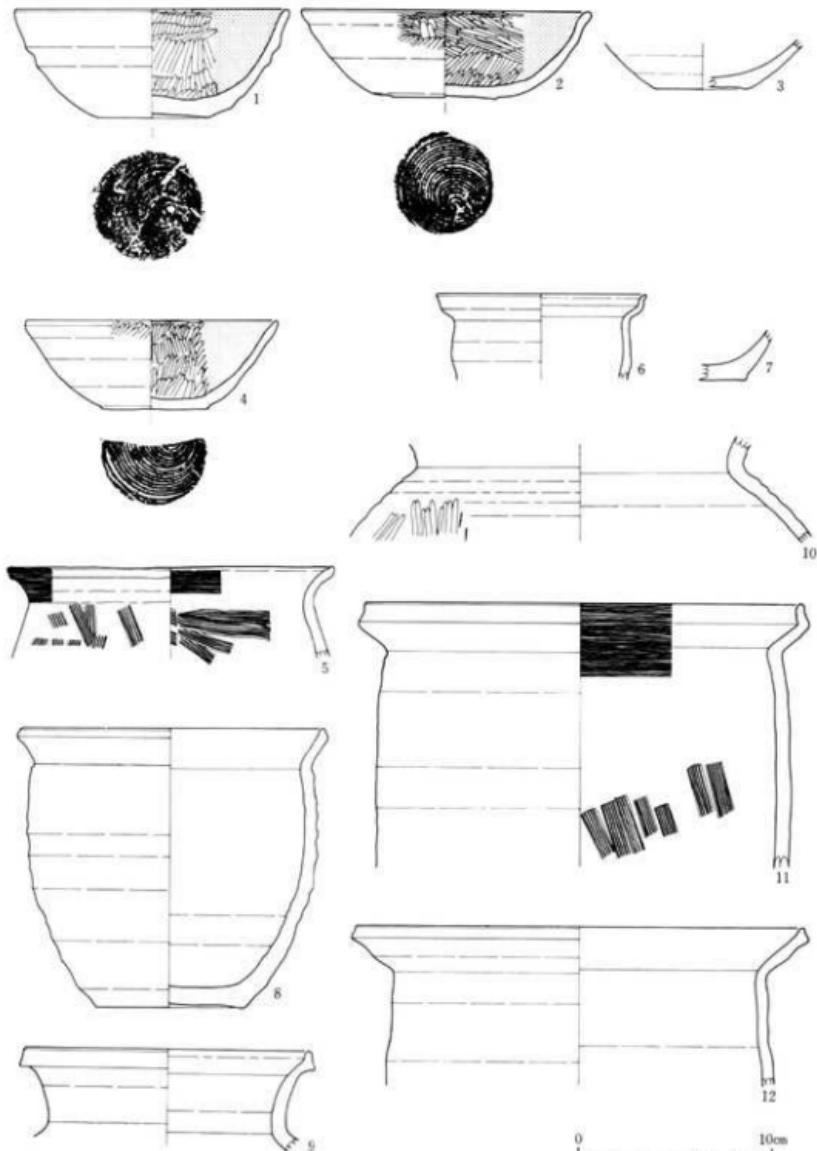
土師器

壺（第6図4、写真図版4-2） $\frac{1}{4}$ の残存部分である。推定計測値は口縁部径13.0cm、底部径5.3cm、器高4.6cmである。内面はヘラミガキが密に施され、黒色処理が加えられており、外面口縁部の一部にもヘラミガキが認められる。外面の色調は浅黄橙色（10 YR 4/4）で、硬質の焼成である。底部切離しは回転糸切り技法である。

甕（第6図12、写真図版3-4）製作に際しロクロを使用したもので、口径より器高が大きくなる比較的大型の甕である。推定口縁部径23cm、頭部径19.5cmである。頭部に段は認められない。口縁部は外反しており、比較的短い。口縁端部がやや上方に立ち、口唇部に沈線がめぐる。体部の調整痕は器面が磨滅しているため不明である。胎土は長石・石英粒が含まれ、器面がざらつく。外面色調は明るい橙色（5 YR 4/4）である。

AB03ピット（P₃） AB06ピットの東南70cm地点、確認面は他のピットと同じ淡黄色シルト質粘土層上面である。平面形はほぼ円形を呈し、上面径50cm、底面形40cm、深さ10cmを測る。ピットの壁はややなべ底になっている。埋土は2層に分れるが、他のピットのような焼土・灰の混入が少なく、黒褐色土がほとんどである。遺物の出土はない。

(3) Aブロック・ピット群(2) (第5図)



第6図 出土土器実測図

AB03グリッドからAE06グリッドにかけて7個のピットが検出された。いずれも淡黄色の地山面を掘り込んでいるものである。平面は橢円形が多く、なべ底状の掘り込みである。埋土は黒褐色土の単層のみである。焼土・灰・炭化片などは含まれない。また、遺物の出土もなかった。耕作によるものと考えられる。

(4) グリッド出土遺物

造構に伴う遺物は上記の通りであるが、それ以外の出土遺物について以下に記す。

土器類

壺（第6図7） 小片のみである。7はAB06から出土した壺の底・体部片である。底部径は推定8cmである。ロクロ成形によるものであるが、再調整については認められない。底部は回転糸切りによる切り離しが施されている。

甕（第6図5・6、写真図版3-1・2） 5（写真図版3-2）はロクロを使用しないもので、単純口縁をもち、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反するものである。体部は若干の丸味をおびるものと思われる。体部下半および底部の器形は不明である。外面は刷毛目調整が施され、口縁部に横ナデがなされている。内面はヘラナデによって調整されている。6はロクロ使用による比較的小型のものである。口縁部は外反し、口唇部は直立する。口唇部直下に沈線が巡る。器面の再調整は認められない。

壺（第6図10） AB24グリッド表土Ⅱa層出土の体・頸部片である。ロクロ成形によるものである。小片のため器形全体については不明であるが、体部が球形状のものになるものと思われる。体部外面に若干のヘラミガキ扱い痕跡が観察される。焼成は硬質で、器外面は明褐色（5YR5%）で内面は赤褐色（2.5YR5%）を呈する。

須恵器

壺（写真図版4-5） 数片出土したのみである。壺口縁部片（写真図版4-5、上左2番目）がAB03グリッド表土（第Ⅱa層）黒色土層中から出土した。推定口縁部径は14cmである。

壺（第6図9、写真図版4-4） 9は短頭壺の口縁部・頸部片である。AB06グリッドの表土（第Ⅱa層）黒色土層中から出土した。推定口縁部径14.8cm、頸部径12.0cmである。口縁・頸部の内外面に灰が付着する。口縁端部は上方と外方に挽きだされている。

甕（写真図版4-5） 小片のみであり、大部分がAB03グリッドからAB06グリッドにかけての表土Ⅱa層中から出土した。

4. まとめ

下赤林1遺跡の調査における造構と遺物については以上に記したとおりである。これらの結果をふまえ、本遺跡のまとめをしてみたい。

- (1) 本遺跡は奥羽山系・後背山地に沿う山麓扇状地面東側の低位段丘面上にある。いわゆる花巻段丘面上であり、遺跡はその段丘東縁部に立地する。
- (2) 発見された造構は全て、遺跡北側の微高地（畠地）からだけである。造構は竪穴住居跡1棟、灰溜め状のピット1、焼土2などであり、出土した土器は土師器、須恵器の环・壺・甕などである。
- (3) 竪穴住居跡は農道やコンクリート排水溝の設置などのため、一部の壁に削失などがあり、不明の点もあった。また、カマド跡から土師器环と甕が重なった状態で出土したが、土器自体に火熱を受けた跡がほとんど見られることなどから、少なくともカマド構築時に意図的に使用し、カマドの機能を構成したものとは考えられない。
- (4) ピット群のうち、ピット2は灰溜め的なピットであり、他のピットは性格不明なものである。また、ナベ底状のピットは、造構には関連のない新しいものである。
- (5) 出土遺物のうち、土師器环は回転糸切り痕を有し、内面にヘラミガキを施した内黒土師器があり、一部、外面にもヘラミガキを施しているもので、いわゆる表杉の入式期のものである。須恵器には、环・壺・甕があるが、环片が他に比して少ない。
- (6) 以上の出土遺物から本遺跡の時期を考えてみると、平安時代中頃、10世紀中頃から10世紀後半にかけての造構とみたい。
- (7) 住居跡は1棟のみの発見であり、遺物の量も少なく、また地形的にも小範囲の微高地であることなどから、大きな集落を形成するものではなく、小規模な単位の住居跡の一部であろう。地形的にはむしろ西方に広がる段丘面上に集落が構成されていることが予想される。

引用・参考文献

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| 岩手県 (1961) | 「岩手県史」第1巻 |
| 岩手県紫波町 (1972) | 「紫波町史」第1巻 |
| 水沢市教育委員会 (1976-1978) | 「旧沢城跡」発掘調査概報 (各年度) |
| 多賀城跡調査研究所 (1974-1978) | 「多賀城跡」発掘調査概報 (各年度) |
| 沼山源喜治 (1978) | 「東北北部の歴史時代の土器」 |

下赤林Ⅱ遺跡

遺跡記号：SAB Ⅱ

所 在 地：紫波郡矢巾町大字赤林第115地割字茨垣71—1他

調査期間：昭和48年11月13日～12月19日

調査対象面積：3200m²

平面実測基準点：東京起点485.520km (DJ50)

基 準 高：海拔117.10m

I. 遺跡の位置と環境（第IV図・P272、第V図・P274）

下赤林Ⅱ遺跡は、紫波郡矢巾町赤林第115地割地内にあり、東北本線矢幅駅の北約2.2kmの東北本線沿いに位置する。本遺跡の西方には大小の段丘化した扇状地群の発達がみられるが、本遺跡はこれら段丘のうち低位段丘上位のいわゆる花巻段丘面上にのり、段丘東縁部にある。しかし、近接の下赤林Ⅰ遺跡の遺構検出地点（畑地）の標高より約60cm低い面になっている。

下赤林Ⅱ遺跡の近接地には、別記のような数多くの遺跡があり、東北新幹線ルート内の遺跡としては北200mに下赤林Ⅲ遺跡、南200mに下赤林Ⅰ遺跡がある。これらの遺跡も本遺跡が立地する低位段丘の花巻段丘面上にあり、いずれも段丘東縁部に位置している。（第IV表）

なお、遺跡の現状は杉林の伐採のあとにアカシアの植林をした屋敷林である。また遺跡の西、東北本線西側は水田である。

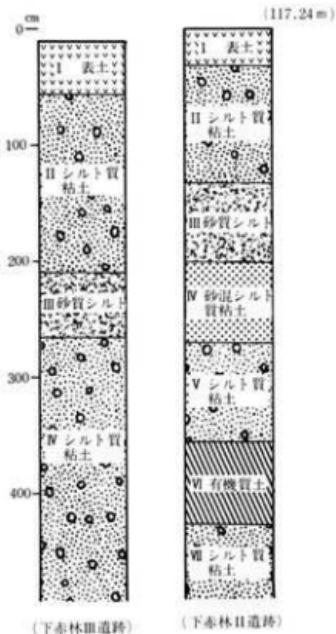
2. 調査の方法と経過

本遺跡は昭和47年に実施した東北新幹線建設地内の遺跡分布調査によって発見された遺跡で、若干の土器・須恵器片を探集した。調査はまずブルドーザーによる樹木の抜根作業を行ない、その後、路線敷内の遺跡全体を対象に3m×3mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去して遺構の検出につとめた。中心軸・基準点・実測基準高は別記のとおりである。

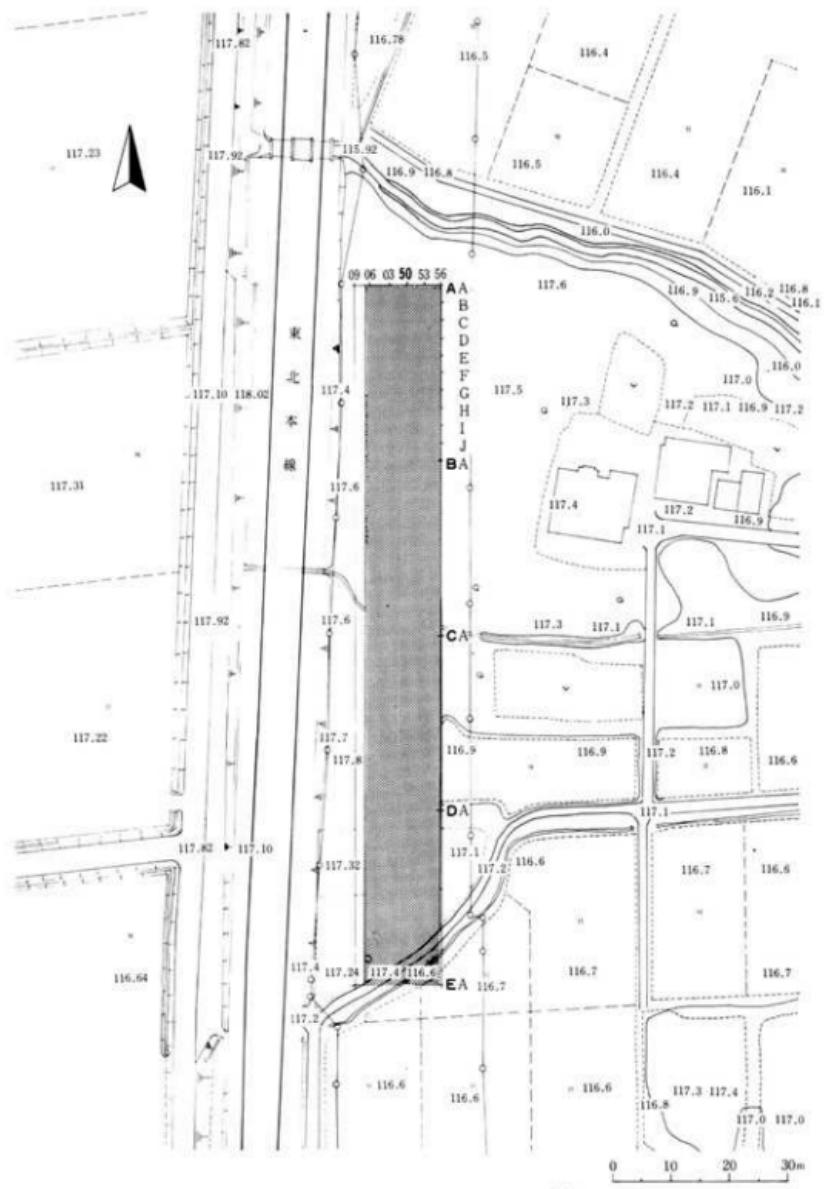
3. 調査の結果

[1] 遺跡の基本層序（第1図）

国鉄・盛岡工事局資料によるボーリング結果によると、①表土層は約25cmであり、木根の多い褐色土である。②はシルト質粘土層で黒褐色を呈す



第1図 基本土層柱状図



第2図 グリッド配置図

る。約100cmの厚さである。このシルト質粘土層は国鉄・ボーリング資料によると北200mの下赤林Ⅲ遺跡では約150cmの厚さであるが、本下赤林Ⅱ遺跡では100cmであり、更に南200mの下赤林Ⅰ遺跡（水田面）では80cmと次第に薄くなっていく。③砂質シルト層は70cmである。④砂混りシルト質粘土層の下層はシルト質粘土層であるが、本遺跡では75cmの厚さを示すに対し、下赤林Ⅲ・下赤林Ⅰ遺跡では250cmのかなり厚い層になっている。しかし、本遺跡では有機質土を挟む堆積になっており、以下に再びシルト質粘土層が認められる。地表下750cmで砂礫層に至る。

[2] 発見遺構と遺物

調査の結果、円形ピット1基、土器（土師器・須恵器）、フイゴ羽口片1の出土があった。

円形ピット（第3図、写真図版1-2）

調査対象範囲の南、DJ50グリッド地点に検出された。検出面は淡黄色のシルト質粘土層である。ピット上面は東西約2m、南北約2mのややゆがんだ円形である。底面は南北で若干凹凸があるが、ほぼ平坦である。壁高は東西においては約15cmで垂直な立ち上がりを示すが、南北方向においては緩い立ち上がりである。底面の中央部付近では約20cmの深さである。

埋土は黒褐色土だけで、細分できない。埋土上面に50cm×40cmの範囲で焼土が検出された。約3cmの厚さである。またピット中央の埋土上面に白色粘土ブロックが検出された。

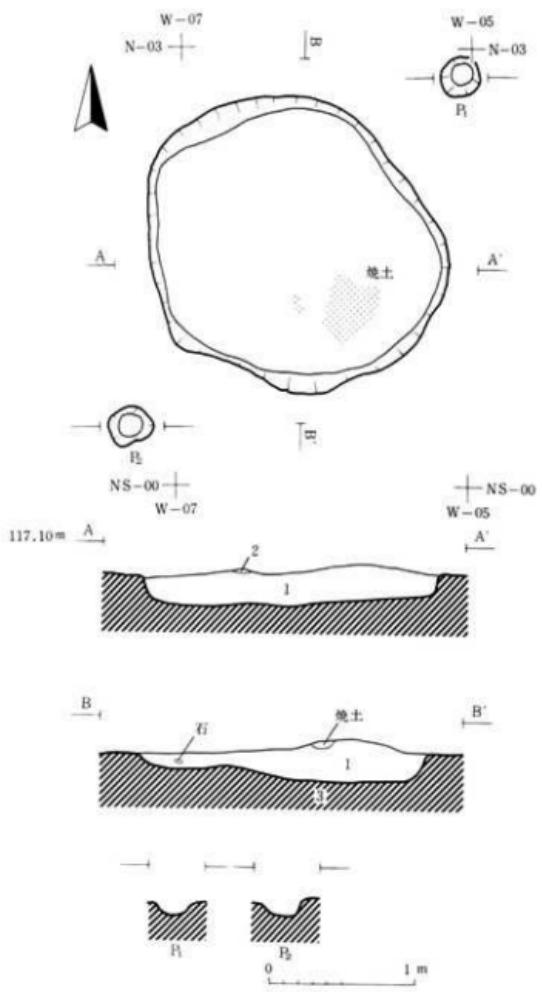
〔出土遺物〕 ピット床面および埋土から土師器壺・甕片、須恵器壺・甕片、フイゴ羽口、石器などが出土した。

土師器

壺（第4図8、写真図版2-1） 円形ピット内北隅から出土したもので約1/2の残存があり復元可能である。推定計測値は口縁部径13.6cm、底部径6.8cm、器高6.2cmである。ロクロ成形によるもので、底部切離しは回転糸切り技法による。器壁は厚手で、ややゆるく内窓しながら立ち上がり、口縁部でまるくおさまる。器高は大きい。黒斑は認められない。器面の再調整はなく、色調は内外面の大部分は橙色（2.5YR 7/8）であるが、体部外面下半部と底部は浅黄橙色（7.5YR 4/8）を呈する。

土師器・壺は、他に数片出土したのみであるが、黒色処理を施した土器は出土していない。

甕（第4図3・4・6、写真図版2-5） 3・4は比較的大型の甕口縁部片である。小片だけであり、口縁部径などの推定値は不明である。口縁部は短かく立ち上がり、口縁部で若干厚くまとまる。口縁部は平面をなし、沈線が巡る。6は比較的小型の甕底部片である。回転糸切りで切り離したあと、底部外面周縁と体部立ち上がり部にヘラナデ状の調整を施している。底部外面にX印の刻線がみられる。



第3図 D.J09ピット平・断面実測図

層番	土色	土性	その性
1	黒色	黒ゴク質土	若干粘土質シルトも含む
2	灰白色	粘土土	粘性が強い
3	灰褐色	シルト質粘土	

須恵器

壺（第4図5・7、写真図版2-6）5は灰黄色（2.5YR 7/6）、7は灰白色（2.5YR 7/1）の色調をもち、いずれも硬質の焼成である。口縁部小片のため器形全体は不明である。

甕（第4図9、写真図版2-5）推定口縁部径は24cmのややナベ形をした器形であるが、底部の器形は不明である。頭部で「く」の字形にくびれ、口縁部がやや内弯しながら外傾する。体上部外面にヘラケズリを施し、更にヘラナデ調整をしている。器内面はロクロ調整痕がみられる。口縁部内・外面に灰の付着がある。

フイゴ羽口（第4図2、写真図版2-3）ピット中央部のほぼ底面直上から出土した。全周の約1/4の残存部だけであるが、推定直徑は6~7cm、孔径は2.5~3.0cmである。残存長は6.7cmを測る。高温による色調変化がみられず、また、先端部にくびれが見られるところから燃焼部に接続する部分ではなく、空気を送る側の結びの部分と考えられる。胎土は、砂粒含みのシルト質粘土で、橙色（7.5YR 7/6）を呈する。

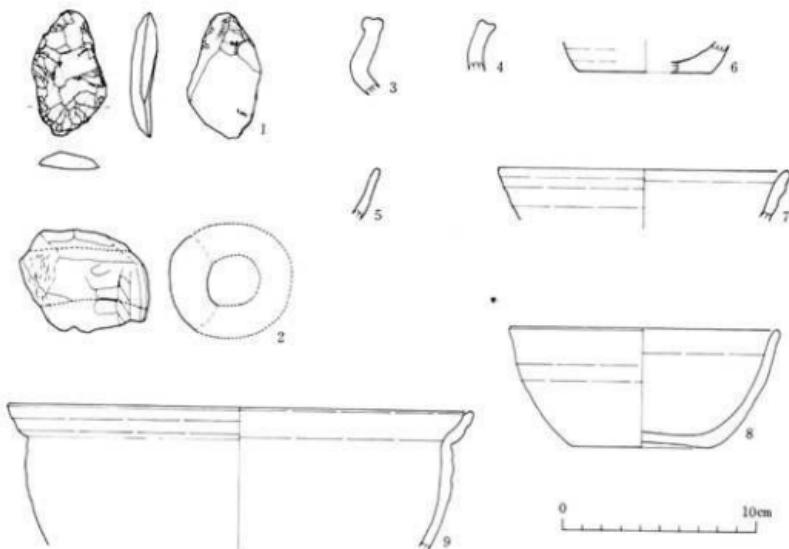
砥石（写真図版2-4）円形ピットの南側細地、黒褐色土層中から出土したもので、3.5cm×3.0cm×3.0cmの小片で、砥磨面は1.5cm×1.5cmだけの残存である。

石器（第4図1、写真図版2-6）ピット内南西の地点、底面より約20cmの埋土第1層上部から出土した。切削具類と考えられる。比較的大型の剝片を素材とし、片面加工で二側縁に弧状の刃部を作りだしている。使用のための刃こぼれが見られる。計測値は最大長65mm、最大巾36mm、重さ26.6g、材質は硬質頁岩である。

ピット（第3図、写真図版1-2）上記円形ピットの周辺（東北・南西）に2個のピット（P₁、P₂）が検出された。検出面での上面径は約30cm、深さ10cmのナベ底形をしたピットである。埋土は黒褐色土の単層であり、遺物等も含まれないことから、特に前記円形ピットに伴うものとは考えられない。

4. まとめ

- (1) 下赤林II遺跡の調査によって発見された遺構は円形ピット1基のみである。ピット中からは、石器・土師器・須恵器・フイゴの羽口片などが出土したが、埋土上面に石器が混入していること、更にピット底面に土師器片が出土することなどから、少なくとも自然的な埋土とは考えられない。ただ、ブルドーザー使用による抜根作業を行なっていることから、その際の移動によって混入したこととも考えられる。
- (2) フイゴ羽口の出土があったが、羽口以外の鉛津などの鍛冶道具の出土もなく、炉跡も検出



第4図 出土遺物実測図

されなかった。しかし、ピット内に焼土・木炭片なども混入していること、更に円形ピット付近から砥石片が出土していることなどからこの円形ピットは工房跡と考えられる。

- (3) 円形ピット内より橙色の坏（第4図、写真図版2-1）が出土したが、回転糸切り底の再調整のないものであることから、いわゆる赤焼き土器的な要素をもつものである。
- (4) 本遺跡の時期は、円形ピットの性格、出土遺物等から考え、平安中期から後期にかけてのものととらえたい。したがって、隣接する下赤林Ⅰ遺跡とほぼ同時期、ないしは、若干新しい時期のものであろう。
- (5) 下赤林Ⅱ遺跡は、調査前の杉・アカシアなどの植林によって既に遺跡の損傷があり、土層や遺物にも動きが認められた。なお、周辺が湿地状になっていたことから水はけが悪く、調査に困難を伴った。

参考文献

- 岡山県教育委員会（1977） 「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査」10
 岩手大学考古学研究会（1978） 「大館町遺跡」—縄文中期墓落社1976年度調査報告—
 宮城県教育委員会（1978） 「東北自動車道遺跡調査報告書」—上深沢遺跡—

下赤林Ⅲ遺跡

遺跡記号：SAB Ⅲ

所 在 地：紫波郡矢巾町赤林第12地割字的場他

調査期間：昭和47年12月2日～12月18日

調査対象面積：2560m²

平面実測基準点：東京起点485.700km (CA50)

基 準 高：海拔116.80m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅳ図・P 272、第V図・P 274）

下赤林Ⅲ遺跡は、紫波郡矢巾町赤林第12地割地区にあり、東北本線矢幅駅の北約2.4kmの東北本線沿いに位置する。遺跡の西方7～7.5kmには赤林山(855.5m)、南昌山(848.0m)などがあり、小規模な扇状地形が発達している。このように北上川中流域においては、奥羽山系から流出する支流が形成した大小の段丘化した扇状地群がある。これらの段丘については、すでに3群に大別がなされ、本遺跡北上川中流域北部についても、相当した段丘名が付されている。これによると、当遺跡付近は金ヶ崎段丘面に当たり、花巻以北ではそれに相当するものとして都南段丘と呼ばれる。この都南段丘と更に古期の二枚橋段丘の間には更に花巻段丘がある。本下赤林Ⅲ遺跡はこの花巻段丘の東縁部に位置する。

下赤林Ⅲ遺跡の近接地には、繩文～平安時代にかけての数多くの遺跡が存在する（別記）。繩文時代の遺跡としては、北約2kmに大渡野Ⅰ・Ⅱ遺跡、南野遺跡などがある。また、平安時代遺跡としては下谷地遺跡などがある。

以上その他に、周辺の花巻段丘面、都南段丘面には、原始・古代の遺跡が多く、更に中世の館等も知られている。（第Ⅳ表）

なお、遺跡の現状は主として畠地であるが、東南地区は湿地状の荒地も一部みられる。

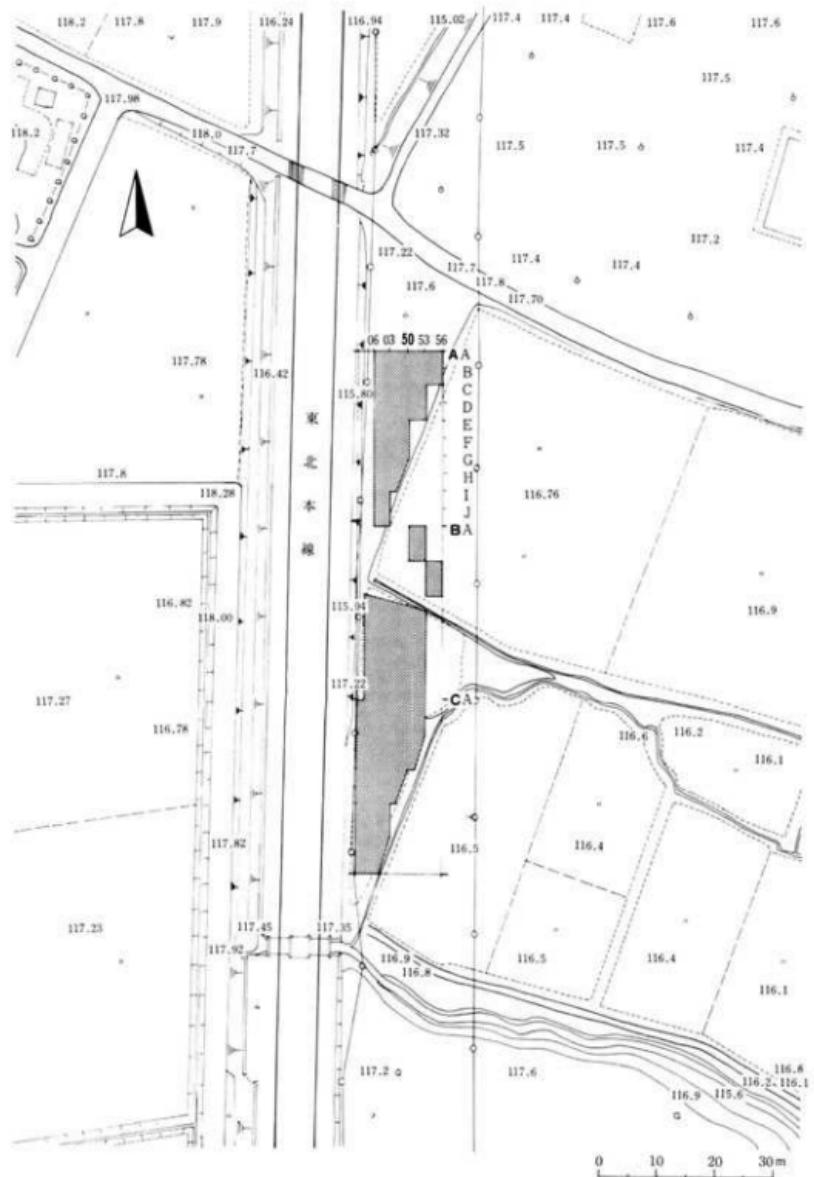
2. 調査の方法と経過

本遺跡は、昭和47年に実施した東北新幹線建設地内の遺跡分布調査によって発見された遺跡で、若干の土器片を表採した。調査は、まず路線敷内の遺跡全体を対象に3m×3mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去して遺構の検出につとめた。中心軸・基準点・基準高は別記のとおりである。

3. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層序（第2図）

CI09～CG09の東面壁の土層を観察すると次のようである。第Ⅰ層は耕作土であり、バサバサした黒褐色土である。第Ⅱ層は砂質土で、粒の荒い砂が混じり合った土層



第1図 下赤林Ⅲ遺跡グリッド配置図

である。このⅡ層は南側になる程厚くなり、砂の混入の割合も多くなる傾向を示している。第Ⅲ層は、粘性のある土質であり、木根の腐植したものなどが混入している。第Ⅳ層は地山層である。表土から地山までは約30~40cmである。

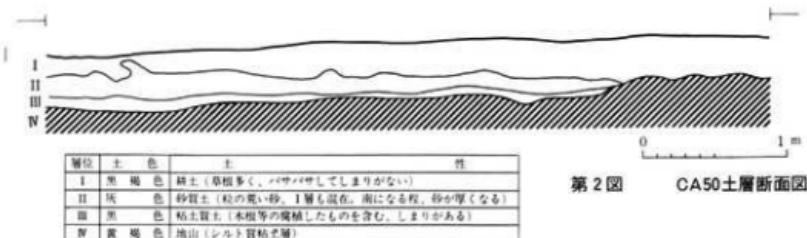
[2] 発見遺構と遺物

調査の結果、遺構は検出されなかったが、土器片10、石器26点が出土した。

土器

縄文土器（第3図・1~3、写真図版2-3・4・5）

6片出土したが、いずれも小片であり、全体の器形は不明である。口縁部・胴部・底部各2



第2図 CA50土層断面図

片の出土があった。1の口縁部は、やや外反しながら口唇部で丸味を有し、肥厚している。地文・文様は磨耗しており、不明である。胴部はきわめて小片のため観察できない。2・3の底部外面は立ち上がり部に圧痕がみられ、やや張り出し状になっている。2の底部に縄文痕があり、平底になっている。3は底部径が推定12cmであり、平底の深鉢形である。これら縄文片の胎土は、雲母の混入が多く、焼成も全般に悪く、もろい。色調は、内面が浅黄橙色を呈する。なお、底部外面に炭化物と思われるものが付着している。

土師器（第3図・5、写真図版2-3）

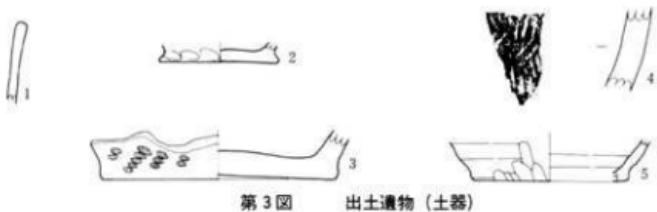
3片出土した。5は手すくねの小型斐型土器片である。底部は若干の張り出しがみられ、体部は広がりをもって立ち上がる。体部下半にタテ方向のミガキ状の痕跡がみられる。胎土は細砂が混入している。

須恵器（第3図・4）

斐型部1片だけ出土した。平行叩き目文が見られる。

石器（写真図版2-1・2）

26点出土したが、全て剥片石器である。刃部の位置、使用痕などから4類に分けられる。



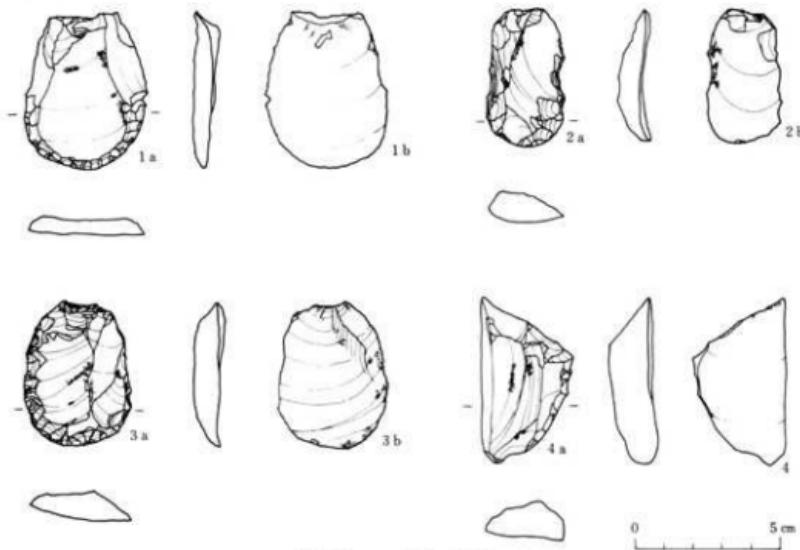
第3図 出土遺物（土器）

I類（第4図・1～4）

刃部を片面側から調整剥離して整形しており、刃部の角度は大きい。また、機能部の刃部を一縁端に弧状につけている。1・3は刃部を外弯状に作り出している。材質は1・2が凝灰質硬質頁岩であり、3・4は珪質頁岩である。

II類（第5図・1～6）

側縁に直状、あるいは内弯する刃部を有する。5は一側縁に若干の内弯する刃部が見られ、端部には使用痕が認められる。6は欠損品で、その全体の形狀は不明である。一部に刃部の作り出しがみられる。5は縁辺に破損がみられ、a面の剥離面の棱は磨滅しており、自然面も若干残っている。



第4図 石器（I類）

III類（第6図・1～5）

剥片の一部にリタッチを有するものである。縦長の剥片、横長の剥片と形状は様々であるが、縦長が多い。1は側辺に若干の調整剝離をしたやや三角形状のものであり、一部破損している。2はa面に自然面を残しているので、角礫から剝離された初期的なものとも思われる。

IV類（第7図・1～11）



第5図 石器（II類）

第1表

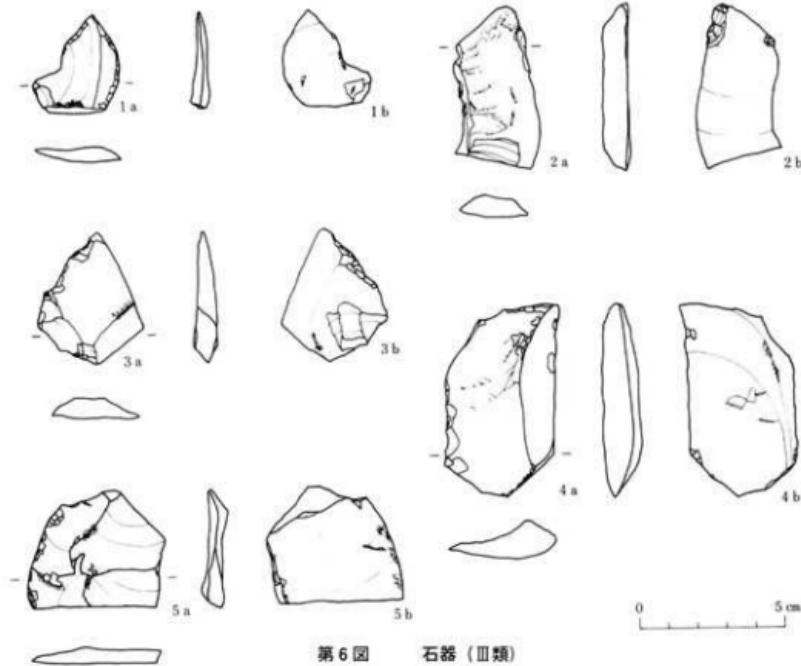
第I類石器計測表

国版番号	写真国版番号	出土層	計測値				石材	遺物記入番号	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
第4図・1	国版・2	II	47.0	37.0	7	23.2	燧灰質硬質頁岩	No.33	背凌山地・横手 ～零石以北のもの
2	"	"	46.5	24.0	9	16.2	燧灰質硬質頁岩	No.36	
3	"	"	49.0	37.5	9	22.4	珪質頁岩	No.31	
4	"	"	54.0	32.0	15	27.1	珪質頁岩	No.13	

第2表

第II類石器計測表

国版番号	写真国版番号	出土層	計測値				石材	遺物記入番号	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
第5図・1	国版・2	II	68.0	48.0	21.5	57.3	硬質頁岩	No.35	
2	"	"	53.0	21.5	11.0	10.1	珪質頁岩	No.28	
3	"	"	50.0	32.5	8.5	17.5	珪質頁岩	No.15	
4	"	"	74.0	26.5	1.1	18.1	燧灰質硬質頁岩	No.26	
5	"	"	69.5	22.0	6.5	11.2	硬質頁岩	No.32	
6	"	"	31.0	36.0	8.0	9.8	珪質頁岩	No.22	



第6図 石器(III類)